

坂井市埋蔵文化財発掘調査報告書

ろくろせやまこふんぐん
国史跡 六呂瀬山古墳群

2022

坂井市教育委員会



六呂瀬山 3 号墳 上段斜面葺石と埴輪列 (くびれ部)

卷頭図版 2 出土遺物



六呂瀬山 1 号墳 囲形埴輪（令和 2 年度・H トレンチ）



六呂瀬山 3 号墳 蓋形埴輪（昭和 60 年度）

序 文

坂井市は福井県の北部に位置し、市の南部を九頭竜川、北部を竹田川が流れ、西部で合流し日本海に注ぎ込んでいます。市の東部にある山間部には、北陸最大級の前方後円墳をもつ六呂瀬山古墳群をはじめとした古墳群、中世に白山信仰の拠点寺院として繁栄していた豊原寺や山城跡等、数多くの遺跡が残されています。

六呂瀬山古墳群は、市南西部に位置する丸岡町上久米田・下久米田の標高約 200 m の山頂に立地し、自然の尾根を改変して築造された前方後円墳 2 基（1・3 号墳）、方墳 2 基（2・4 号墳）の計 4 基で構成されています。1 号墳の全長は約 140 m で、北陸地方最大級の規模を有します。

昭和 46（1971）年、福井県大野市と石川県加賀市を結ぶ国道 364 号の建設工事に伴い、遺跡の分布調査が実施されました。昭和 53（1978）年の発掘調査の結果、貴重な遺構を持つ古墳群であることがわかり、道路計画を変更して古墳群を保護することになりました。さらに、昭和 60（1985）年の範囲確認の発掘調査の結果、平成 2（1990）年 5 月 16 日、16,352 m² の範囲が国史跡に指定されました。平成 4（1992）・平成 5（1993）年には、国庫補助事業として史跡指定地を公有化し、平成 10（1998）年に『史跡六呂瀬山古墳群環境整備基本計画報告書』、平成 15（2003）年に『国指定史跡六呂瀬山古墳群整備基本構想報告書』、平成 16（2004）年に『史跡六呂瀬山古墳群整備基本計画書』を策定しています。

今回は、平成 21（2009）～平成 25（2013）年度の史跡周辺調査、平成 30（2018）年度のアクセス道路建設に伴う 1 号墳と周辺の調査、令和元（2019）～令和 2（2020）年度の 1 号墳調査、昭和 60（1985）年度の 1・3 号墳調査の成果をまとめ、報告書を刊行することになりました。

1 号墳の調査は平成 30 年度から本格的に行われ、令和 2（2020）年度の調査では、塚や柵を模したと思われる円形埴輪が確認されました。

本書で報告するこれらの成果や出土遺物等が、学術資料としてだけでなく学校教育や生涯学習の場において活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました諸先生方、ならびに関係機関の方々に厚くお礼申し上げます。

令和 4 年 3 月

坂井市教育委員会
教育長 川元 利夫

例　言

- 1 本書は、国の補助を受けて、昭和 60 年度、平成 21 ~ 25 年度、平成 30 年度、令和元年度、令和 2 年度に実施した六呂瀬山古墳群（福井県坂井市丸岡町上久米田・下久米田所在）の発掘調査報告書である。昭和 60 年度の調査については、文化庁の指導のもと、現時点で報告を行った。昭和 60 年度の調査報告にあたり、昭和 53 年度の調査についても本文で記載した。
- 2 各年度の調査の概要、調査担当者は以下のとおりである。昭和 60 年度の調査は、旧丸岡町教育委員会から福井県教育委員会に依頼し、実施している。

平成 21 年度	堤徹也・清水邦彦
平成 22 ~ 24 年度	堤徹也
平成 25 年度	堤徹也・青山航
平成 30 年度、令和元年度	中田那々子
令和 2 年度	中田那々子・小林美土里

- 3 発掘調査、整理作業は坂井市教育委員会が実施した。墳丘測量図は『福井県埋蔵文化財調査報告 4 六呂瀬山古墳群 国道 364 号線建設に伴う発掘調査報告書（1988 福井県教育委員会）』収載の墳丘測量図を基礎として、現地に 4 級基準点を打設したうえで土地境界杭を図上に復元し、一部追加測量を実施して周辺地形図との調整を行った。基準点測量業務は平成 16 年度に株式会社イビソクに、土地境界杭の復元及び一部追加測量業務は平成 18 年度に株式会社空間文化開発機構に委託して実施した。
- 4 本書の編集は小林が行い、本書の執筆は中田、堤、小林が行った。また、執筆にあたり、高橋克壽氏（六呂瀬山古墳群調査整備委員会副会長：花園大学文学部教授）より玉稿を賜った。執筆の分担は以下のとおりである。

第 1 章第 1・2 節、第 2 章第 1 ~ 3 節、第 3 章第 2・3 節、第 4 節（1） 中田・小林
第 3 章第 1 節 堤
第 3 章第 5 節、第 4 章、第 5 章 小林
第 3 章第 4 節（2）、第 4 章 高橋克壽氏
- 5 出土遺物の実測は堤、小林が行い、昭和 60 年度の出土遺物の実測は花園大学考古学研究室の協力を得た。全実測図は五島一恵、松永勝代がトレースした。
- 6 本書掲載の写真は、遺構については調査担当者が撮影し、遺物については中田、堤が撮影した。
- 7 本書掲載の遺構測量図は調査担当者が作成し、堤、五島、松永がこれをトレースした。
- 8 発掘調査参加者は以下のとおりである（五十音順・敬称略）。

荒井利幸、上田清一、奥出テル子、川本りゆ子、川原基顕、小林信一、齋藤惠里、境谷雄二、笹原弘子、嶋田美根子、清水次雄、竹内美嘉代、多田恵子、谷口なよ美、

中嶋裕美、中山利雄、萩原喜代子、藤本洋人夢、法木 厚、半田さおり、前田千代子、
松本晃一、元井眞理子、森田真史、吉田邦雄

9 整理作業参加者は以下のとおりである（五十音順・敬称略）。

五島一恵、齋藤恵里、境谷雄二、竹内美嘉代、中嶋裕美、萩原喜代子、花園大学考古学研究室、
半田さおり、松永勝代、吉田邦雄

10 本書作成にあたり、以下の方々にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい（五十音順・
敬称略）。

青木豊昭、赤澤徳明、秋山綾子、浅野良治、安達俊一、清水孝之、鈴間智子、高橋克壽、
高橋浩二、仁科章、橋本博文、藤本康司、堀大介、御嶽貞義、三原翔吾、横幕真

11 発掘調査にあたり、六呂瀬山古墳群＆鳴鹿大塚を愛する会、上久米田区、下久米田区、鳴鹿コミュニティセンター、鳴鹿小学校、地権者各位に格別のご協力を賜った。記して感謝申し上げたい。

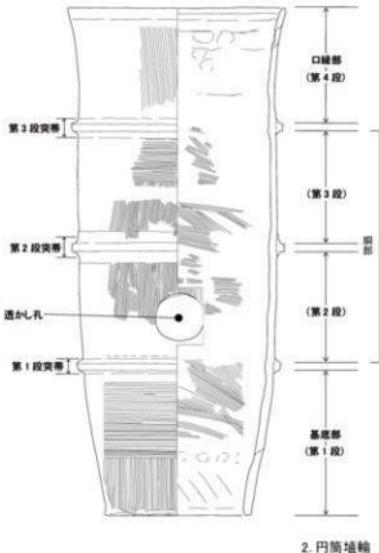
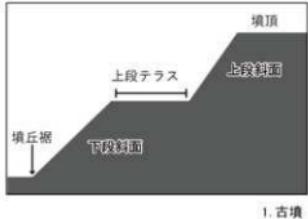
12 調査を進めるにあたり、平成 27（2015）年 9 月 1 日に六呂瀬山古墳群調査整備委員会を設置した。委員会は、考古学等の学識経験者で構成している。オブザーバーとして、地元関係者（鳴鹿まちづくり推進協議会会长、上久米田三ヶ区総区長、市議会議員）、文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門、福井県生涯学習・文化財課に出席いただいている。委員会では、事業ならびに調査に関する内容の協議、検討を行っている。

第1表 六呂瀬山古墳群調査整備委員会

役職	氏名	所属	専門分野
会長	仁科 章	坂井市文化財保護審議会代表	考古学
副会長	高橋克壽	花園大学文学部教授	考古学（古墳）
委員	青木豊昭	鯖江市文化財調査委員会委員長	歴史学
委員	橋本博文	新潟大学名誉教授	考古学（古墳）

凡 例

- 1 遺構番号は各年度と通し番号を組み合わせている。
- 2 本書で使用した座標は国土包含座標系第IV系に基づくものであり、方位は座標北を基本とする。
- 3 挿図は、計測単位をメートル法で表し、遺構図などの標高は海拔高度で示した。
- 4 挿図の縮尺は、挿図ごとに記した。
- 5 遺構図における断面の位置や立面等の見通し位置は、その両端を「—」で図中に示した。なお、古墳の各名称については以下の模式図のとおりである。
- 6 断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編 新版「標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修)に拠る。
- 7 遺物実測図の縮尺は、1/4を基本とした。
- 8 遺物観察表の計測値は、法量の項目をセンチ単位で表記し、欠損があるものは現存長を()で表記した。古墳の各名称ならびに円筒埴輪の各名称については以下の模式図のとおりである。



目 次

本 文

第1章 史跡の立地と環境	001
第1節 地理的環境	001
第2節 歴史的環境	002
第2章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の経緯	005
第2節 調査の経過	006
第3章 各年度の調査	
第1節 平成21～25年度の調査	
1 平成21年度	010
2 平成22年度	015
3 平成23年度	022
4 平成24年度	025
5 平成25年度	028
6 調査のまとめ	028
第2節 平成30年度・令和元年度・2年度の調査	
1 平成30年度	030
2 令和元年度	033
3 令和2年度	034
4 出土遺物	041
5 調査のまとめ	044
第3節 昭和53年度の調査	
1 調査のまとめ	047
第4章 考察	
第1節 古墳時代中期前葉の円筒埴輪と六呂瀬山3号墳の 埴輪	078
第2節 六呂瀬山古墳群からみた古墳時代中期の越前	087
第5章 まとめ	091

挿図目次

第1図 地質分類図	001
第2図 周辺道路分布図	003
第3図 指定範囲図	007
第4図 調査トレンチ配置図	009
第5図 A調査地地形測量図及びトレンチ配置図	012
第6図 A調査地トレンチ土層断面図	013
第7図 平成22年度出土遺物	015
第8図 B調査地地形測量図及びトレンチ配置図	016
第9図 Bトレンチ平面図及び土層断面図	017
第10図 Bトレンチ平面図及び土層断面図	019
第11図 Bトレンチ遺構平面図及び土層断面図	021
第12図 C調査地地形測量図及びトレンチ配置図	022
第13図 Cトレンチ平面図及び土層断面図	023
第14図 Dトレンチ平面図及び土層断面図	026
第15図 Eトレンチ平面図及び土層断面図	027
第16図 Eトレンチ平面図及び土層断面図	029
第17図 Fトレンチ平面図及び土層断面図	031
第18図 Gトレンチ平面図及び土層断面図	033
第19図 毁損箇所土層断面図	034
第20図 Hトレンチ平面図及び土層断面図	037
第21図 Iトレンチ平面図及び土層断面図	039
第22図 出土遺物実測図(円筒埴輪)	042
第23図 出土遺物実測図(形象埴輪)	043
第24図 出土遺物実測図(土師器)	044
第25図 昭和60年度遺構実測図	049
第26図 昭和60年度埴輪断面図	051
第27図 昭和60年度遺構実測図	053
第28図 昭和60年度エレベーション図	055
第29図 昭和60年度埴輪列布図	056
第30図 昭和60年度東西断面図	056
第31図 昭和60年度埴輪出土図	057
第32図 昭和60年度埴輪断面図	058
第33図 昭和60年度遺構断面図	058
第34図 昭和60年度遺物実測図	
円筒埴輪 I群	062
第35図 昭和60年度遺物実測図	
円筒埴輪 II群	063
第36図 昭和60年度遺物実測図	
円筒埴輪 III群	064
第37図 昭和60年度遺物実測図	
円筒埴輪 IV・V群	065
第38図 昭和60年度遺物実測図	
円筒埴輪 VI群	066

第39図 昭和60年度遺物実測図 円筒埴輪 VIII・IX群	067
第40図 昭和60年度遺物実測図 口縁部	068
第41図 昭和60年度遺物実測図 朝顔形円筒埴輪	068
第42図 昭和60年度遺物実測図 蓋形埴輪	070
第43図 昭和60年度遺物実測図 蓋形埴輪・形象埴輪	071
第44図 採取場所	074
第45図 採取遺物実測図	076
第4章 考察 高橋	
第1図 中期前葉の円筒埴輪（大阪）	082
第2図 中期前葉の円筒埴輪（奈良・六呂瀬山3号）	083
第3図 中期前葉の円筒埴輪（西日本）	084
第4図 中期前葉の円筒埴輪（東日本）	085
第5図 六呂瀬山3号墳（形象埴輪）	086
第4章 考察 小林	
第1図 古墳時代中期の越前の埴輪	089
第2図 古墳時代中期の越前の埴輪	090

図版目次

卷頭図版1 遺構	I
昭和60年度 Aトレント	
卷頭図版2 遺物	II
(1) 昭和60年度出土 蓋形埴輪	
(2) 令和2年度出土 圆形埴輪	
図版1 平成21年度遺構	094
図版2 平成21年度遺構	095
図版3 平成22年度遺構	096
図版4 平成23年度遺構	097
図版5 平成24年度遺構	098
図版6 平成25年度遺構	099
図版7 平成30年度遺構	100
図版8 平成30年度遺構	101
図版9 令和元年度遺構	102
図版10 令和2年度遺構	103
図版11 令和2年度遺構	104
図版12 昭和60年度遺構	105
図版13 平成30年度～令和2年度 六呂瀬山1号墳 出土遺物	106
図版14 平成30年度～令和2年度 六呂瀬山1号墳 出土遺物	107
図版15 平成30年度～令和2年度 六呂瀬山1号墳 出土遺物	108
図版16 昭和60年度 六呂瀬山3号墳 出土遺物	109
図版17 昭和60年度 六呂瀬山3号墳 出土遺物	110
図版18 昭和60年度 六呂瀬山3号墳 出土遺物	111
図版19 昭和60年度 六呂瀬山3号墳 出土遺物	112
図版20 昭和60年度 六呂瀬山3号墳 出土遺物	113
図版21 昭和60年度 六呂瀬山3号墳 出土遺物	114
図版22 昭和60年度 六呂瀬山3号墳 出土遺物	115
図版23 採取遺物	116

表目次

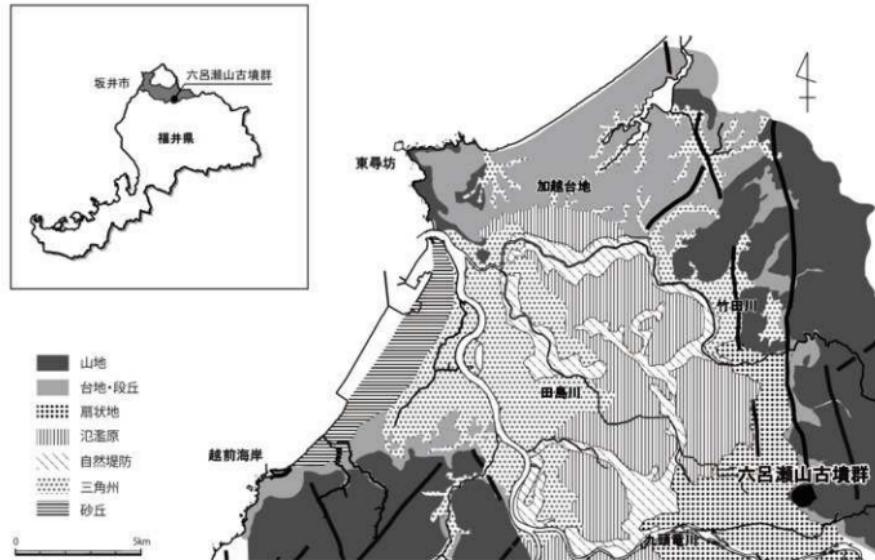
第1表 六呂瀬山古墳群調査整備委員会	V
第2表 道路一覧表	004
第3表 発掘調査の概要	006
第4表 平成30年度～令和2年度調査出土 円筒埴輪突堤分類	041
第5表 六呂瀬山1号墳観察表（円筒埴輪）	045
第6表 六呂瀬山1号墳観察表（圓形埴輪）	046
第7表 六呂瀬山1号墳観察表（土師器）	046
第8表 六呂瀬山1号墳観察表（石製品（砾石））	046
第9表 六呂瀬山1号墳観察表（石製品（石棺））	046
第10表 六呂瀬山3号墳遺物法量表（円筒埴輪）	061
第11表 採取場所一覧	074
第12表 表採遺物観察表（円筒埴輪）	077
第13表 表採遺物観察表（形象埴輪）	077

第1章 史跡の立地と環境

第1節 地理的環境

福井県は、本州中央部付近の日本海に面した場所に位置し、東西約130km、南北約100kmある。坂井市は平成18（2006）年3月20日に旧三国町、丸岡町、春江町、坂井町の4町が合併して誕生した市で、県北部に位置する東西に長い市である。市の西部には日本海、三里浜砂丘などの丘陵地があり、東部には山林が広がり、北部は加越台地の南限にある。市の中央部には扇状地が広がり、その広大な平地には水田地帯が形成され、それらを縦断するように九頭竜川、兵庫川などの河川が流れている。

六呂瀬山古墳群は、丸岡町上久米田の丘陵上に位置し、古墳時代に築造された古墳群である。古墳群は標高約200mの山頂に立地し、自然の尾根を改変して築造しているため、精緻な前方後円形をしていない。古墳群周辺は、西部が平坦地、東部が海拔1,044mの丈ヶ岳をはじめとする山林地帯となっている。山林地帯は東部にいくほど険しく、平坦部に隣接する部分は比較的緩やかになっている。平坦部は海拔7～20m程度で、九頭竜川の氾濫原として発達し、鳴鹿大堰付近を拠点としたなだらかな扇状地を形成している。



第1図 地質分類図

第2節 歴史的環境

本市では令和3年4月1日現在、374遺跡が確認されている。

古墳時代以前

市内で確認されるもっとも古い遺跡の時代は、後期旧石器時代である。代表例としてあげられる遺跡は、雄島遺跡、西下向遺跡、陣ヶ岡馬コロバシ遺跡等があげられる。昭和57（1982）・昭和58（1983）年に西下向遺跡は旧三国町が発掘調査を実施している。出土したナイフ形石器の製作技法は三国技法と命名されている。

また、近年、北陸新幹線の県内延伸にかかる発掘調査が進み、縄文時代中期から晩期の遺構や遺物が新たに確認されている。縄文中期の遺跡としては、東向野遺跡や東古市錦遺跡等がある。東向野遺跡から出土した重弧紋土器は、県内では珍しいもので、長野県の遺跡でよく出土している型式の土器と同じものと思われる。このことから、当時、長野県周辺との交流があったことがうかがえる。

弥生時代の遺跡では、玉作工房跡や銅鐸等の祭祀関係のものがある。銅鐸は、市内の春江町井向や三国町米ヶ脇で確認されているほか、銅鐸の鋳型が出土している。

古墳時代

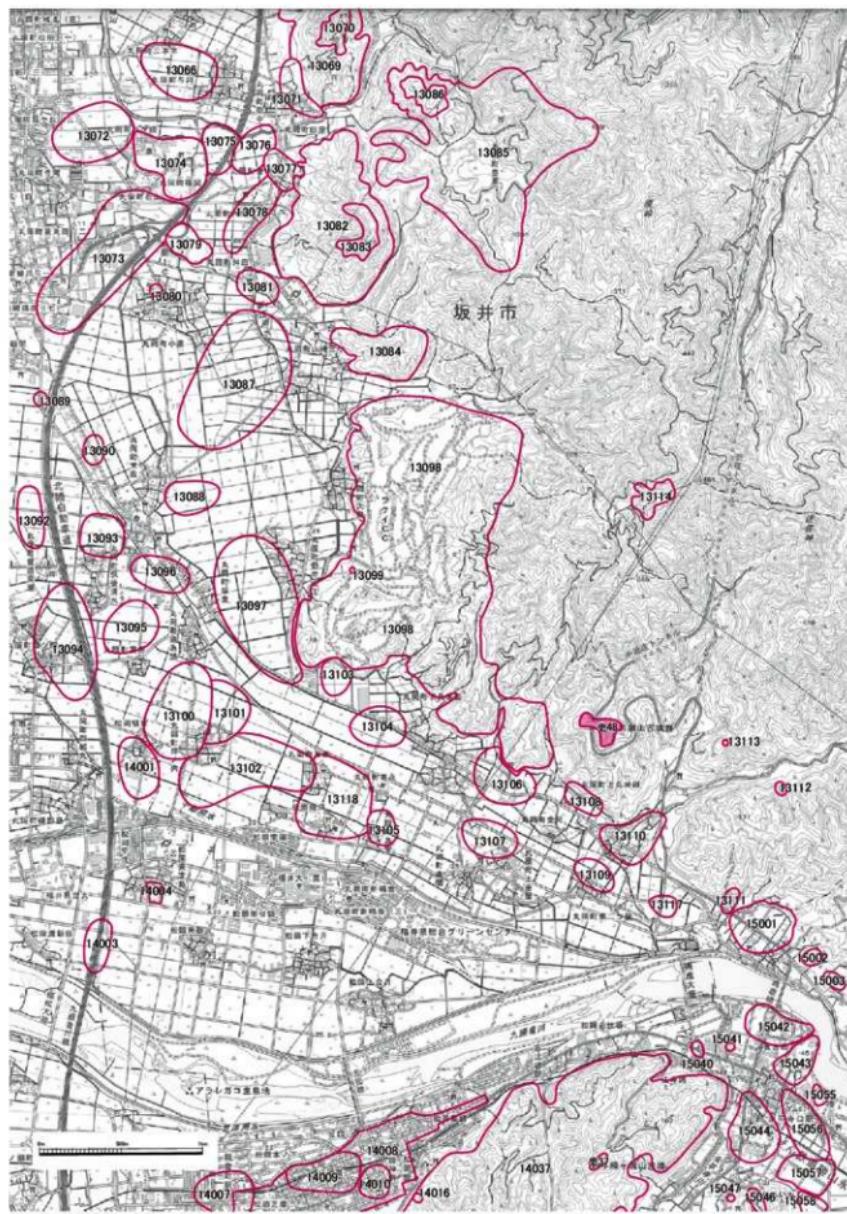
市内374遺跡のうち、複数の時代にまたがるが、最も多いのが古墳時代を含む遺跡で216箇所である。市内には、北隣のあわら市にまたがる横山古墳群を含めると、500基を超える古墳がある。古墳群は主に丸岡町山間部の平野側一帯、丸岡町とあわら市の市境の山中、三国町沿岸部に分布する。現在、消滅している御野山古墳にあつたとされる割竹形石棺は、牛ヶ島石棺と呼ばれており、越前最古のものと考えられている。広域首長墓で大型の重要古墳にあたる前方後円墳の分布は丸岡町内に限定されており、六呂瀬山1号墳、3号墳、楓賀山古墳が確認されている。その中でも、六呂瀬山古墳群は、九頭童川対岸に位置する手練ヶ城山古墳とともに福井平野における広域首長墓であったと言われている。周辺の古墳群とあわせて、首長墓の系譜に並べられるもので、本市だけでなく福井県、北陸地方の古墳時代史を語る上で重要な古墳群である。また、時期は不明であるが、市内には女形谷古墳群、赤坂古墳群、曾々木古墳群等がある。

古代

市内には古代から中世にかけて東大寺・興福寺の莊園があり、子見莊の比定地周辺にある大味上遺跡や大味中遺跡等の大味地区遺跡群では、準構造船の船底を利用して井戸が検出され、その井戸から皇朝十二錢の神功開寶賽が出土している。平成9（1997）年に調査された大味上遺跡（西前田地区）では、ヘラ記号が施された墨書き土器等が出土している。また、古代の瓦窯跡である箱屋谷遺跡や野中山王窯跡等がある。箱屋谷遺跡では布目瓦等が採取され、野中山王窯跡では須恵器壊蓋・身、平瓶等が確認されている。

中世

市内の東部山中には、大宝2（702）年、泰澄大師によって開基された豊原寺がある。豊原寺では、天正3（1575）年の織田信長による焼き討ちに遭い消失したが、江戸時代、福井藩により一部再興された。現在、豊原寺跡は市史跡となっているが、寺域が広大であるため、その全容は未解明である。昭和54（1979）年～昭和59（1984）年には旧丸岡町が僧房跡、華藏院跡、伝講堂跡等の発掘調査を実施し、下屋敷地では青銅製の仏具や燈明具、轆の羽口も確認され、鍛冶工房としての利用も考えられている。また、中世墓地では五輪塔や宝篋印塔、石仏といった石造物も確認されている。平成22（2010）年には白山神社の発掘調査を実施し、大量の土師皿が出土していることから、飲食儀礼が行われていた可能性があり社寺の中心的施設を示している。市東部の尾根上には雨乞山城跡、田屋赤坂城跡等の山城もある。近年、開発に伴う踏査において曲輪、堀切等といった山城遺構が確認されている。



第2圖 周邊遺跡分布圖

第2表 遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	時代	種類	遺跡番号	遺跡名	時代	種類
13066	与河遺跡	古墳・奈良・平安	散布地	13106	下久米田遺跡	古墳～中世	散布地
13069	赤坂古墳群	古墳		13107	上金屋遺跡	弥生・古墳・近世	散布地
13070	田屋赤坂城跡	中世	城跡	13108	六呂瀬遺跡	不詳	散布地
13071	田屋遺跡	中世	散布地	13109	東二ツ塁遺跡	中世・近世	散布地
13072	八ヶ郷遺跡	不詳	散布地	13110	上久米田遺跡	繩文・奈良・平安	散布地
13073	里丸岡遺跡	古墳		13111	箱星谷遺跡	奈良・平安	散布地
13074	篠岡遺跡	不詳	散布地	13112	大福寺遺跡	中世	寺院跡
13075	吉毛遺跡	不詳	散布地	13113	上久米田古墳	古墳	
13076	大水口遺跡	平安・中世	散布地	13114	近庄城跡	中世	山城
13077	曾々木谷田遺跡	平安・中世	散布地	13117	東二ツ塁東遺跡	古墳～平安	散布地
13078	曾々木・内田遺跡	平安・中世	散布地	13118	友末遺跡	弥生～中世	散布地
13079	東向野遺跡	繩文		14001	領家遺跡	奈良～中世	散布地
13080	西光寺城跡	中世	城跡	14003	渡新田前定遺跡	奈良・平安	散布地
13081	坪田大蔵遺跡	繩文・中世	聚落跡	14004	兼定島遺跡	不詳	寺院跡
13082	曾々木古墳群	古墳		14007	室遺跡	弥生・古墳・鎌倉	集落跡
13083	雨乞山城跡	中世	城跡	14008	松岡城跡	近世	城跡
13084	山崎三ヶ城跡	中世	城跡	14009	葵遺跡	弥生～中世	聚落跡
13085	豊原寺跡	平安・中世	寺院跡	14010	神明遺跡	奈良・平安	散布地
13086	三上山城跡	中世	城跡	14016	弁財天谷蒸跡	古墳	蒸跡
13087	山崎三ヶ・小黒遺跡	古墳・平安・中世・近世	散布地	14037	松岡古墳群	弥生・古墳・中世	古墳・城跡
13088	末政前田遺跡	古墳・奈良・平安	散布地	15001	鳴鹿遺跡	繩文・奈良・平安・近世	散布地
13089	新間安永遺跡	奈良・平安	散布地	15002	鳴鹿龜行田沖遺跡	奈良～中近世	散布地
13090	末政橋山遺跡	奈良・平安	散布地	15003	鳴鹿上前田遺跡	奈良・平安・近世	散布地
13092	高瀬中郡遺跡	弥生～平安・近世	散布地	15040	法寺岡山岸遺跡	奈良～近世	散布地
13093	板倉中島遺跡	古墳		15041	東古市鏡遺跡	繩文	散布地
13094	四少柳遺跡	古墳・中世・近世	散布地	15042	東古市觸手遺跡	奈良～近世	散布地
13095	星和原遺跡	弥生・古墳	散布地	15043	津室山遺跡	繩文・奈良・平安	散布地
13096	板倉嶋遺跡	弥生・古墳	散布地	15044	東古市馬場遺跡	奈良～中世	散布地
13097	野中山王遺跡	弥生・古墳	散布地	15046	大煙窓跡群	古墳	蒸跡
13098	丸岡古墳群	古墳		15047	瀬訪間古墳群	古墳	古墳
13099	野中山王荒跡	古墳	荒跡	15055	東古市津室遺跡	繩文・奈良～中世	散布地
13100	油為須遺跡	古墳～平安	散布地	15056	東古市天王遺跡	繩文・奈良～中世	散布地
13101	坪ノ内大田遺跡	古墳～平安	散布地	15057	高橋遺跡	旧石器・繩文・奈良～近世	散布地
13102	坪ノ内遺跡	奈良・平安	散布地	15058	池ノ谷遺跡	古墳～平安	散布地
13103	下久米田新田遺跡	古墳		史 37	手縫ヶ城山古墳	古墳	古墳
13104	下久米田長畠遺跡	弥生・古墳	散布地	史 48	六呂瀬山古墳群	古墳	古墳
13105	為安遺跡	弥生・古墳	散布地				

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

六呂瀬山古墳群は、国史跡の指定前に、国道364号整備計画に伴い、昭和53（1978）年度に福井県教育委員会が発掘調査を実施している。昭和60（1985）年度には古墳群の範囲を確認する目的で旧丸岡町教育委員会が福井県教育委員会に発掘調査を依頼し、実施している。

平成2（1990）年5月6日の国史跡指定後に、環境整備事業を推進する目的で平成10（1998）年に環境整備基本計画を策定している。平成15（2003）年には新たに史跡公園化に向けた整備基本構想、翌年の平成16（2004）年には整備基本計画を策定した。

国史跡の指定後、初めて実施された本格的な調査は、平成21（2009）～25（2013）年度に、史跡周辺で古墳群の存在を確認するために行われた発掘調査である。平成30（2018）年度には、国道364号沿い駐車場から1号墳までに向かうアクセス道路の整備により、1号墳とその周辺を保護する目的で発掘調査を実施した。令和元（2019）年度は1号墳の基礎情報を得る目的と獸害による毀損状況を把握する目的で発掘調査を実施した。令和2（2020）年度も前年度に引き続き、1号墳の基礎情報を得る目的で発掘調査を実施した。

ア. 指定告示

【名 称】	六呂瀬山古墳群
【所在地】	福井県坂井市丸岡町上久米田42字、43字、44字、下久米田56字
【指 定】	国指定 史跡
【指定年月日】	平成2年（1990）5月16日
【指定基準】	一、貝塚、集落跡、古墳その他この類の遺跡

イ. 指定説明文とその範囲

【説明文】（「国指定文化財等データベース」より転載、一部加筆修正）

六呂瀬山古墳群は、奥越山地を貫流してきた九頭竜川が、まさに福井平野に流れ出た右岸の六呂瀬山頂に位置する。この付近の標高50～200mの丘陵上には、約130基の古墳が分布しており、丸岡古墳群と総称されている。これに対し、左岸の丘陵上には、国史跡手縄ヶ城山古墳をはじめとする松岡古墳群（吉田郡永平寺町所在）が分布しており、九頭竜川を挟んで両古墳群が対峙した形をとっている。

六呂瀬山古墳群は、丸岡古墳群の東南端に位置し、標高200mの高所にあって、前方後円墳2基と方墳2基からなる。昭和53年に福井県教育委員会、昭和60年には旧丸岡町教育委員会が、墳丘の範囲確認調査を実施しており、各古墳の墳形や規模が明らかになった。本古墳群の頂上から西方をみると、九頭竜川の形成した坂井平野を挟んで日本海が眺望でき、南に目を転ずると松岡古墳群、また足羽川流域に福井市街や足羽山などを眺めることができる。

本古墳群は、いずれも丘陵尾根上に築造されているため、自然地形の制約を受けており、墳形は必ずしも整美なものとは言い難い。1号墳は、墳丘主軸がほぼ南北にそろう前方後円墳で、後円部を北に、前方部を南におく。全長は140mで、北陸地方最大級の規模を有する。後円部の径は78m・高さ13m、前方部の長さは52m・幅は58m・高さは11mを測る。墳丘は二段築成で、葺石と埴輪（これまでに円筒と家形が確認されている）を有している。後円部東部に、東西27m・南北15m・高さ4.2mの半円形の張出がある。後円部頂上には、盃掘坑があつて、この周辺から凝灰岩製の石棺破片が採集されているので、内部主体は石棺と推定されている。1号墳の築造年代は、墳形・埴輪などからみて、4世紀末から5世紀初頭までの頃と考えられている。なお、後円部張出部の東方に、掘割を隔てて、東西16m・南北14m・高さ2.2mの、

不整形な方形の2号墳がある。1号墳の陪塚と考えられるが、葺石と埴輪はない。

3号墳は、墳丘主軸をほぼ東西方向にそろえた前方後円墳で、後円部を西に、前方部を東におく。前方部の上面前端は、1号墳の後円部西裾にはほとんど接しており、前方部前面がないという特異な形をしている。全長85mで、後円部は径48m・高さ11m、前方部は長さ37m・幅48m・高さ9mを測る。墳丘は二段築成で、葺石と埴輪（これまで円筒の他、家形、單甲形、衣蓋形、盾形などの形象埴輪が採集されている）を有している。後円部北裾に、北に向かって東西11m・南北11m・高さ2.7mの張出がある。墳形や埴輪から、3号墳の築造年代は、1号墳よりやや遅れる5世紀前葉と考えられている。また、1号墳と同様に、張出部の北方に浅い堀割を隔てて東西13m・南北16m・高さ2.7mの規模の不整形な方形の4号墳が存在している。

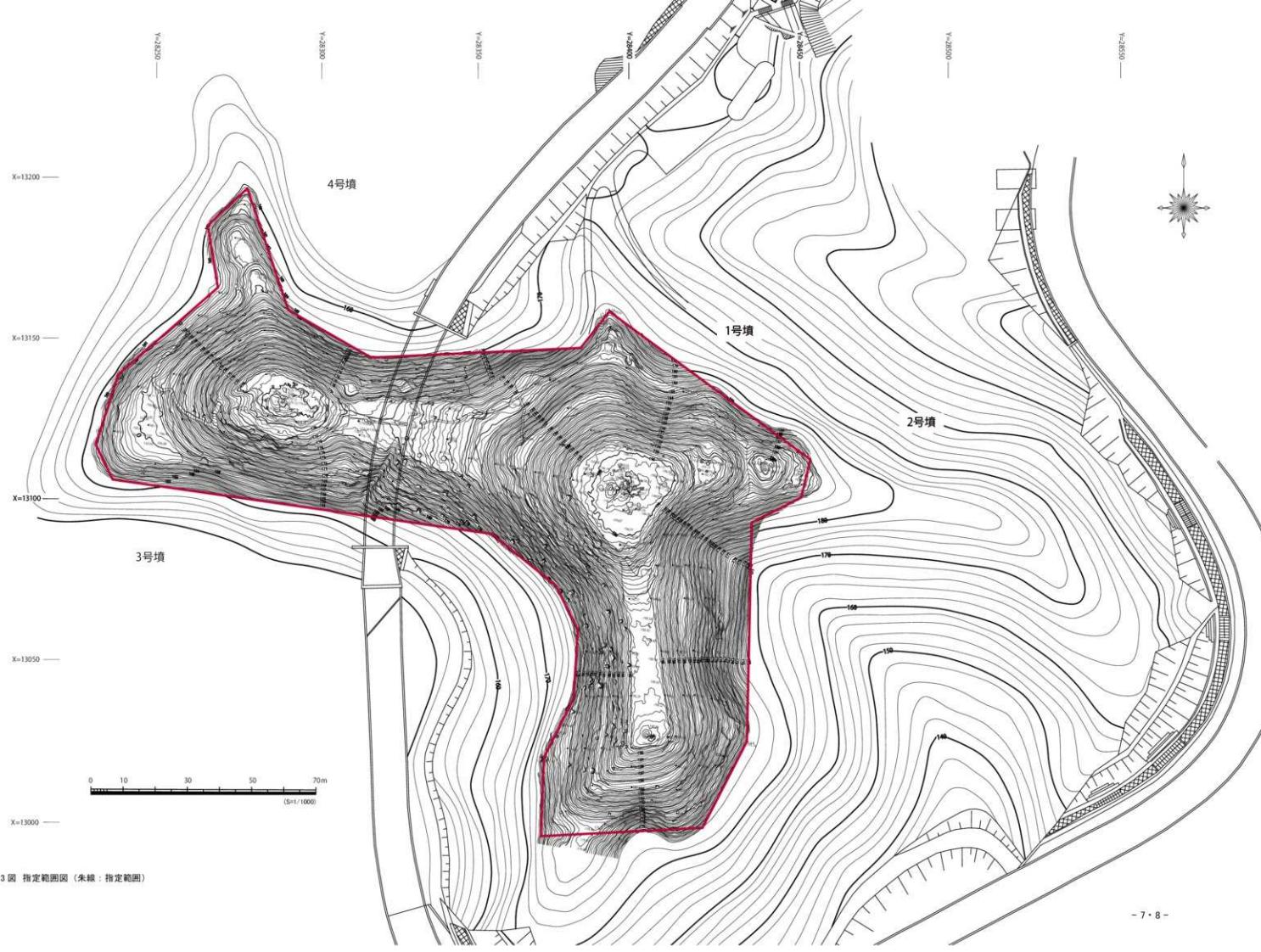
六呂瀬山古墳群は、その立地、規模、内容などから、対岸に位置する手縁ヶ城山古墳とともに、4世紀末から5世紀前葉にかけての福井平野における広域首長墓であったとみられる。これらの古墳は、北陸地方の古墳時代の解明に欠くことのできない、古代における越国の形成とその発展を知る上で、極めて貴重な資料となるものと考えられる。よって、これらを史跡に指定して、その保存を図ろうとするものである。

第2節 調査の経過

平成21年度以降、各年度の調査時期、調査場所は下記のとおりである。全ての調査において、埋蔵文化財緊急調査事業の国庫補助金の交付を受けて実施している。

第3表 発掘調査の概要

年度	調査期間	調査場所
平成21	2009.8.24～2009.9.30	1号墳後円部北に続く尾根上
平成22	2010.7.26～2010.9.30	2号墳周辺東側に続く尾根上
平成23	2011.8.29～2011.10.11	1号墳前方部南西に続く尾根上
平成24	2012.9.10～2012.10.19	3号墳後円部南西に続く尾根上
平成25	2013.8.26～2013.9.20	4号墳北西に続く尾根上
平成30	2019.2.18～2019.3.12	1号墳後円部北と北西に続く尾根上
令和元	2020.2.25～2020.3.19	1号墳後円部北と北西の獣害箇所
令和2	2020.11.4～2020.12.7	1号墳後円部北と西



X=13250

Y=24250

Y=24300

Y=24350

Y=24400

Y=24450

Y=24500

Y=24550

X=13200

X=13150

X=13100

X=13050

X=13000

Eトレーニチ

Fトレーニチ

Aトレーニチ

Gトレーニチ

損傷箇所

Bトレーニチ

Dトレーニチ

Hトレーニチ

Iトレーニチ

Cトレーニチ

0 10 30 50 70m
(S=1/2000)



第4図 調査トレーニチ配置図

第3章 各年度の調査

第1節 平成21～25年度の調査

専門家などから、「古墳群が4基で完結しているのか、周辺整備予定地に関連遺跡が無いことを確認すること」との指摘を受け、指定範囲外で試掘調査を実施することとした。

古墳群は標高約200mの山頂に立地し、自然の尾根を改変して築造しているため、整美な前方後円形をしていない。古墳群は5つの尾根が合流する地点に築造されているため、連続する尾根上に古墳群が広がっている可能性が考えられた。調査の計画は5年間とし、六呂瀬山古墳群につながる尾根上に試掘トレンチを設定し、調査を実施した。

1 平成21年度（1号墳後円部北側）

現況地形は1号墳後円部北側に三角形の平坦面があり、平坦面の端までが指定範囲になっている。平坦面の端から約40m北に約10m下がる。この地点が尾根の幅の最も狭い箇所で、西側は道路によって削平されており、東側は谷筋が続いている。この地点から北は尾根の幅がやや広く緩やかな傾斜を持って北部の尾根につながっていたが、道路によって尾根は切断されている。

（1）調査トレンチ

A-1トレンチ

指定範囲のすぐ北側にあたるA-1トレンチは、尾根筋上を登山道が通っているため、東にずらした場所にトレンチを設定し、約8mの高低差をもつトレンチを設定した。

指定範囲北端から約3m北でわざかなく平坦面を確認した。幅約2.5mで、東に向かって三角形に平坦面を形成していた。小平坦面より北側はなんだかに傾斜し、谷筋にぶつかる。

表土を除去した下層は黄色土と表土の混層が堆積し、その下に混じりけのない黄色土が堆積していた。この黄色土は地山風化層と考えられ、本層を地山と判断し、以後の調査を進めた。

地山の土色は黄色の強い地山と赤色が強い地山の二種が確認できたが、色味の違いはあるものの両者とも地山風化層であることが確認できたことから、以後のトレンチについても、このいずれかをもって地山と判断した。

トレンチ南端から約3mの地点で、表土直下から埴輪片1点を確認した。また、地山と表土の混層中からは葺石であったと思われる川原石が複数確認できた。地山の地形は現況の地形とほぼ等しく、遺構と判断できるものは見られなかつた。

A-2トレンチ

A-1トレンチの北西、登山道を挟んで尾根の中央付近に設定した。登山道の敷設によるものと考えられる畝が東側に走っている。トレンチの西側は国道建設に伴って大きく削平を受けている。トレンチの北側には国道からの登り口と登山道があるため、登山道手前までを調査区とした。調査区の地形は北に向かって下に傾斜し、両端の高低差は約80cmである。

表土の下は地山と表土の混層、その下に地山層を確認することができた。トレンチ南端では、下層に比べて上層の土のしまりが弱かったため、サブトレンチを設定して掘り下げを行ったが、黄色土の堆積は40cm以上続き、よく締まった地山と判断できる層と土質・土色ともに違いが見られなかったことから、黄色土上面が地山面と判断した。トレンチ南端から約10m付近を中心にして、表土の直下から角礫が大量に確認された。表土の除去を進めたところ、東西約4m、南北約3mの範囲に横円形に集積されていることがわかつた。集積されている礫は同山地の基盤層と思われる凝灰岩の礫で、小さいものは5cm程度、大きいものでは30cm程度の礫が集積されていた。幅1mのトレンチでは判断できなかつたため、東西方向に若干拡張し、遺構の広がりを確認したが、東側はクヌギの大木があり、確認することはできなかつた。トレンチ並行方向で断ち割りを実施したところ、

南北で掘り方を確認し、約 60 cm 下まで続いていることがわかった。

なお、本遺構に伴う土器等の遺物は出土していないため、遺構の時期決定には至っていない。

A-3トレンチ

今回調査の北端に位置するトレンチで、国道に並行する約 20m のトレンチである。地形は北に向かってわずかに高くなり、南側は約 7m の平坦面がある。本トレンチの南側にはマウンド状の地形があり、トレンチの南端はマウンドの端にかかるように設定した。

トレンチの大半では表土は薄く、表土直下に地山と表土の混層、その下層に地山が確認できた。表土の直下で河原石を数点確認することができた。南端の南側マウンド端部にあたる部分では、溝状の遺構を確認することができた。地山は岩盤層まで削られ、南側マウンドの端部を整形している。マウンド側の地山は赤みが強く脆い泥岩で、北側の地山は黄色の強い泥岩である。地山の上に炭化物層があり、黒く円形に広がっていた。厚さは 3 ~ 5cm 程度で、特に濃い層と他の土が多く混じった層の 2 つを確認した。遺構内から遺物は出土していない。

地形から判断して、溝は西に向かって南に屈曲し、東側は緩やかに消える。現状で遺構の時代を決定するには至っていない。

A-4トレンチ

地形測量の結果から、楕円形のマウンドが確認されたため、主軸に平行する南北トレンチと直交する東西トレンチの十字にトレンチを設定した。

南北トレンチは約 28 m で、マウンド長軸を縦断する。北側は方形の段状に整形されているような地形で、登山道として利用されているためか、表土はほとんどなく地山が露出している部分が確認できた。マウンド中央付近は表土が薄く、表土の直下は地山と表土の混層がわずかに堆積し、すぐに地山を確認した。地山の礫が表土近くで確認でき、サブトレンチを掘削したが掘り方は確認できなかった。表面は削り取られている可能性も否定できないが、判断できなかった。南側は傾斜がややきつ、トレンチ南端でやや平坦になる。南北トレンチ南端付近で表土直下から笏谷石片を探取した。石棺片と思われる。

東西トレンチは約 20 m で、西側はほぼ平坦であるのに対し、東側の傾斜はきつい。土層は表土直下に地山と表土の混層、その下に地山というものである。西側に比べて東側の堆積層は薄い。

調査の結果、マウンドの北側から北西の溝状の掘り込みまで、地山を削って整形している可能性が高い。A-3トレンチで確認した溝はマウンド北西の方形の段を整形しているかたちである。

上述の笏谷石片以外の遺物は採取できなかった。

A-5トレンチ

六呂瀬山古墳群から続く尾根の最低部からマウンドまでの間の緩やかな傾斜地にあたる。東西 10 m ほどのほぼフラットな地形はヒノキが植林されており、東側の登山道との間に歎状の地形が確認できる。植林された木の間を通すかたちで約 27 m のトレンチを設定した。

表土は他のトレンチに比べて薄く、流土も薄い。植林するために削平を受けていると考えられる。表土直下から河原石が 2 点確認できたが、土器等の遺物は確認できなかった。

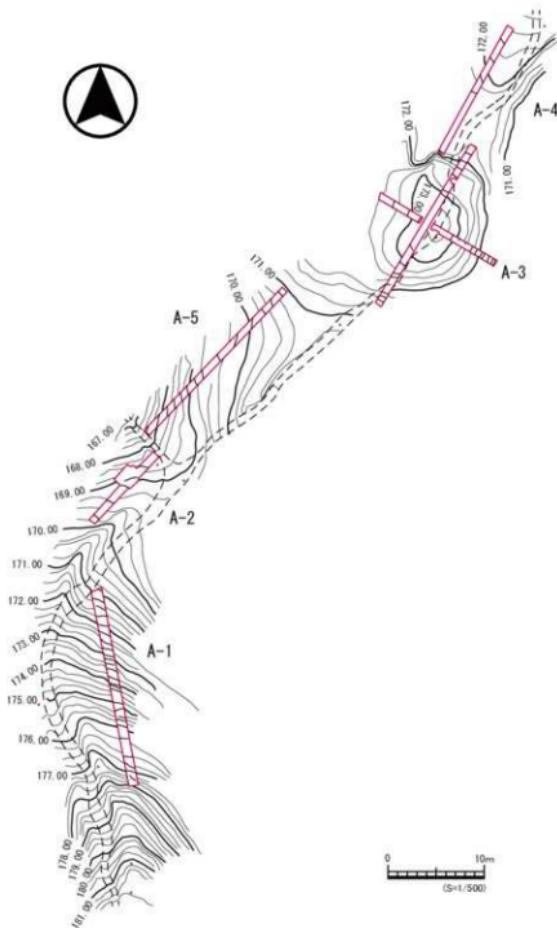
(2) 出土遺物

埴輪片

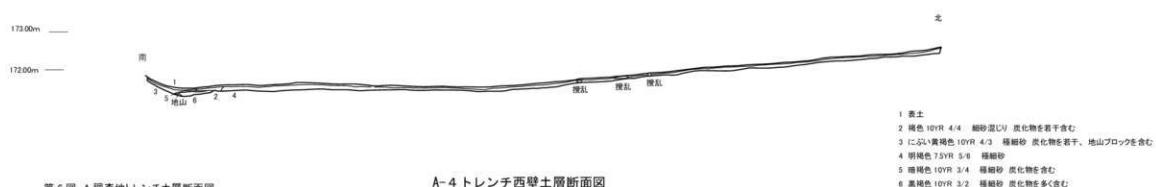
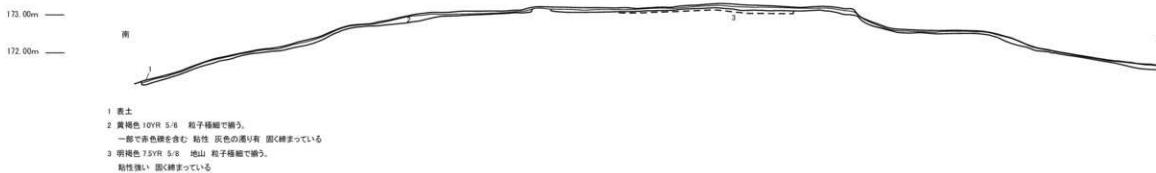
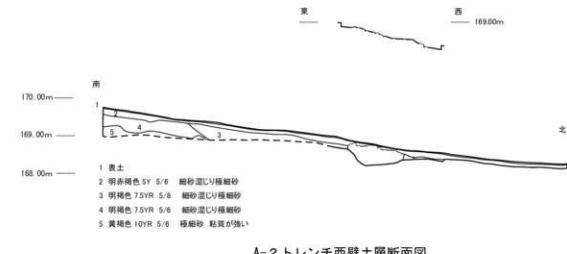
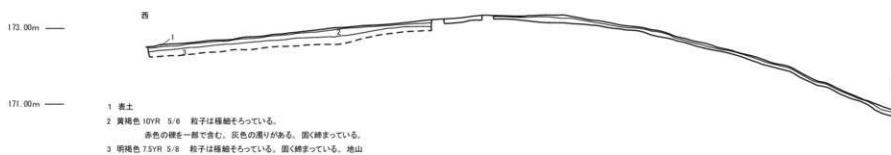
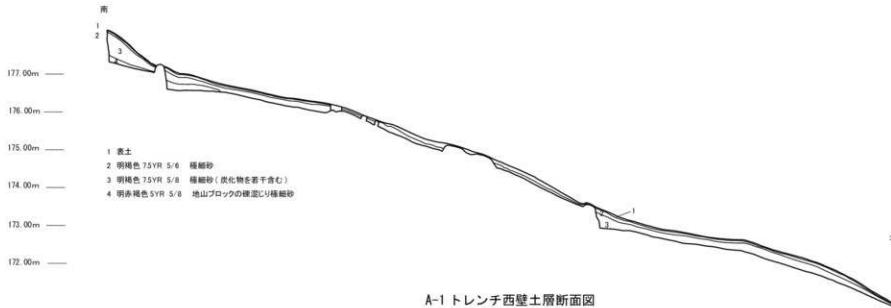
A-1トレンチ流土中から出土。円筒埴輪の体部で、縦ハケが確認できる。砂粒を含み外面は黄褐色、内面は黒褐色。焼成は良好である。

石棺片

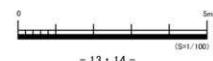
A-4トレンチ表土中から出土。蓋もしくは身の内面、底部と側面の境目付近と思われる。材質は笏谷石で、細かな気泡が確認できる。



第5図 A調査地地形測量図及びトレーンチ配置図



第6図 A調査地トレンチ土層断面図



2 平成 22 年度（2 号墳東側尾根）

（1）調査トレーニチ

Bトレーニチ

現状の地形は、2 号墳東側の平坦面端から約 40 m は急峻な自然地形である。その先に約 25 m の平坦面とわずかな高まりが確認され、南東方向に屈曲して 60 mほどで国道に削られた斜面にぶつかる。尾根は幅の狭い痩せ尾根で、東端で山道と思われる産みが確認されたが、その他に人工的な地形は確認できなかった。

堆積は極めて薄く、表土層の直下で地山層を検出している。岩盤は黄色の堆積岩で、風化が進んでいるためか、上層でも地山の礫の混入が確認できた。基本的な層序としては、堆積岩の岩盤が地山で、その上層に岩盤風化層が堆積する。岩盤風化層は土質が均質で混入物はない。その上層に地山風化土と表土と思われる灰色の渦りがある層があり、これが上方からの流水と判断できる。

遺構はわずかな高まりを挟むようにして 2か所確認することができた。いずれも隅丸方形の土坑で、焼土と炭化物層が 2 層ずつ確認できたことから、最低 2 回ずつ火を焚いたと思われる。

土坑 1 は高まりの西側で確認された。隅丸方形で深さは約 20 cm と浅い。長軸は尾根に直交させ、約 120 cm、短軸は尾根に並行して約 60 cm である。

土坑 2 は高まりの東側で確認された。隅丸方形で深さは約 60 cm とやや深い。長軸は尾根に並行するがわずかに東に振れて約 100 cm、短軸は約 70 cm である。下層と上層で土坑の掘り方がややすくなっていたことから、60 cm 程度掘って火を焚き、一度埋めた後に再度浅く掘って火を焚いていると推測される。

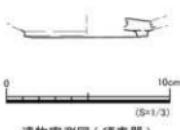
いずれの土坑からも遺物は確認できず、時期を特定することはできない。土坑 2 のさらに東側で表土中から須恵器片を 1 点採取している。

いずれの土坑も古墳群に関連する遺構とは考え難く、2 号墳の東側尾根には古墳群は広がっていないと判断して良いだろう。

（2）出土遺物

須恵器

器種は不明であるが、高台部分である。高台の復元径は 7.6 cm で、焼成は良好である。

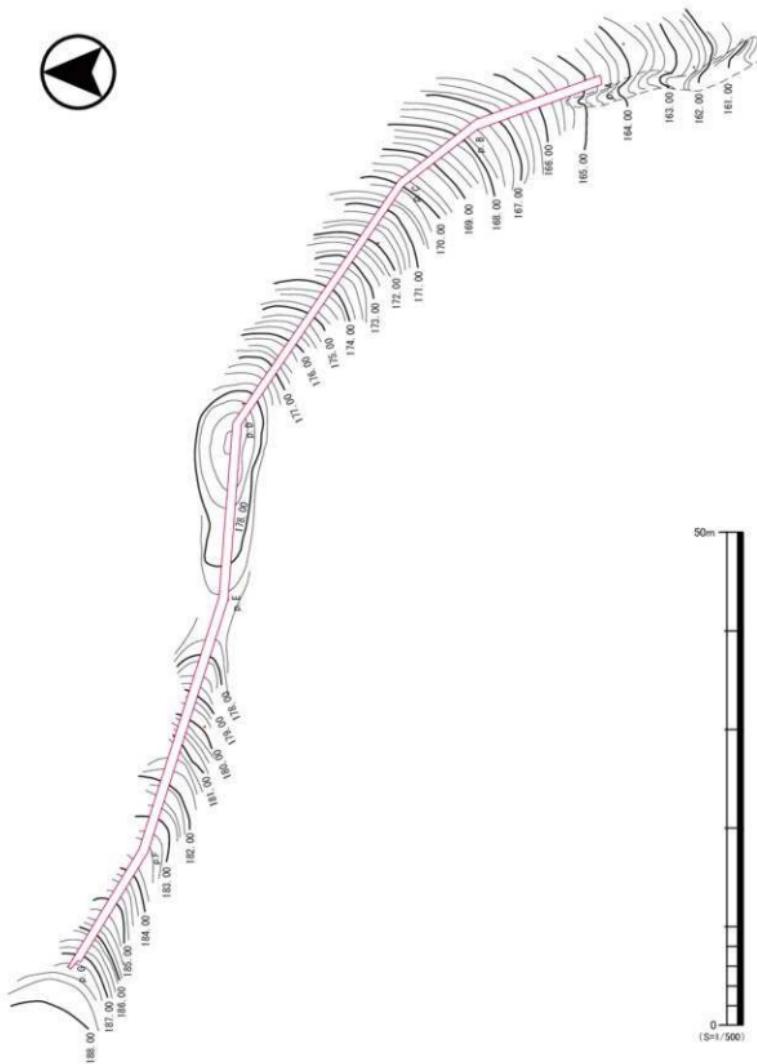


遺物実測図（須恵器）

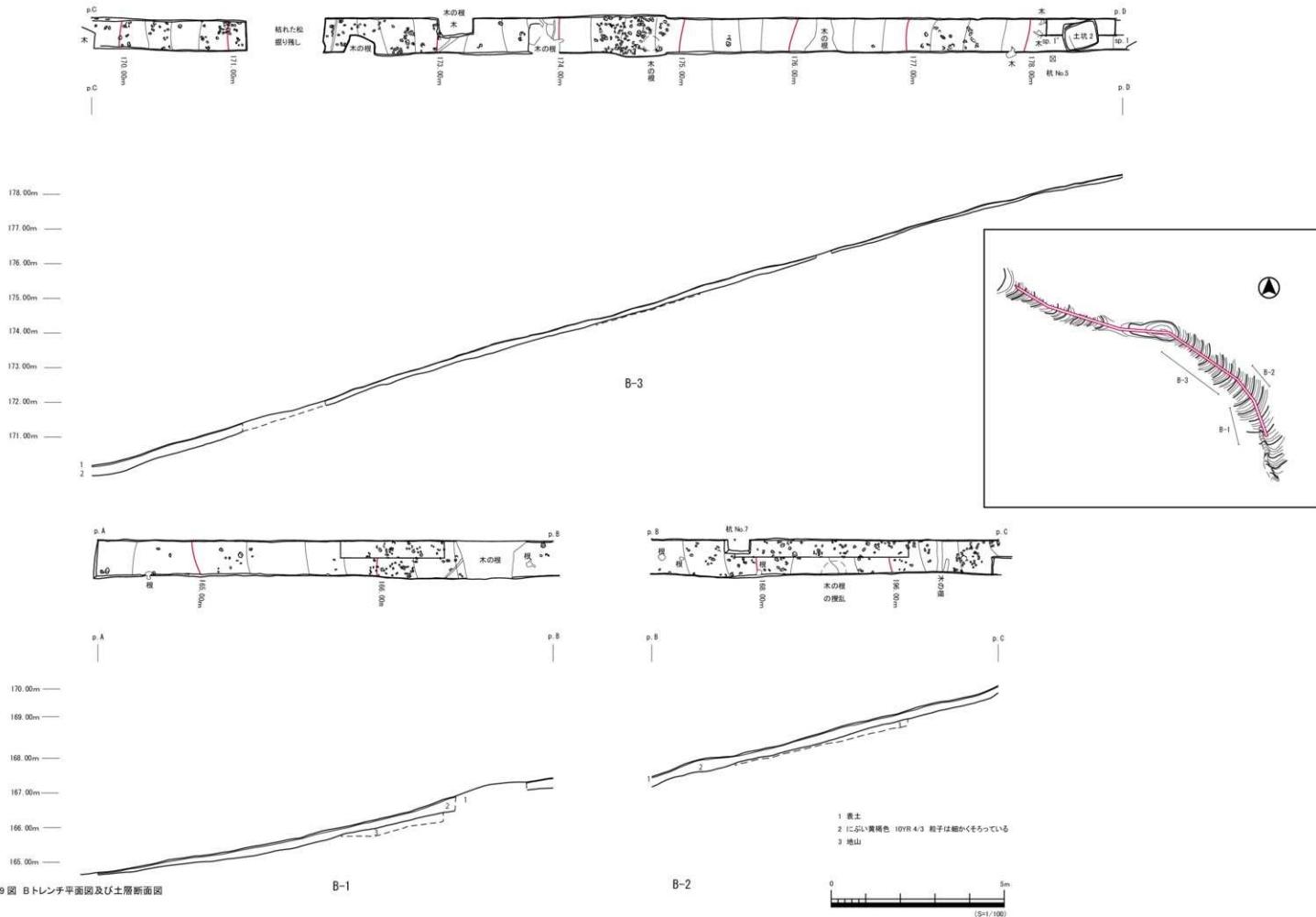


遺物写真（須恵器）

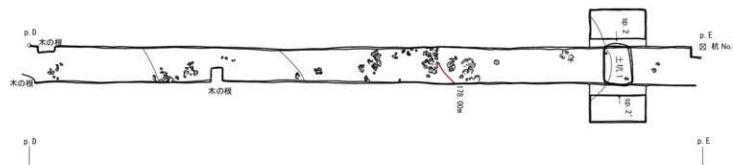
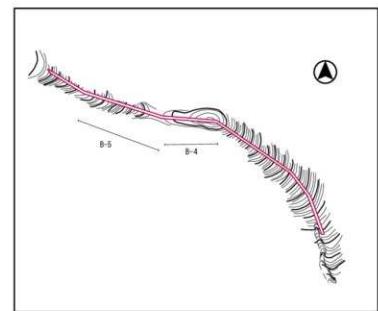
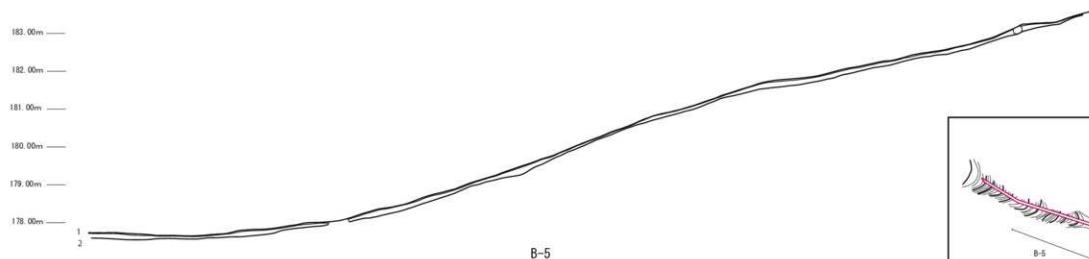
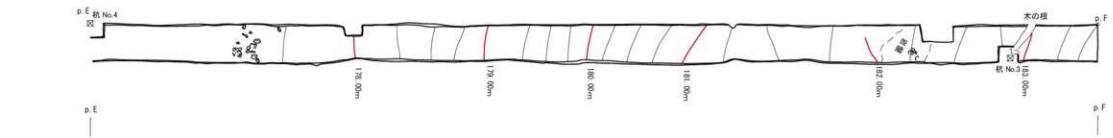
第 7 図 平成 22 年度出土遺物



第8図 B調査地地形測量図及びトレーン配置図



第9図 Bトレーナー平面図及び土層断面図

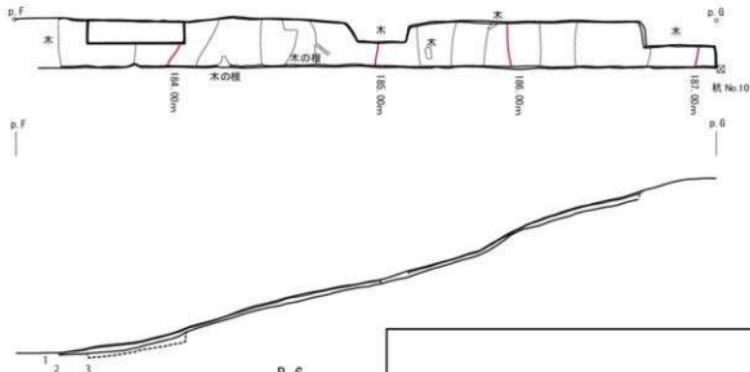


1 表土
2 にぶい黄褐色 IOYR 4/3 粒子は細かくそろっている
3 地山

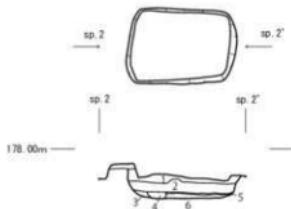
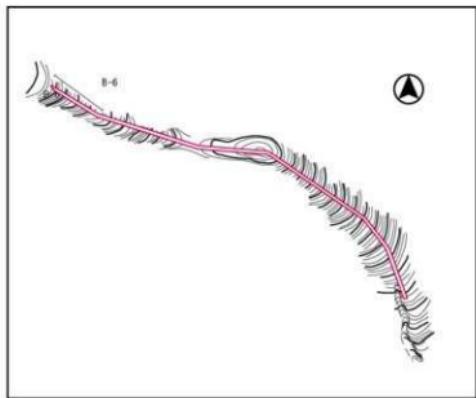
B-4

0 5m
(S=1/100)

第10図 Bトレンチ平面図及び土層断面図

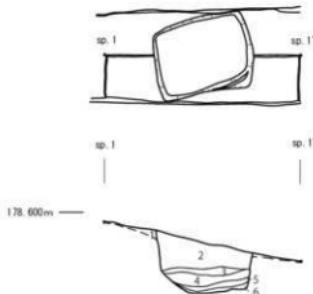


- 1 表土
2 にぶい黄褐色 10YR 4/3 粒子は細かくそろっている
3 地山



- 1 黄灰色 5 Y 5/1 青色の地山壁を含む 腐化物少々含む もろい
2 腐化物 N 2/2 木炭が主 粒子は細かくそろう 楊細砂含む
3 腐化物 N 2/2 木炭が主 粒子は細かくそろう 楊細砂含む
4 にぶい赤褐色 5YR 4/4 被熟して赤色化した地山と地山の混層
5 赤色壁 被熟した裸及び砂 地山の壁が直じる
6 黑褐色 10YR 3/1 黒と地山の混層
2 層に比べて地山の割合が多く 赤色壁を含む

土坑 1



- 1 表土
2 黄褐色 7.5YR 4/6 粒子は繊維
3 黑褐色 5YR 3/1 腐化物、地山の壁、白色壁含む
4 黑褐色 5YR 3/1 腐化物の壁
5 黑褐色 5YR 3/1 腐化物の小粒を含む 粒子は灰に近い
6 地山 表面は熱を受けて変色 青色の地山壁を含む
白・赤・青の地山壁を含む

土坑 2

第 11 図 B トレーニング平面図及び土層断面図

3 平成 23 年度（1 号墳前方部南側）

（1）調査トレーニチ

Cトレーニチ

1 号墳前方部の端部から約 20 m の平坦面がある。尾根を切るように堅壠状の地形が確認できることから、山城としての利用が想定される。尾根は南側の谷に向かって伸びており、地元の話では、昔は六呂瀬山へはこちらから登っていたようである。

平坦面のほぼ中央、前方部の下端から約 10 m のところで長さ約 6 m の土坑を確認した。地山は堆積岩の岩盤層で、黄色、赤色と一部で青灰色の砂質堆積岩である。土坑は岩盤層を削って掘りこぼめられ、最深部は地表面から 120 cm である。土坑内の埋土は地山の礫を多く含む地山風化土で、岩盤層の境目であるため黄色土と青灰色土が確認できる。下層は青灰色土で上層は黄色土に青灰色地山礫が混ざる。土坑底部の形状は、細長い 2 本の隅丸長方形が尾根に並行する形で並んでいる。掘方は東側で 2 段確認でき、西側は 1 段であった。

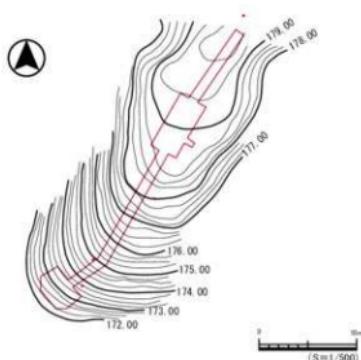
また、土坑の北端から 1 m のところで掘り込みを確認している。

土坑内からは遺物が確認できず、上層の表土直下層で埴輪片 1 点検出されたが、遺構に伴うものではないと判断した。よって、土坑の時期や性格を決定することはできなかった。

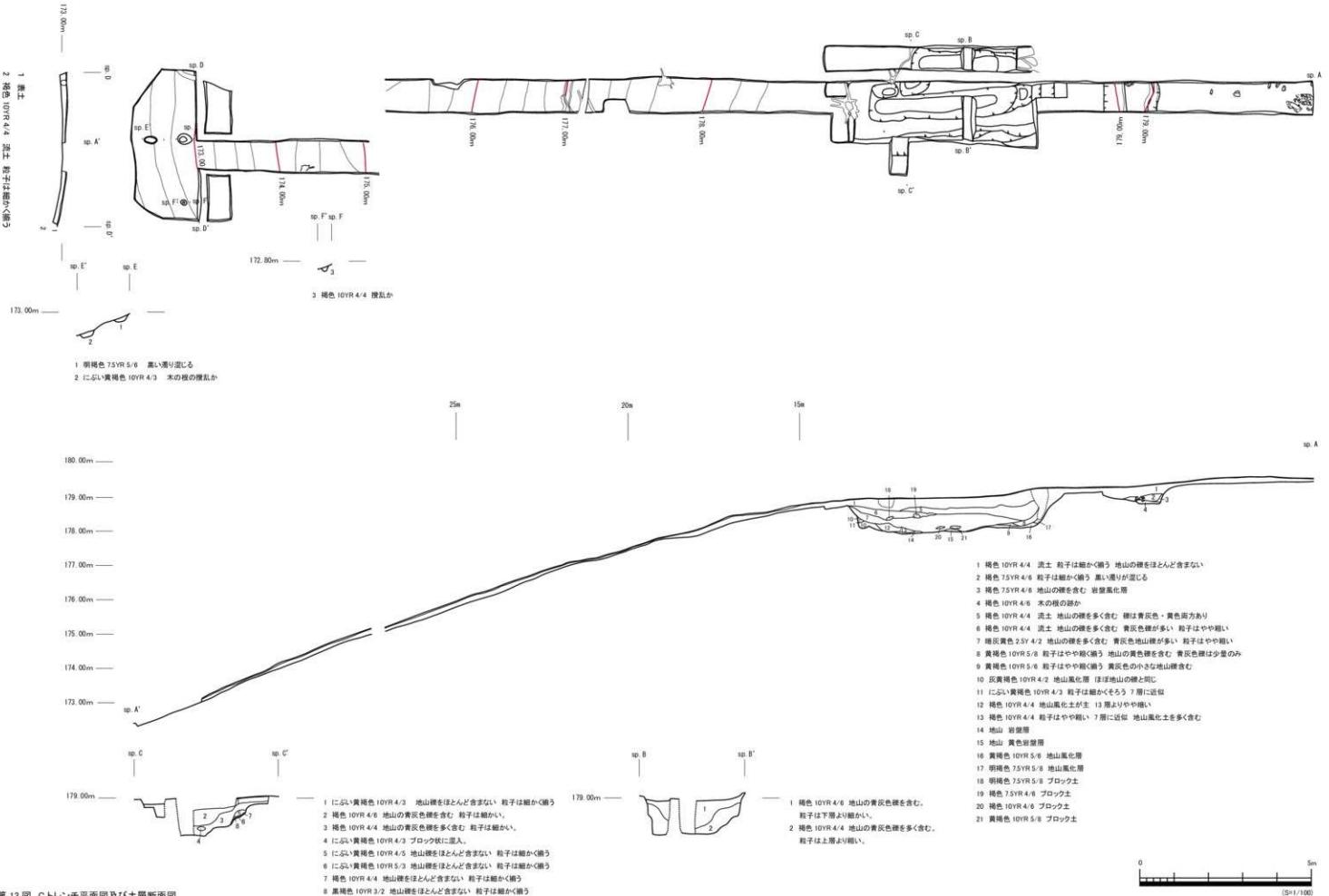
（2）出土遺物

埴輪片

小片のため器種等は不明であるが、埴輪片である。表面の摩滅が激しく、調整等は判然としない。



第 12 図 C 調査地地形測量図及びトレーニチ配置図



第13図 Cトレチ平面図及び土層断面図

4 平成 24 年度（3 号墳後円部西側・4 号墳北側）

（1）調査トレンチ

Dトレンチ

3 号墳西側の下段テラスより外側にあたる。地形測量の結果からも、自然な傾斜が続いており、トレンチを設定したが遺構は確認できなかった。トレンチを境にして南側は植林されており、斜面は整地されている可能性もある。土層の堆積は表土の下に流土層があり、その下に地山層が堆積していた。これまでの調査結果と併せて考えても、自然地形の堆積と考えられる。

遺物は表土中から円筒埴輪片 3 点を採取している。

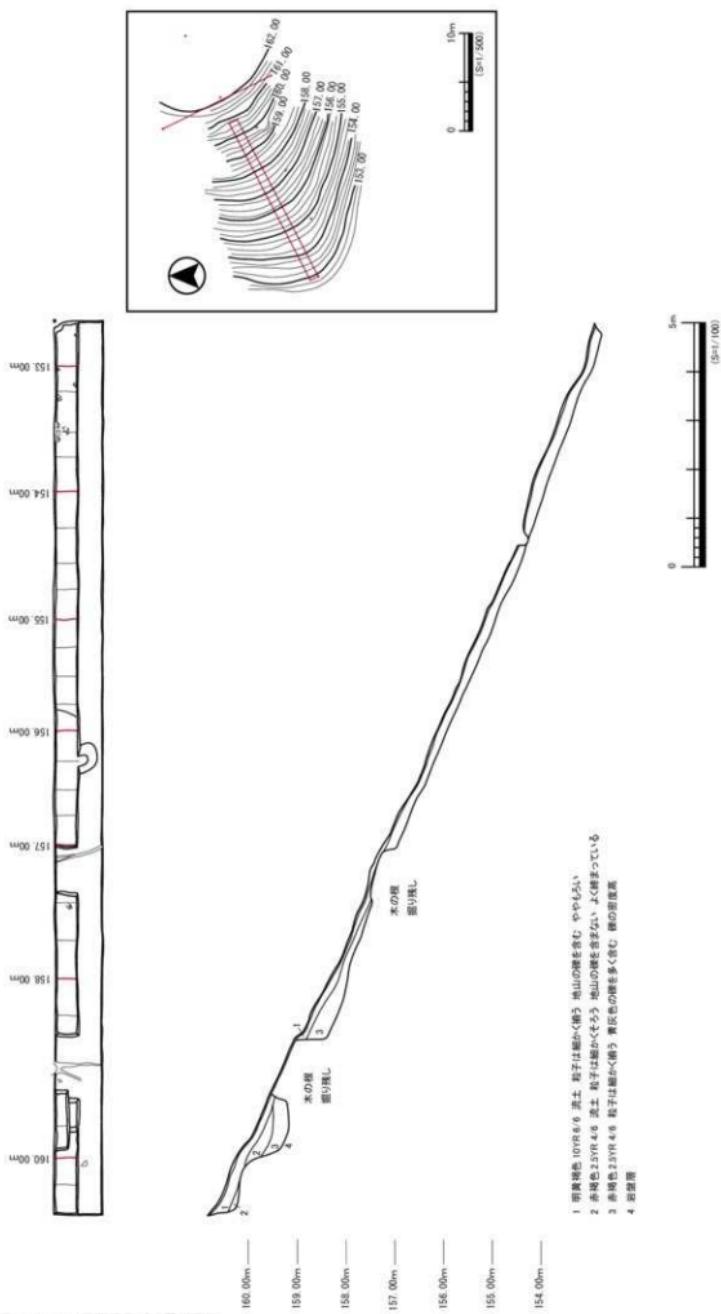
E-1・E-2トレンチ

4 号墳の北側にあたる小さな尾根に設定した。地形測量の結果、平坦面が段を成すように並んでいる。トレンチを設定したが地山までがきわめて浅く、遺構を確認することができなかった。しかし、平坦面の堆積は極めて浅く、地山層の上に表土層があり、流土層がほとんど堆積していなかった。

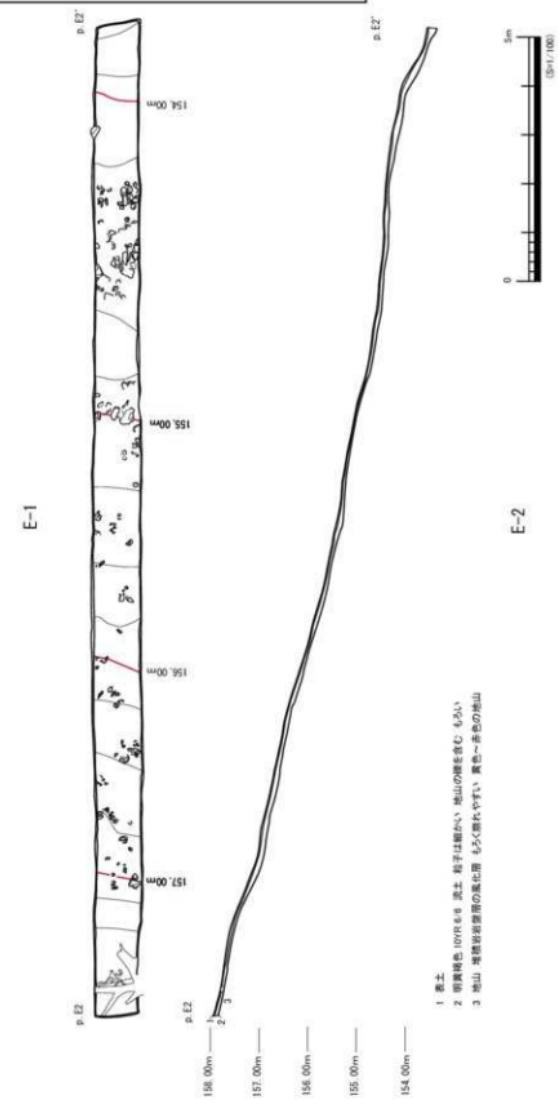
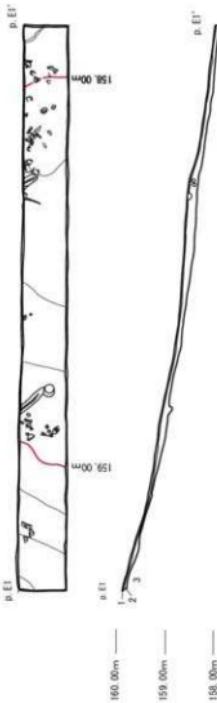
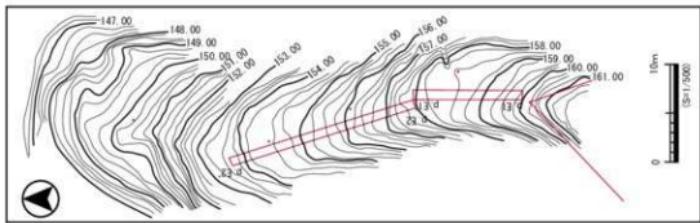
（2）出土遺物

埴輪片

調査で採取した遺物は埴輪片 3 点である。いずれも表土層下の流土層中から出土した。突帯を持つ破片もあるものの、いずれも表面の摩滅が激しく、突帯の形状や調整等の観察は難しい。



第 14 図 D トレンチ平面図及び土層断面図



第 15 図 E トレンチ平面図及び土層断面図

5 平成 25 年度（4 号墳北側）

（1）調査トレンチ

E-3・E-4トレンチ

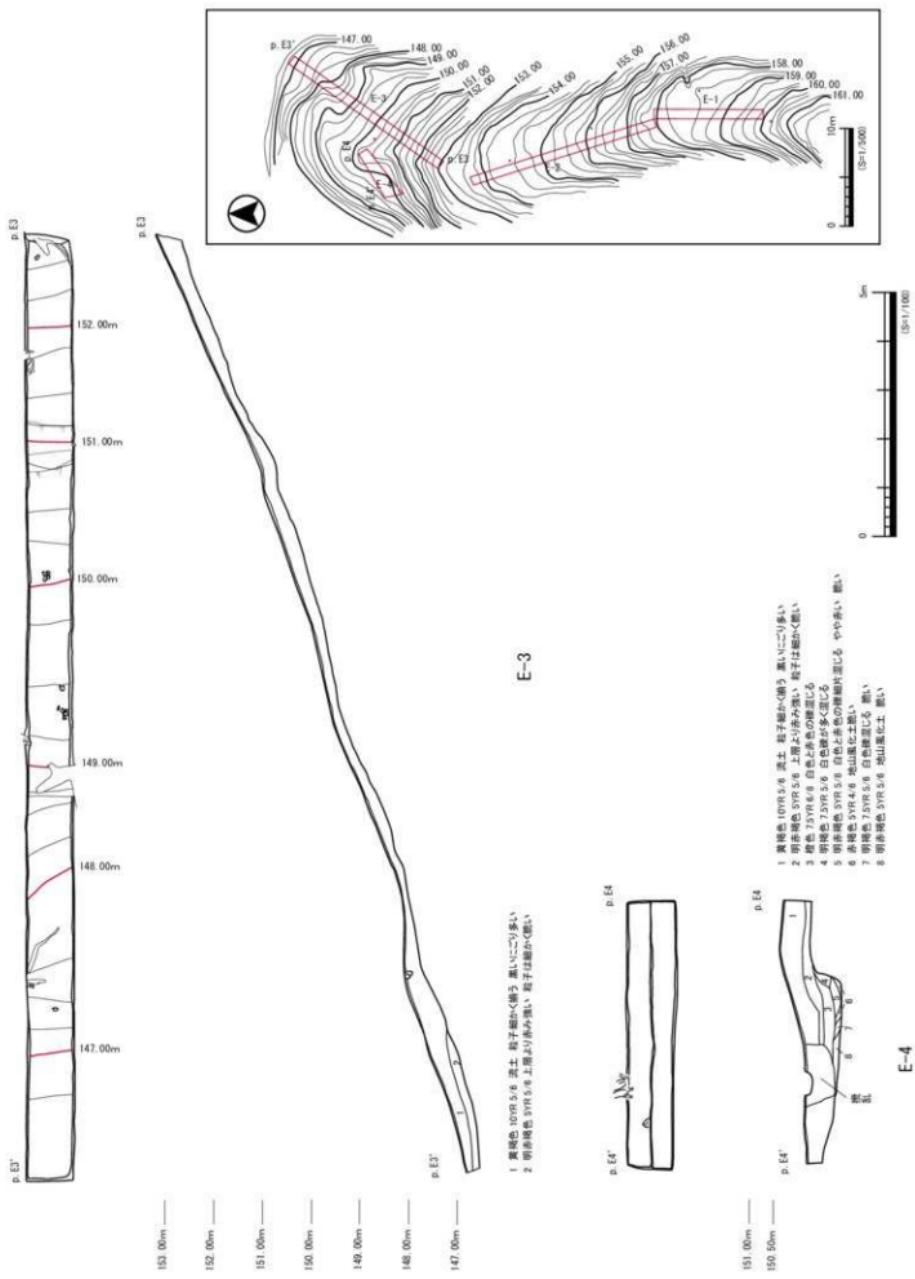
4 号墳の北側、24 年度調査地のさらに北側にあたる。E-3トレンチは尾根上南北に配置し、尾根の屈曲にあわせてやや東に振る。トレンチの南側は自然傾斜と思われるが、傾斜はやや急峻で堆積層は薄い。中ほどは地山の礫が浅い位置で露頭する。さらに北側で平坦面を削りだしている。現状で堅堀状の地形、土壘状の地形が確認できた。調査の結果、人為的に地形を整形していると判断されるが、遺物が伴わないので時期を決めることができなかった。トレンチ南側の斜面部で段を確認でき、さらに北側の堅堀状のところは地山を掘り込んでいることが確認できた。

3 号墳の主軸上に土壘状の敵があること、3 号墳前方部南側斜面に堅堀状の地形が確認できること、地元に一夜城の伝承があることなどから、中世以降に山城として利用された跡と思われる。24 年度に調査した平坦面は山城の郭の可能性が考えられる。

6 調査のまとめ

以上のように、周辺に古墳群に関連する遺跡を確認することはできなかった。よって、古墳群は 4 基で完結していると考えられる。

時期・性格が不明な遺構については、別の目的で利用されていた痕跡であり、人々の生活の中で身近な山の利用形態を知る上で貴重な資料と思われる。主に山城として利用された跡と考えられ、3 号墳の堅堀状の遺構、土壘状の遺構があること、地元に一夜城の伝承があることからも、六呂瀬山古墳群が中世の一時期に山城として利用されたことを裏付けるものと考える。



第16図 Eトレンチ平面図及び土壌断面図

第2節 平成30年度・令和元年度・2年度の調査

市では、市民等が古墳群を見学できるよう、平成29・30年度の2ヵ年で国道364号沿いの駐車場から1号墳の指定範囲近くまで、仮設アクセス道路整備を計画した。平成30年度に委員会を開催し、委員会ならびに文化庁埋蔵文化財部門の指導を受け、1号墳の墳裾が史跡の範囲外までに広がっていないかを確認することにした。そのため、史跡範囲内から範囲外にかかるトレンチ1本を設定し、発掘調査を実施することとした。

令和元年度には、1号後円部を中心に帆石の毀損が多く発生しており、古墳の基礎的情報も不足していることから、1号墳後円部に2か所の調査区を設定した。

令和2年度調査では、1号後円部の西側と北側にトレンチを設定し、後円部径の確定や埴輪列の有無、葺石の有無といった基本的な情報を得るために調査を実施した。また、1号墳後円部西側から3号墳前方部にかけて、昭和61年度に旧丸岡町が発掘調査を実施しており、調査図面も存在する。しかし、当時の図面には正確な位置が示されていなかった。そのため、今後の整備に活かせるよう、今回の調査と併せて位置を確定した。

なお、調査区は委員会ならびに文化庁埋蔵文化財部門の指導を受け、設定した。

1 平成30年度（1号墳後円部北側）

（1）調査トレンチ

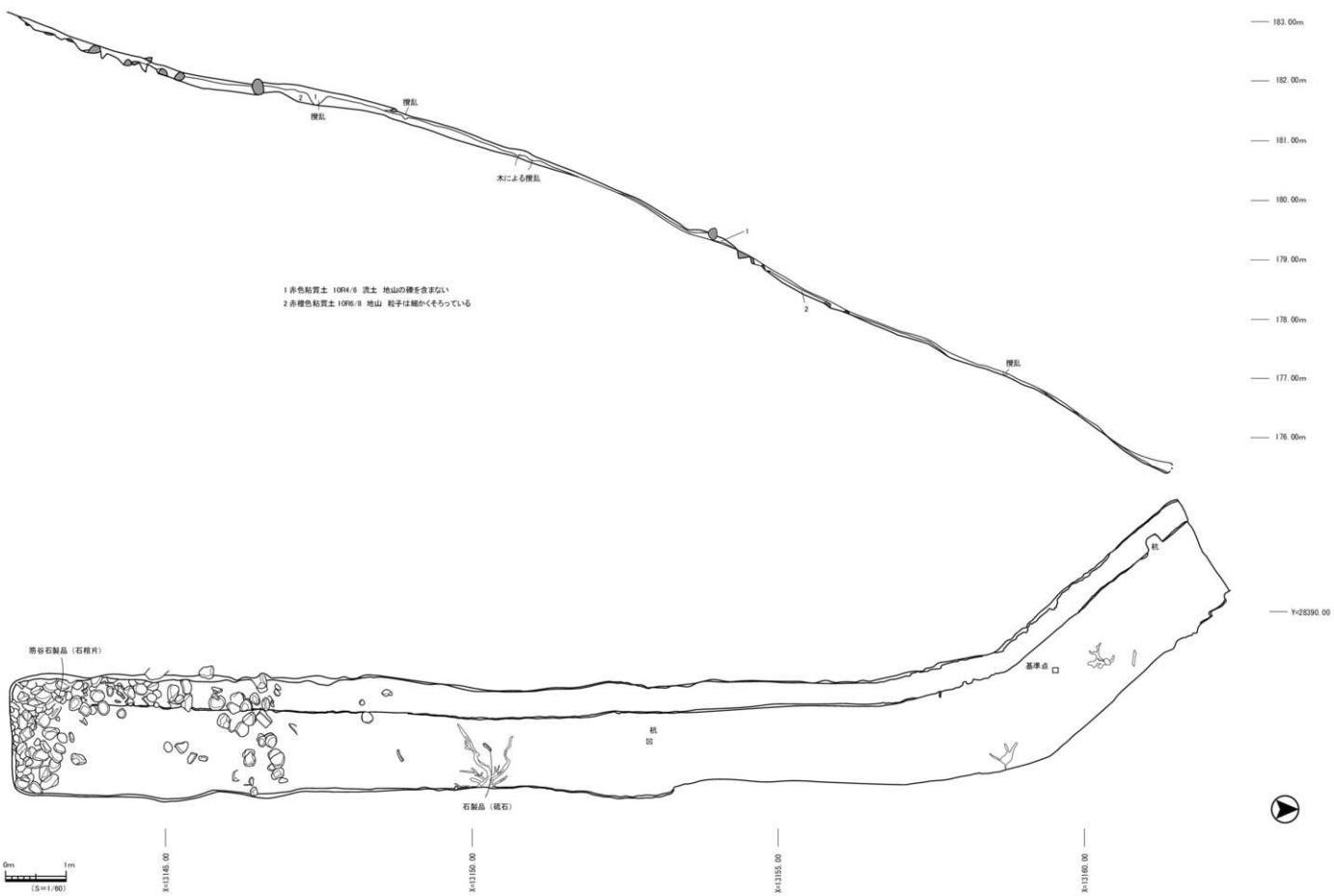
Fトレンチ

六呂瀬山古墳群のうち、アクセス道路と隣接する1号墳後円部の北側から範囲外の尾根上にかけて、長さ20m（史跡内16m）×幅2mの調査トレンチを設定した。

調査の結果、史跡の範囲外では葺石は確認できなかつたことから、墳裾は史跡の範囲外までは広がらないものと思われる。墳裾は、葺石が配置されるトレント南側から約5mまでの範囲と考えられ、史跡範囲内の平坦部までにとどまるものと思われる。

史跡範囲内の掘削深度は地表から約10cmで地山を確認し、史跡範囲外では地表から約5cmのところで地山を確認した。また、史跡範囲内の平坦部では、地表から約10cmの場所で葺石を確認した。葺石は自然石を下に据えており、さらにトレント西側に葺石が続いているようであった。なお、古墳の範囲内によく見られる埴輪列は、今回の調査では確認できなかつた。これにより、1号墳では平坦部の下段テラスでは埴輪列が巡らない可能性がある。

遺物は、円筒埴輪片2点、石棺片と思われる笏谷石片、中世山城に伴う砥石を確認した。円筒埴輪片1点と石棺片1点はトレント南側の葺石直上で出土し、円筒埴輪片1点と砥石1点はトレントのほぼ中央部で出土した。砥石以外の遺物は1号墳のものと思われるが、出土状況から転落等してきたものと考えられる。



第 17 図 F トレーナー平面図及び土層断面図

2 令和元年度（1号墳後円部北側・獸害による毀損箇所）

(1) 調査トレンチ

Gトレンチ

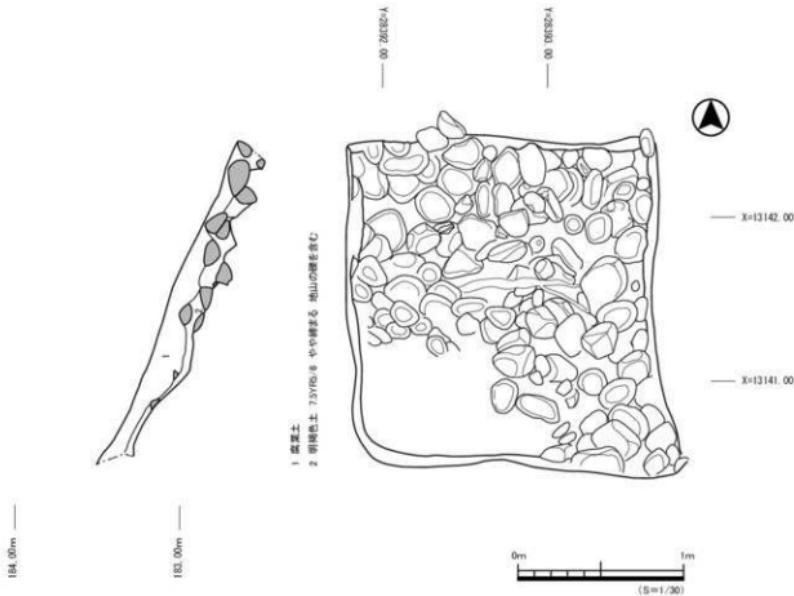
六呂瀬山1号墳後円部の北側に長さ約2m×幅約2mのトレンチを設定した。掘削深度は地表から約20cm掘削したところで地山を確認した。調査トレンチの南側は、ほぼ地山とその自然石からなり、葺石の多くは転落したものと考えられる。東側の一部は多少ずれ等があるものの、葺石の残りは良い印象を受ける。葺石の状況から基底石はさらに下方にあるものと考えられる。

遺物は、トレンチ北側周辺で葺石の直上で埴輪片3点を確認した。

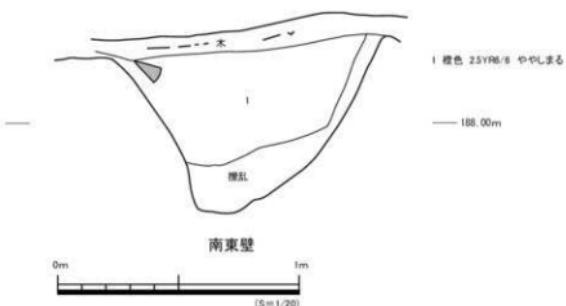
毀損箇所（獸害）

六呂瀬山1号墳後円部の北西側で下段斜面中央周辺に深さ約80cm、幅約130cmの毀損があり、被害状況を確認した。既に直上ならびに周辺の葺石はほとんどなく、裏込石が確認できた程度であった。調査の結果、急斜面に立地することから、今回の獸害によって、葺石の落下が起こったものではなく、経年により、古墳の形状は崩れていたものと考えられる。

遺物は、確認されなかつた。



第18図 Gトレンチ平面図及び土層断面図



第19図 殴損箇所土層断面図

3 令和2年度（1号墳後円部西側・北側）

（1）調査トレンチ

Hトレンチ

六呂瀬山1号後円部の西側に長さ19m×幅2mのトレンチを設定した。掘削深度は、地表面から浅い場所で約5cm、一番深い場所で約30cmの深さで地山を確認した。上段斜面では、南側で一部葺石が流れ落ちており、既に築造当時の葺石は原位置に葺いていない状況であった。それ以外の調査場所では、葺石は良好に残っており、上段テラスの裾部で葺石を据え止めるために置かれたと考えられる基底石を確認した。

上段テラスでは転落したと思われる葺石が数点確認できた。また、上段テラスに埴輪列がないかを確認したが、1ヵ所、円筒埴輪が据えられた状態で出土した。底部のみであったが、ほぼ廻る状態であった。残念ながら掘方は確認できなかった。

また、上段テラスでは圓形埴輪や土師器のミニチュア高杯が出土している。圓形埴輪の破片はある程度まとまった状態で出土しており、遺物の貢で述べるが、圓形埴輪の角や壁が出土している。これらは、完形にはならなかつたが、同一個体の可能性が高いと考えている。さらに、上段テラスには、テラス平坦面に葺石を葺いていたと思われる痕跡も確認している。転落石の可能性もあるが、葺石は数点まとめた状態で検出され、葺石の面は全て揃っていた。このことから、意図的にテラス平坦面に葺石を葺いた可能性も考えられる。

下段斜面では傾斜がきついため、多くの葺石が転落し、流れている状態で検出した。また、下段斜面南側の裾部付近は、昭和61年度のBトレンチの設定が推測されていたことから、昭和61年度の調査区の有無を確認するため、トレンチ南側にサブトレンチを1本設定した。

その結果、昭和61年度のものと思われる鉄くぎや擾乱の痕跡も見られ、昭和61年度に記録された図面からも基底石の位置がほぼ同じであると判断した。

墳丘裾部では基底石と思われる約30～40cmの石を確認した。これは昭和61年度に記録された図面と同じものであり、今回調査で設定した調査区とつながることがわかった。

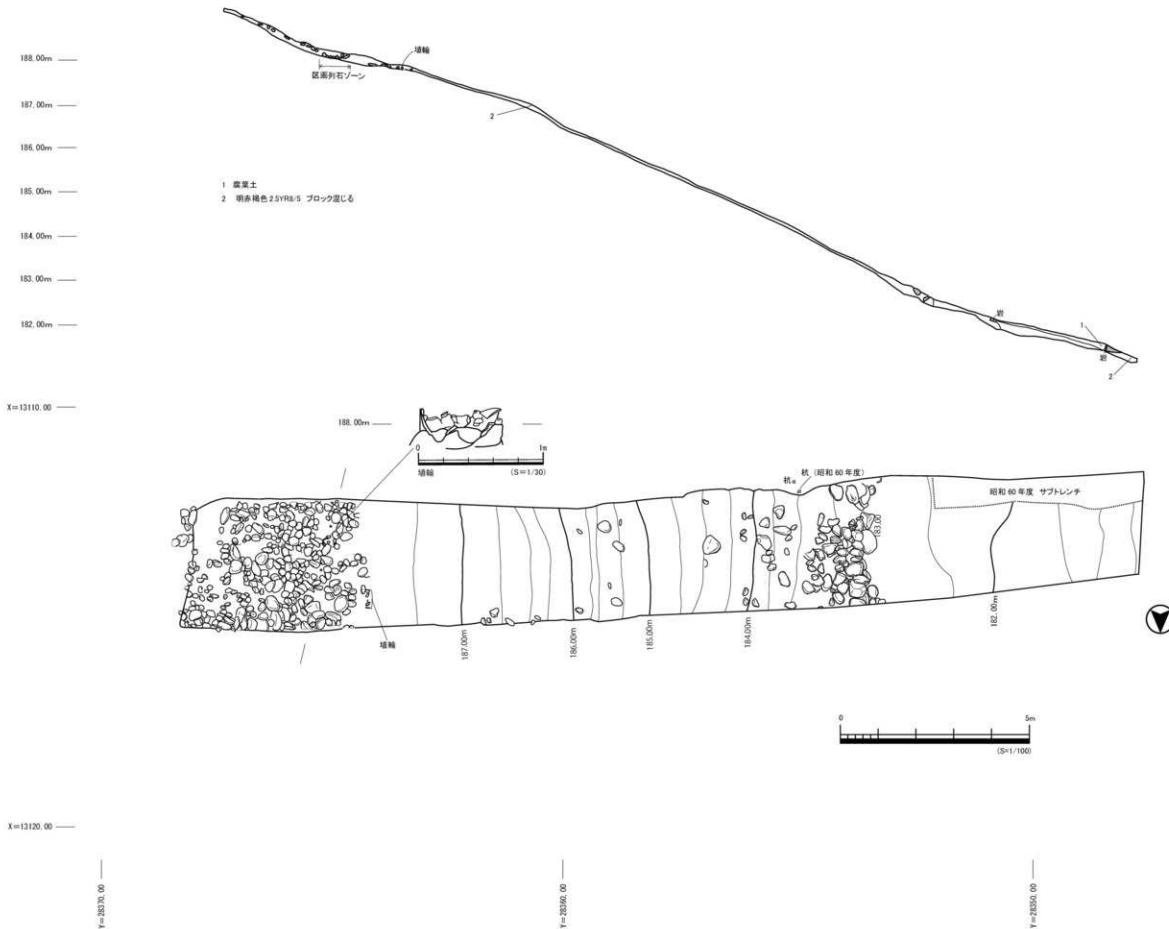
遺物は、上段斜面から土師器、上段テラスから家形埴輪片、圓形埴輪片、土師器、円筒埴輪片、下段斜面から円筒埴輪片を確認した。

Iトレンチ

六呂瀬山1号墳後円部の北側に長さ9m、幅2mのトレンチを設定した。掘削深度は、地表面から浅い場所で約5cm、一番深い場所で約20cmの深さで地山を確認した。上段斜面と上段テラスは、木の根で一部擾

乱はあったものの、比較的、葺石が築造当時の原位置との大きな差がなく、良好に残っていた。埴輪片を確認したが、まとまって出土したものはなかった。後円部北側は、木が生育しており、上段テラスに据えられたと考えられる円筒埴輪は木の根によって破壊され、木の根の間や下段斜面上に円筒埴輪片1～2点散布しているような状態であった。また、下段斜面では下側で葺石を確認した。

遺物は、いざれも円筒埴輪片のみ確認された。



第20図 Hトレンチ平面図及び土層断面図



第21図 Trench平面図及び土層断面図

4 出土遺物

3か年で出土した遺物はコンテナで約10箱分である。出土資料は円筒埴輪が一番多く、ほかに圓形埴輪や土師器のミニチュア高杯を確認した。また、1点中世のものと思われる砥石片も見つかっている。

円筒埴輪（第22図-1～9）

1～6は胴部である。埴輪自体はしっかりと焼かれており丈夫な印象を受ける。しかし、埴輪の表面は風化でひどくもろくなっている。

3と4では、それぞれ一部であるが長方形スカシと円形スカシを確認した。

突帯は台形を基本とする形であるが、これらを細分すると第4表のようになる。突帯付近には貼り付けた際に整えられたナデの痕跡がみられる。また、5では、突帯が剥がれた部分から割り付け用沈線を確認した。

7～9は底部である。底部径は直径20cm前後で、9は復元径で27.2cmと大きいことが分かる。8では一部黒斑が確認できる。底部の下面には板目がみられ、作成時に板の上に置かれていたようだ。さらに、底の方では、製作過程ではみ出した粘土を切り取って整えた跡も確認できる。

圓形埴輪（第23図-10～21）

10～12は山形突起と考えられる。10と11は三角形の底辺の部分が剥がれており、ここの部分が圓形埴輪の壁上部分にくついていたと考えられる。11以外の2片は長辺側がイキている。3片とも比較的平らな印象を受けるが、10は少し内側に向かって反っている。

13～16は壁であり、全体的に硬質で重みはなく整っている。円筒埴輪同様表面は風化により調整が見えづらいものが多い。底部は重さにより潰れており左右に広がっている。また、15は、断面から見られるように2枚粘土板が貼り付けられていることが分かる。壁に付いている突帯はすべてしつかりとした台形である。

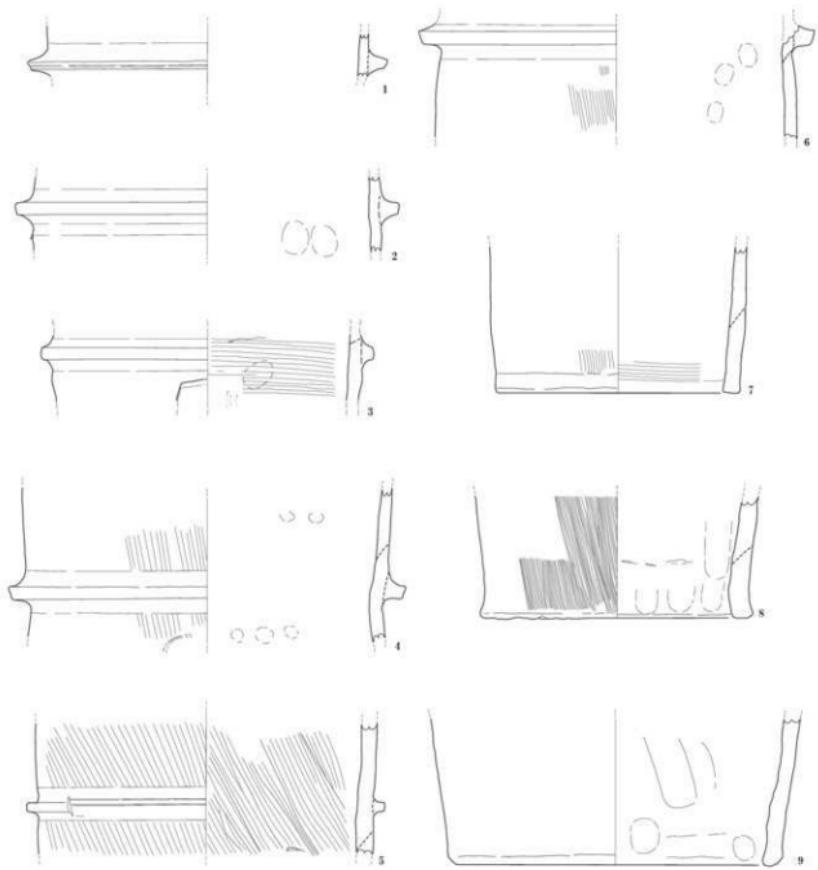
17～19は角部であり、3個体とも丸みを帯びたカーブになっている。17では黒斑を確認した。また、突帯はしつかりとした台形である。18の突帯は剥がれてしまっているが、他の2個体と同様台形の突帯の可能性が高い。

20・21は突帯のみである。いずれも圓形埴輪に伴うと考えられるもので、三角形としつかりとした台形に分けられる。21には黒斑の付着を確認した。

上記の山形突起や壁・角部は、胎土の色や形状から同一の可能性が高い。ただし、突帯のみについては、同一のものかどうかは判断が難しい。

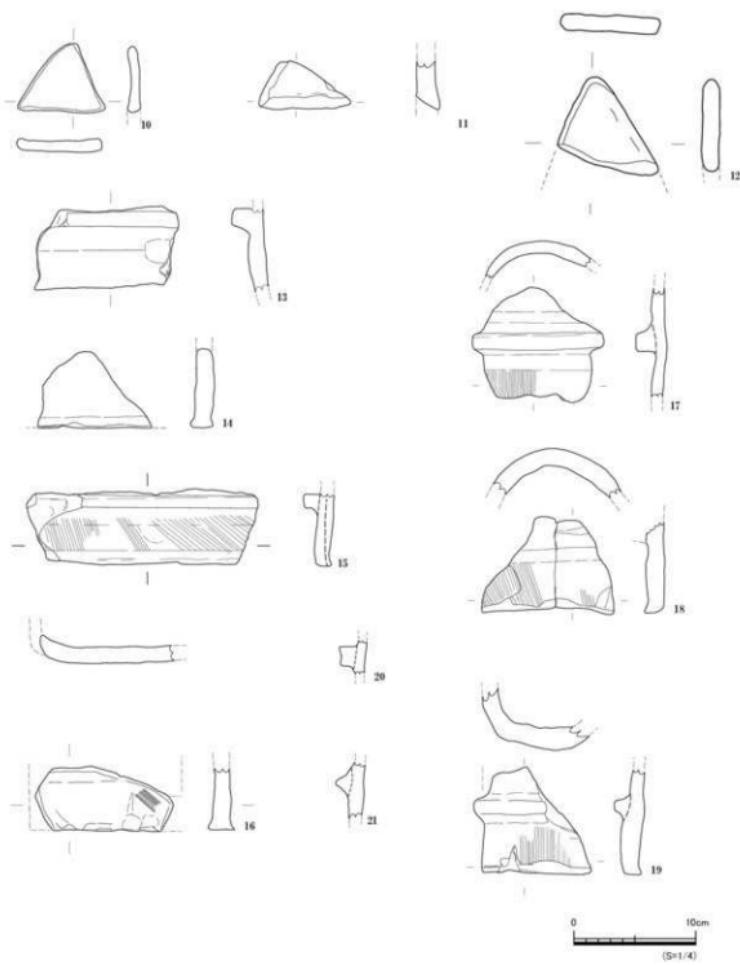
第4表 平成30年度～令和2年度調査出土円筒埴輪突帯分類

番号	突帯形状	埴輪番号
1	台形	2, 4, 6
2	細長い台形	5
3	押し潰されたような台形	3
4	帽子の縁のような台形	1



0 10cm
(5×1/4)

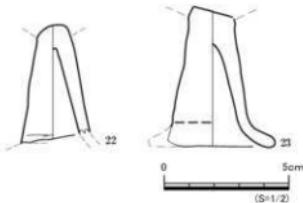
第22図 出土遺物実測図(円筒埴輪)



第23図 出土遺物実測図(形象埴輪)

土師器（第24図-22・23）

22と23は、ミニチュアの高杯である。2個とも脚部のみだが、筒状の胴部で三角コーンのような形のものと、筒状の胴部から脚部が大きく開くものの2種類を確認している。どちらも、風化により調整を確認することができない。23は比較的残りが良い。



第24図 出土遺物実測図(土師器)

砥石（写真図版15-24）

写真図版15-24は砥石である。表は磨かれており滑らかになっているが、裏は逆三角形の溝が3本ほどある。表裏ともに刃物の刃を研ぐために使われていた砥石と考えられる。この砥石は六呂瀬山古墳群にかつて中世の山城があった際に使われていたものであろう。

石棺片（写真図版15-25）

写真図版15-25は石棺片と思われる。材質は笏谷石製で、表裏面は風化により、調整が確認できない。

5 調査のまとめ

(1) 調査

平成30年度の調査では、表土を剥ぐとすぐに、川原石の葺石と墳丘ないし地山を検出した。1号墳後円部の南側にいくほど葺石は面的に隙間なく検出され、北へ向かうほどまばらになっていく様子がわかる（写真図版7-1）。東西に並ぶ葺石列より北側は、平らな面を上に向けた葺石が墳丘ないし地山に乗っていることから、原位置から移動したものと判断できる。これに対して、列状のラインより南側の葺石は、平らな面が墳丘にめり込むように葺かれていることから、原位置を留めていると認めることができる。

墳丘裾のレベルは標高181.556mであり、そこから西側へ向かう墳裾はしばらくほぼ水平に推移に伸び、その後のあと墳丘斜面へと続くと思われる。

一方、令和元年度の調査によって確認された後円部西側裾の標高は182.815mであることから考えると、南側では、このトレンドでの標高はすでに1.29mほど高いこと、そしてそこから少し西側に回り込んだところでは現状で斜面に露出した葺石を確認できた。すると、検出された墳丘裾はもとの墳丘地形に制約されて高くなっている可能性が高く、そこから徐々に西側に向けて裾レベルが下がっていくことが予測できる。

そこで令和2年度にそのことを確かめるため、Hトレンドを設定した。ここでも表土を剥ぐとすぐに隙間なく葺石が姿を現し、ほぼ全て原位置を留めていると認められる状況であった。そこには明確な傾斜変換点や基礎石などは確認できず、そのまま北側で検出された葺石面へと続くことが明らかになった。

したがって、平成30年度に確認した墳丘裾の推定箇所までが墳丘であり、それが地形に合わせて東西にレベルを下げながら続していくのではないかと判断できる。

さらに、令和2年度の調査で明らかになったように1号墳の後円部西側では、上段テラス平坦面から石の面が比較的整った状態で葺石が検出されていることから、転落石ではなく、意図的にテラスに石を敷いていると思われる。また、上段テラスからは圓形埴輪と土師器のミニチュア高杯も出土していることから、この場所で古墳祭祀を行っていた可能性が高い。かつてより、1号墳の後円部西側が少し張り出していることを青木豊昭が指摘しており、地形からもこの場所で祭祀が行われていた可能性が言えよう。祭祀場所と考えられる場所については、令和4年度に張り出し部の調査を予定しているため、そこと併せて今後性格等の位置づけを考えたい。

(2) 出土遺物

この調査で出土した円筒埴輪の底部径は六呂瀬山3号墳から出土したものと似ており、六呂瀬山1号墳と3号墳で同じ規格の円筒埴輪を並べることを意識していた可能性が高いことが分かった。

さらに、令和2年度調査で出土した圓形埴輪では、粘土板を貼り付けている技法もみられた。これは畿内周辺地域でみられる技法であり、六呂瀬山1号墳に並べられた形象埴輪制作に畿内地域の埴輪工人あるいは、畿内地域で作られた形象埴輪を知っている集団が関わっていた可能性が高いことが明らかになった。(2015 安芸高田市教委)。

また、土師器のミニチュア高杯が、いずれもHトレンチから出土している。22は上段斜面から出土し、23は上段テラスから出土しているのに対して、22は上段斜面から出土したことから、墳頂部から転がってきた可能性が高い。23についても墳頂から転がってきたとも言えなくはないが、上段テラスから見つかっていること、墳頂から落下したわりに残存部の残りが良いことから墳頂のような高い場所から落ちてきたとは考えにくい。そのため、23も上段テラスで行われた祭祀のために使われていたものではないかと推察する。

第5表 六呂瀬山1号墳観察表(円筒埴輪)

指図番号	番号	部分名称	残存高	復元径	器壁	焼成	外面調査	内面調整	胎土	色調	スカジ
第22図	1	胴部	4 cm	26.0 cm	0.8 ~ 1 cm	良	不明	不明	0.2 ~ 0.3 cm代の 小石含む	黄橙色 (Hue7.5 YR7/8)	
第22図	2	胴部	6 cm	29.0 cm	1 cm	良	不明	ユビオサエ	0.2 ~ 0.3 cm代の 小石含む	黄橙色 (Hue7.5 YR7/8)	
第22図	3	胴部	5 cm	23.0 cm	1 cm	良	不明	ヨコハケ ユビオサエ	0.1 ~ 0.3 cm代の 小石含む	橙色 (Hue7.5 YR7/6)	長方形
第22図	4	胴部	11.2 cm	28 cm	1 cm	良	タテハケ	ユビオサエ	0.2 ~ 0.3 cm代の 小石含む	橙色 (Hue7.5 YR7/6)	円形
第22図	5	胴部	11 cm	28 cm	1.3 ~ 1.5 cm	良	ナナメハケ	ナナメハケ	0.2 ~ 0.5 cm代の 小石含む	浅黄橙色 (Hue7.5 YR8/6)	
第22図	6	胴部	9.5 cm	28.6 cm	1 cm	良	ナナメハケ	ナデ ^フ ユビオサエ	0.2 ~ 0.3 cm代の 小石含む	橙色 (Hue7.5 YR6/8)	
第22図	7	底部	12 cm	20 cm	1 ~ 1.2 cm	良	タテハケ	ヨコハケ	0.2 ~ 0.4 cm代の 小石含む	黄橙色 (Hue7.5 YR7/8)	
第22図	8	底部	10 cm	22.4 cm	1.5 ~ 1.7 cm	良	ナナメハケ	ユビオサエ	0.2 ~ 0.4 cm代の 小石含む	明赤褐色 (Hue5YR5/6)	
第22図	9	底部	12 cm	27.2 cm	1.3 ~ 1.5 cm	良	不明	ユビオサエ 板ナデ ^フ	0.1 ~ 0.3 cm代の 小石含む	橙色 (Hue7.5 YR7/6)	-

第6表 六呂瀬山1号墳観察表(圓形埴輪)

指図番号	番号	部分名称	残存高	器壁	焼成	外面調整	内面調整	胎土	色調
第23図	10	山形突起	5.4 cm	0.8 ~ 1.0 cm	良	ナデ	ナデ	0.2 ~ 0.3 cm代の小石含む	橙色(Hue7.5YR7/6)
第23図	11	山形突起	3.7 cm	1.5 ~ 1.8 cm	良	ナデ	ナデ	0.1 ~ 0.3 cm代の小石含む	橙色(Hue7.5YR7/6)
第23図	12	山形突起	4.4 cm	0.9 cm	良	ナデ	ナデ	0.2 ~ 0.3 cm代の小石含む	橙色(Hue7.5YR6/6)
第23図	13	樅	6.4 cm	1.2 ~ 1.4 cm	良	ユビオサエ	ナデ	0.1 ~ 0.2 cm代の小石含む	にぶい橙色(Hue5YR7/4)
第23図	14	樅	6.5 cm	1.3 cm	良	不明	不明	0.2 ~ 0.3 cm代の小石含む	橙色(Hue7.5YR6/8)
第23図	15	樅	5.7 cm	1.3 cm	良	タテハケ・ナナメハケ	ナデ	0.2 ~ 0.3 cm代の小石含む	黄橙色(Hue7.5YR7/8)
第23図	16	樅	5 cm	1.2 ~ 2.3 cm	良	ナナメハケ	ナデ	0.2 ~ 0.3 cm代の小石含む	明赤褐色(Hue2.5YR5/6)
第23図	17	角	8.6 cm	1.5 cm	良	タテハケ	ナデ	0.2 ~ 0.3 cm代の小石含む	橙色(Hue7.5YR6/6)
第23図	18	角	6.6 cm	1 cm	良	ナナメハケ	ナデ	0.1 ~ 0.3 cm代の小石含む	黄橙色(Hue7.5YR7/8)
第23図	19	角	8.6 cm	1.5 cm	良	タテハケ	ナデ	0.1 ~ 0.3 cm代の小石含む	橙色(Hue7.5YR7/6)
第23図	20	突帯	2.5 cm	0.8 cm	良	ナデ	不明	0.1 ~ 0.2 cm代の小石含む	にぶい橙色(Hue7.5YR5/4)
第23図	21	突帯	3.7 cm	1 cm	良	ナデ	不明	0.1 ~ 0.3 cm代の小石含む 稀に0.5 cm代の小石含む	にぶい橙色(Hue7.5YR5/4)

第7表 六呂瀬山1号墳観察表(土師器)

指図番号	番号	残存高	復元径	器壁	焼成	外面調整	内面調整	胎土	色調
第24図	22	4.7 cm	胴: 2 cm 脚: 2.5 cm	0.6 cm	良	不明	不明	0.2 ~ 0.3 cm代の小石含む	橙色(Hue7.5YR6/6)
第24図	23	5.4 cm	胴: 2 cm 脚: 4.5 cm	0.5 ~ 0.7 cm	良	不明	不明	0.2 ~ 0.4 cm代の小石含む	橙色(Hue7.5YR6/6)

第8表 六呂瀬山1号墳観察表(石製品(砥石))

写真図版番号	番号	残存長	残存幅	厚さ	表面調整	裏面調整	色調
図版15	24	11 cm	3.2 cm	1.5 ~ 2 cm	ミガキ	逆△の溝が3本	にぶい黄橙色(Hue10YR6/3)

第9表 六呂瀬山1号墳観察表(石製品(石棺))

写真図版番号	番号	残存長	残存幅	厚さ	表面調整	裏面調整	色調
図版15	25	9 cm	7.7 cm	—	—	—	青灰色(Hue5B6/1)

第3節 昭和53年度の調査

国道364号整備計画の建設に伴い、六呂瀬山古墳群が削平される計画となっていたため、記録保存調査を行った。また、古墳群付近まで道路を近づけるために、古墳の裾部確定と古墳保護地帯を確保するための古墳群全体の地形測量も実施した。この調査により、国道364号のルートを変更し、六呂瀬山古墳群が保存された。

調査区は3区とし、最南端をA区、中央をB区、最北端をC区として、測量調査と発掘調査を実施している。調査の詳細は、昭和55(1980)年、福井県教育委員会発行の『六呂瀬山古墳群一国道364号線建設に伴う発掘調査報告書』のとおりである。

1 調査のまとめ

A区

古墳群の測量調査と葺石等の基本資料、1号墳後円部墳頂の盗掘坑埋戻しのための発掘調査が実施された。調査の結果、六呂瀬山1号墳、2号墳、3号墳、4号墳の墳丘規模、葺石・円筒埴輪や家形埴輪、蓋形埴輪等の形象埴輪といった各種埴輪の存在、1号墳の笏谷石製の舟形石棺の埋葬、古墳群が山城として再利用されていたことが明らかになっている。

B区

不明遺構、1・2号炭窯いずれも全面発掘調査を実施した。調査の結果、1号炭窯が黒炭窯、2号炭窯が白炭窯であることが明らかになった。不明遺構については、2本の調査トレーナーを設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

C区

土砂流出防護工事跡、尾根頂部にある円墳・方墳状の全面発掘調査を実施した。調査の結果、土砂流出防護工事跡では、石組造構と堅堀をセットにした遺構3組と多数の段切りを検出している。また、円墳・方墳状の遺構は全面発掘調査をしたにもかかわらず、古墳である証拠は確認されなかつたため、古墳ではないと判断されている。

第4節 昭和60年度の調査

六呂瀬山3号墳の調査で、Aトレーナー、Bトレーナー、Cトレーナーの3か所の調査を実施した。Bトレーナーは3号墳前方部から1号墳後円部にかけて、トレーナーを設定し、調査を実施している。

1 遺構の概要

Aトレーナー

3号墳のくびれ部墳丘平坦面から上段斜面、上段テラス、下段斜面にかけての調査を行っている。

平面図から推測すると墳丘平坦面では長さ約2m×幅約2.45mのトレーナーを設定している。墳丘平坦面では埴輪列が確認され、円筒埴輪が約7本並べられていた。埴輪列の間隔は密で、東西方向に少し斜めに据えられていた。底部径約40cmと比較的径が大きい1本の円筒埴輪底部は、埴輪列より離れて据えられている。このことから、埴輪列が二重に回っていた可能性も考えられるが、この1本の円筒埴輪底部だけであったため、他の要因も視野に入れて、今後、埴輪列が二重に回っているか、調査を実施する必要があると思われる。

なお、埴輪の掘方は布掘りで、埴輪の底部は地表面から約30cm埋まっており、据えられた際は円筒埴輪の第1段突堤も埋まっていたと推測される。

上段斜面では約 15 ~ 30 cm の葺石が並べられている。葺石は角が取れて丸みを帯びていることから川原石であると思われる。墳丘上に近い葺石は面がバグラバラであるため、原位置から多少ずれている可能性が高い。また、上段テラスに近い下方では(ほぼ)原位置に留めている葺石が出土している。葺石の面が一方向に向いていることから築造当時の位置とほとんど動いていないように思われる。また葺石の角に丸みを帯びていることから葺石は川原石を使用していると考えられる。葺石の大きさは約 15 ~ 30 cm のものであり、なかでも 20 cm を超えるものが多い印象を受ける。

上段テラスでは長さ 80 cm × 幅 1.2m のトレーナーを設け、3 本の円筒埴輪が並んでおり、東西方向に少し斜めに向かう埴輪列が確認されている。埴輪列は密に並んでおり、底部の状況は良好に残っていたものと推測される。埴輪列を確認した上段テラスよりも北側(推定)は崖になっている。

B トレーナー

平面図から推測すると、3 号墳前方部の下段斜面から下段テラスまでと 1 号墳後円部の下段テラスから下段斜面にかけてトレーナーを設定し、西側の一部に長さ約 5.6 m × 幅約 0.5 m のサブトレーナーを設定している。下段斜面掘では 1 号墳後円部に伴うものと考えられる基底石が確認され、基底石より西側からは葺石や埴輪列は確認できなかった。

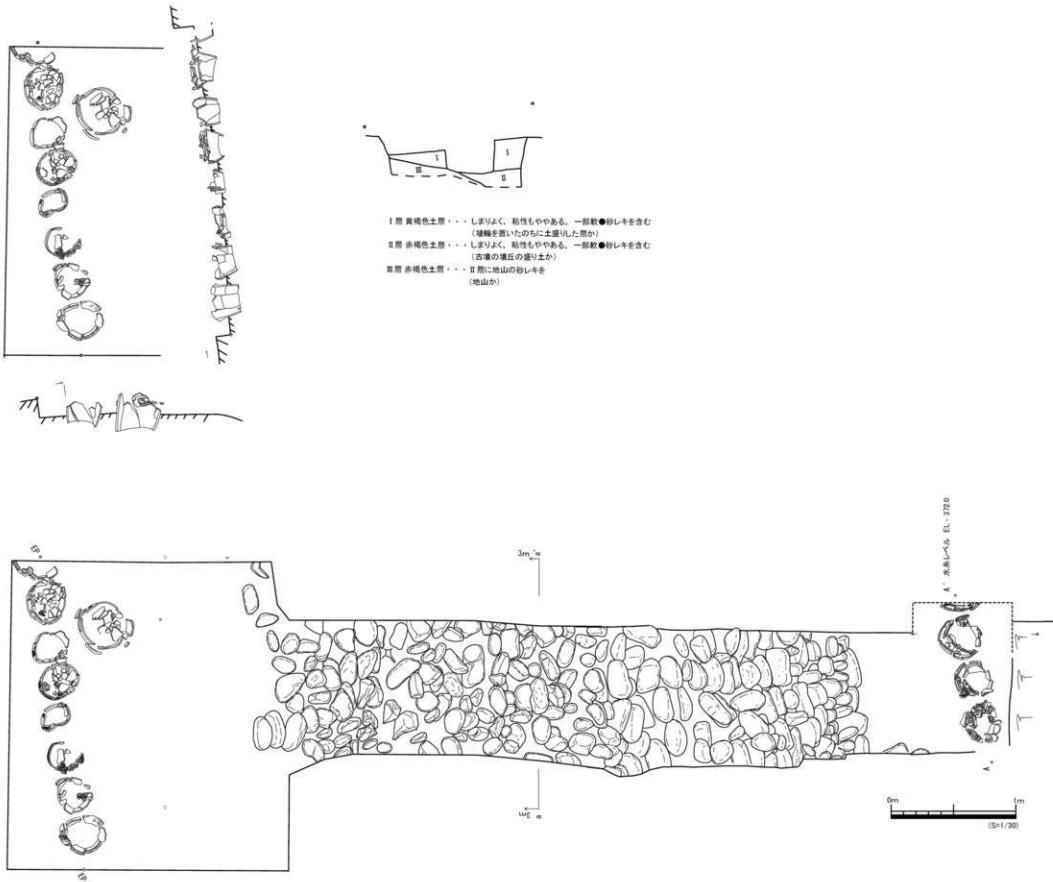
3 号墳前方部掘では埴輪列が確認され、円筒埴輪が約 8 本並べられていた。埴輪列の間隔は比較的等間隔で、南北方向に据えられていた。A トレーナーと同じく、底部径約 40 cm と比較的径が大きい 1 本の円筒埴輪底部は、埴輪列より離れて東側に据えられている。蓋形埴輪(傘部)の破片と推測されることから、この円筒埴輪は蓋形埴輪の土台となる大型円筒埴輪と思われる。

埴輪の堀方は布堀りで、埴輪の底部は地表面から約 30 cm 埋まっており、据えられた際は円筒埴輪の第 1 段突帶も埋まっていたと推測される。

なお、このトレーナーで検出した 1 号墳の基底石等は令和 2 年度の H トレーナー下段テラスの基底石等と合致する。

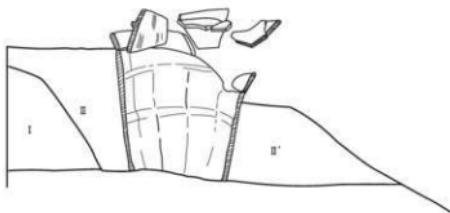
C トレーナー

3 号墳前方部北東隅に長さ約 5m × 幅約 2m のトレーナーを設定し、埴輪列が廻り、前方後円墳であるのかを確認する目的で調査されている。円筒埴輪は密に並んでおり、一番近い場所で約 5 cm、一番離れている場所で約 30 cm の間隔があり、ほぼ直角に東西方向に並んでいる。南側に並んでいる埴輪列は北東側に角になるように埴輪列が並んでいる。埴輪の堀方は布堀りで、地表から約 30 cm 埋まっている。こちらも A トレーナーの埴輪同様第 1 段突帶まで埋まっていた可能性が高い。平面図から推測すると、底部の残りは良く、埋まっている底部の中に同一個体と思われる埴輪片が密集しているようである。多くの破片が外に散らばらずに内側に向かって壊れたようである。



第25図 昭和60年度遺構実測図（Aトレンチ平面図・断面図）

a. ④ a' ④ ←水位レベル



I層 赤褐色土層・・・砂質のレキを多量に含む。レキ間の赤褐色土はしまりがない。(地山)

II層 赤褐色土層・・・レキを全く含まない。しまりが非常によく粘性もある。

II'層 ハ・・・II層に砂質のレキを少量含む。しまりはII層よりわるい。

a. ④ a' ④ ←水位レベル EL - 372.0

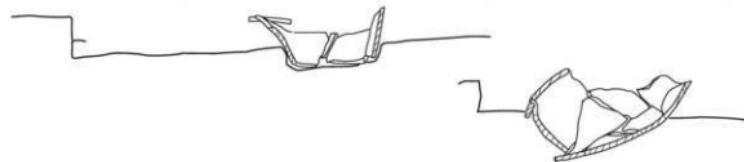


BM + 20.8 - 193

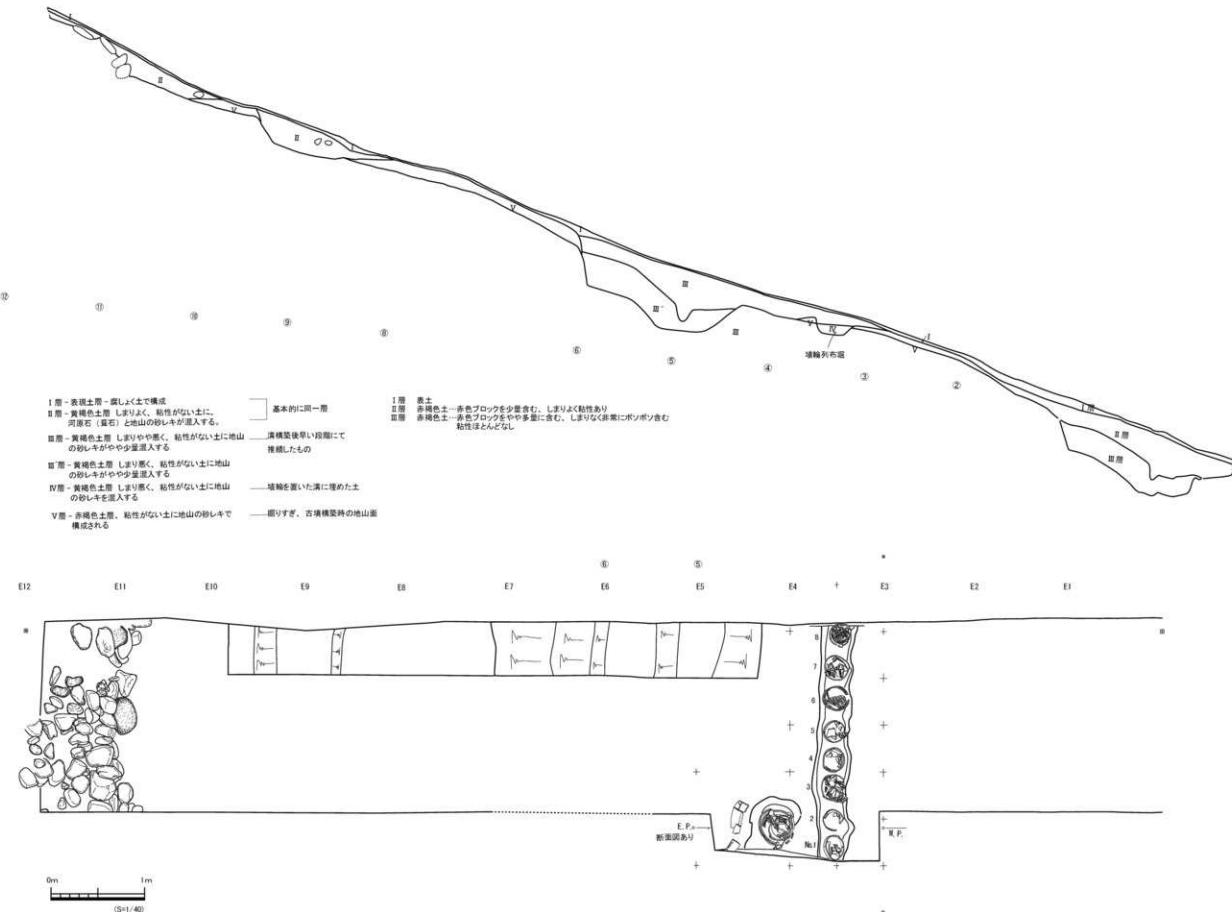
④

④

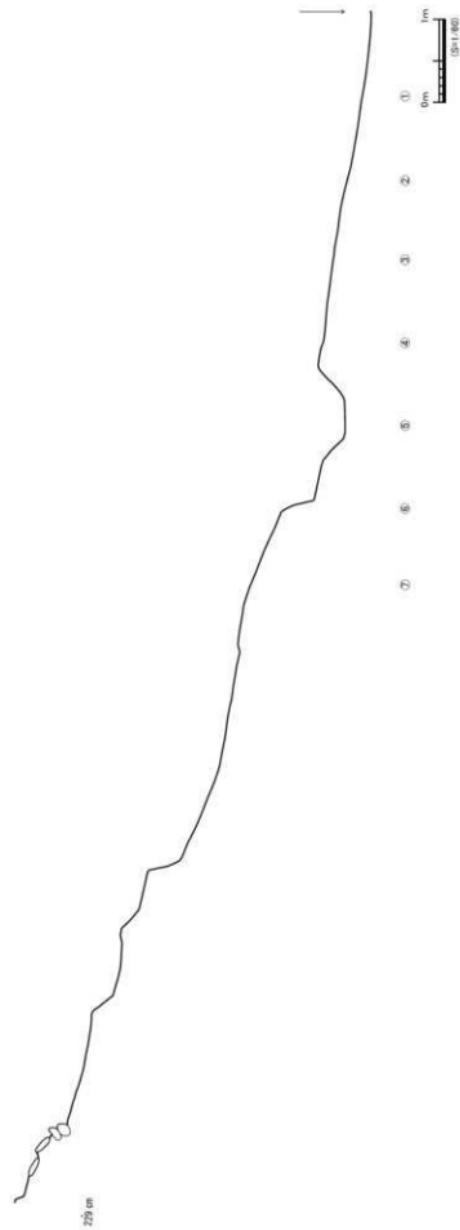
- ④ - BM + 20.8 - 223



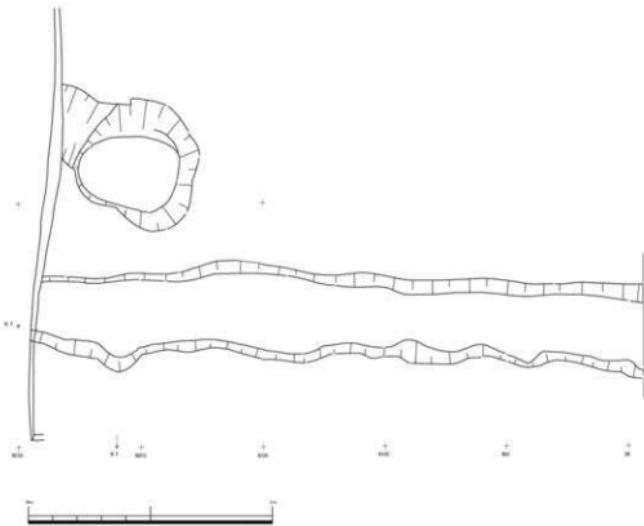
第 26 図 昭和 60 年度埴輪断面図



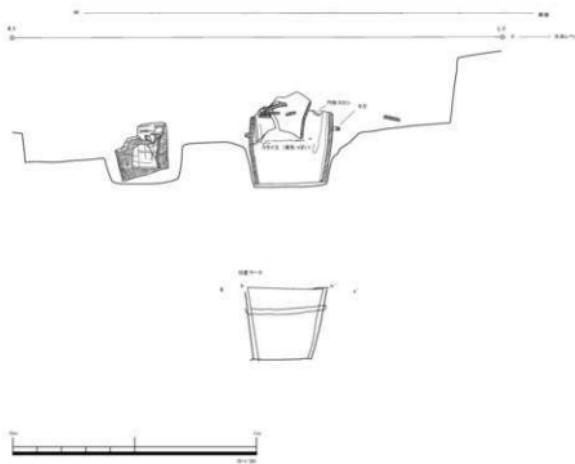
第27図 昭和60年度造橋実測図（平面図・土層断面図 3号填前方部Bトレーニング1号填後内部）



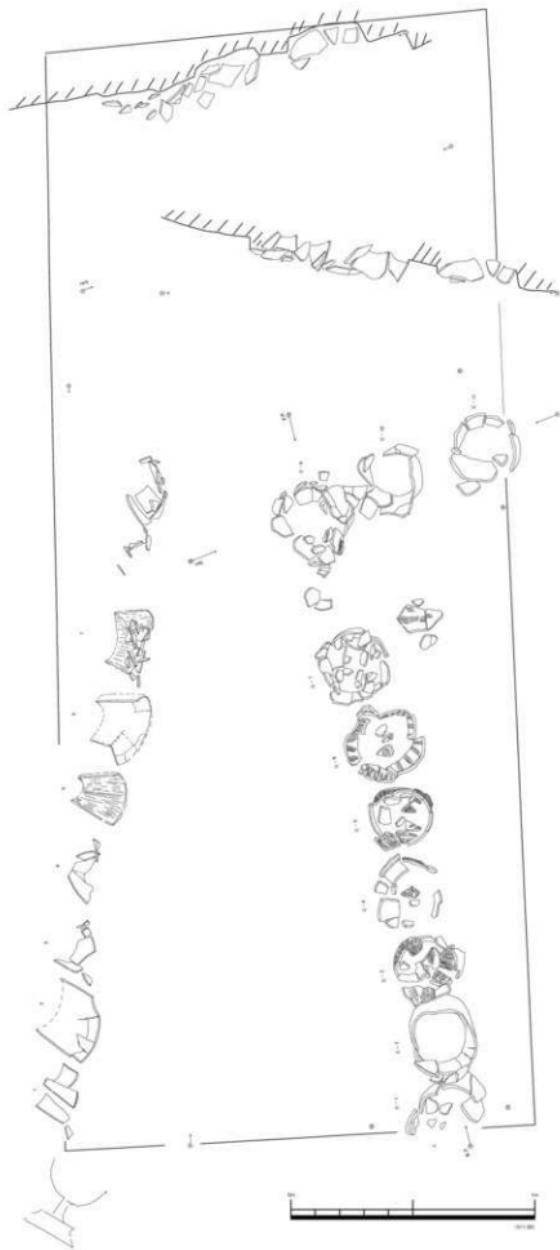
第28図 昭和60年度エレベーション図（六呂瀬3号墳前方部から1号墳後円部にかけて）



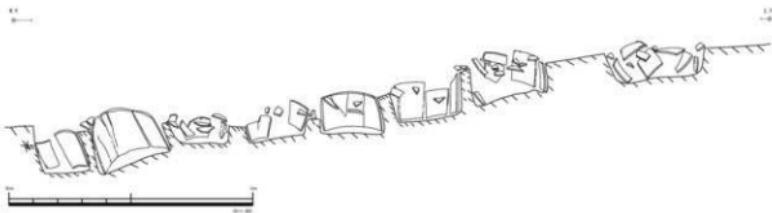
第 29 図 昭和 60 年度埴輪列布堀図 (B トレンチ平面図)



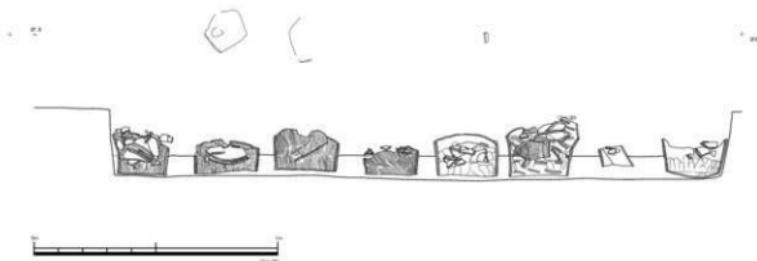
第 30 図 昭和 60 年度東西断面図 (B トレンチ埴輪断面図)



第31図 昭和60年度埴輪出土図（断面図）



第32図 昭和60年度堆輪断面図



第33図 昭和60年度造構断面図 (Cトレンチ)

2 出土遺物

昭和 60 (1985) 年の発掘調査により、A、B、C の各トレチにおいて原位置で確認され、取り上げられた円筒埴輪は、主にその形態と外面調整を中心とした製作技法により以下の 9 群に分けることができる。表や図には出土位置が不明のものも参考までに入れてある。

円筒埴輪

I 群（第 34 図 - 1 ~ 6）

外面調整が 1 次タテハケメで、底部内面がユビオサエなどにより内側に張り出し、底面が幅広く面をなす。内面は粘土紐の積み上げ痕跡が明瞭で、基本的にナデによる調整からなる。器壁の厚さは薄く、残存部上位で 7 mm ほどのものが多い（3 は例外）。透かし孔のわかるものはない。突帯は厚さが薄く、高さがある。プロポーションはほぼ直立のシルエットを描く。

出土位置が不明確な 6 もこれに該当しよう。

II 群（第 35 図 - 7 ~ 10）

外面調整が 1 次タテハケメで、内面調整は I 群同様、ナデやユビオサエによるが、粘土紐の積み上げ痕跡がかなり消されている。器壁は厚く、上方で 1 cm ある。突帯はわかるものでは重厚、あるいは台形断面のものである。透かし孔は不明である。

このうち 8 は粘土紐の痕跡が残ることと底部直径が小さい点でやや異質である。

III 群（第 36 図 - 11 ~ 16）

外面調整が 1 次タテハケメで、内面はハケメを多用する。底部第 1 段付近はタテハケメ、2 段目以上はヨコハケメ。11 と 14 は同工と見られ、底部底面が外向きに面をなし、底面に向かって厚みが増す。13 は例外である。突帯は大ぶりな台形ないし方形である。プロポーションは直立あるいは、やや外側に踏ん張るシルエットを描く。器壁の厚さは 2 段目でも 1 cm あるものが多い。透かし孔は 2 段目に円形を一对有する。

IV 群（第 37 図 - 17 ~ 18）

外面調整が 1 次タテハケメ、あるいはナナメやヨコのハケメが混じり、内面は粘土紐の積み上げ痕跡が顕著で、ユビオサエが明瞭である。器壁は均質な厚みで、底面にかけて厚みが増さない。突帯や透かし孔のわかるものはない。プロポーションは直立のシルエットを描く。底部直径が小さい。

V 群（第 37 図 - 19 ~ 20）

外面調整が 1 次タテハケメで、内面はほぼ水平方向のヨコハケメを多用する。器壁は残存部上位で 1 cm 以上、プロポーションはほぼ直立て確認出来る突帯は高い台形を呈する。透かし孔は不明である。

VI 群（第 38 図 - 21 ~ 25）

外面調整に 1 次タテハケメを施したあと、ヨコハケメを全体に施すが、厳密な水平方向でないため、突帯貼り付け以前に施してあることがわかる。ただし、23 ~ 25 は突帯貼り付け以後の可能性もある。25 は上部で突帯貼り付け後のタテハケメも確認できる。内面はユビナデ・ユビオサエによる調整が基本で、24・25 はヨコないしナナメのハケメが顕著で例外的である。底面が内側に張り出し、I 群と同様な断面形を呈している。器壁は残存部上位で 1 cm を測り、プロポーションは直立ないしやや上開きのシルエットを描く。突帯は台形で一部重厚なものもある。透かし孔はわかるものは円形である。

VII群（第39図-26・27）

外面調整に1次タテハケメを施したあと、部分的に突帶貼り付け前のヨコハケメを施し、そのあと突帶を貼り付ける。内面はタテハケメがほぼ垂直に施される。底面はI群などのように面を広くもち、器壁は、残存上部で9mmほどである。突帶は台形で突出する。プロポーションはかなり上開きである。透かし孔は2段目については不明だが、1段目や下方に円形透かし孔を1対穿っている。その透かし孔の直径は26と27では大きさに差がある。

VIII群（第39図-28）

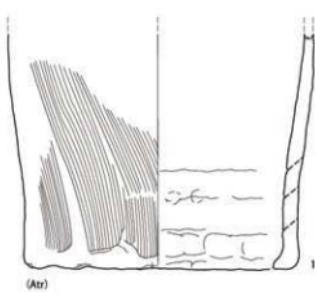
外面タテハケメと部分的なナナメないしヨコハケメを1次調整として施し、内面はほぼ全面にヨコハケメを施す。器壁は上部で1cmほど。突帶は幅の薄く突出度の高いものである。プロポーションはほぼ直立のシレエットを描く。透かし孔については不明。底部にヘラによる半円形の切り欠きが1箇所大きく実施されている。

IX群（第39図-29・30）

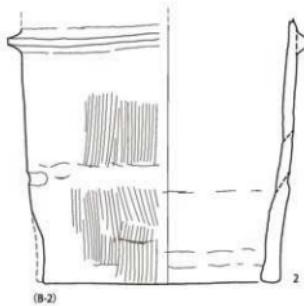
外面全体に2次タテハケメが突帶貼り付け後になされており、それにより1次調整痕は消されている。内面はナデによる調整で最下段付近が内側に膨らむも、器壁の厚さは上部で8mmと薄い。突帶はVII群同様突出度の高い、薄いものである。プロポーションはかなり外開きのシレエットである。透かし孔は長方形になるものがあるほか、底部にヘラによる三角切り欠きが2か所確認できる。

第10表 六呂瀬山3号墳遺物法量表(円筒埴輪)

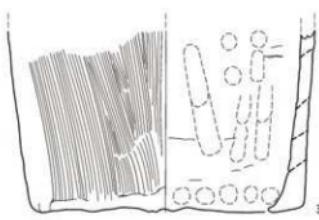
取り上げ番号	図面番号	分類番号	底部径	1段目高	2段目高	口縁径	口縁高	E+F×3	
A6	1	I	22.5						
B2	2	I	19.5	20					
C4	3	I	22.6						
C7	4	I	23						
C10	5	I	21.8						
20	6	I	25.2						
A中3	7	II	24	21	16			69	
B8	8	II	21.6	20.8					
C2	9	II	25	20					
C11	10	II	24.2						
A7	11	III	22.9						
B1大	12	III	27	19.5	15.5			66	
B4	13	III	25.5	22					
B6	14	III	24						
C6	15	III	27.4	20.5					
3六B10	16	III	19.5						
A4E	17	IV	20.6						
C1	18	IV	20.8						
A中1	19	V	24.3	21					
C5	20	V							
A4W	21	VI	20.8						
A中2	22	VI	20.2	20.5	17.5			73	
B1小	23	VI	21.5						
B3	24・25	VI	20	20.5	16.5			70	
A2	26	VII	20	20.5					小円孔
C3	27	VII	23						一段目円孔
C9	28	VII	22.5	19					底部半円
A1	29	IX	21.5	18.5					三角切り込み
851209	30	IX							長方形孔
3六B7ン5	31						30	16	



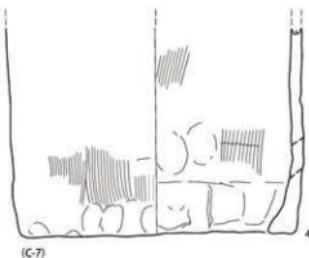
(A-4)



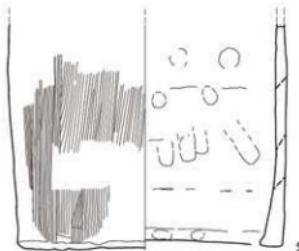
(B-2)



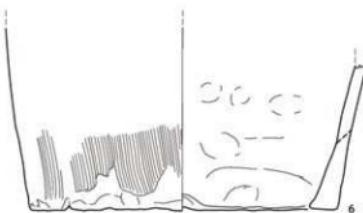
(C-4)



(C-7)



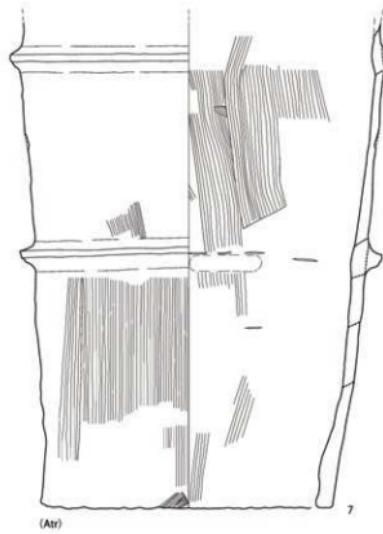
(C-10)



6

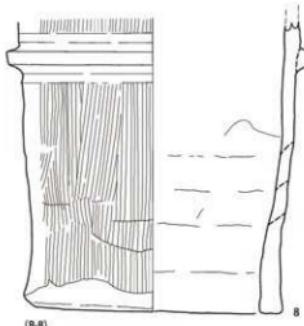


第34図 昭和60年度遺物実測図 内筒埴輪 I群



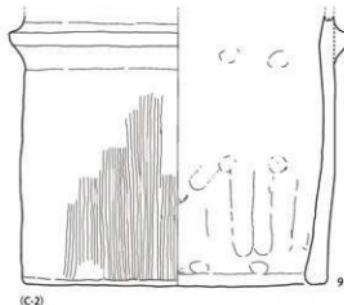
(A-2)

7



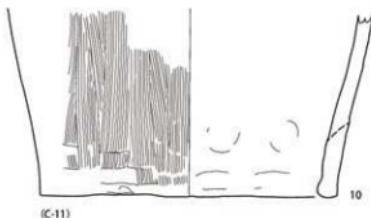
(B-6)

8



(C-2)

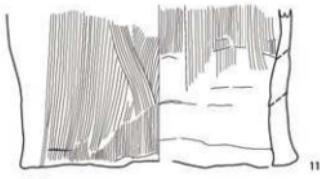
9



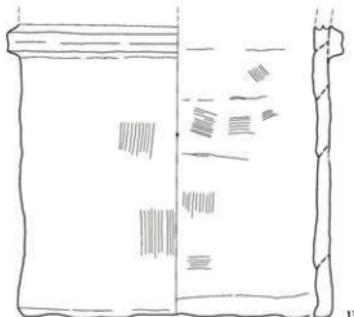
(C-11)

10

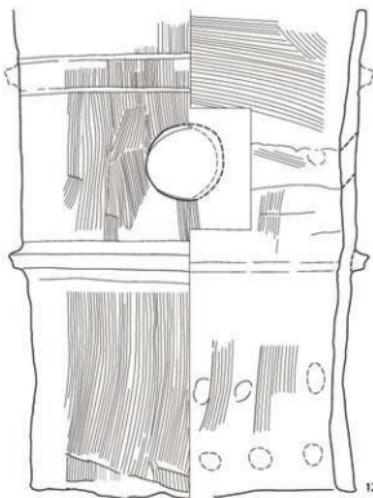




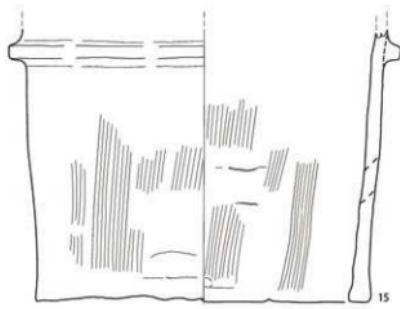
(Atr)



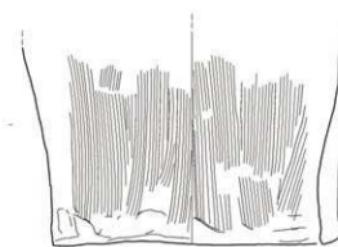
(B-4)



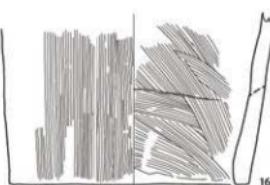
(B-1 大)

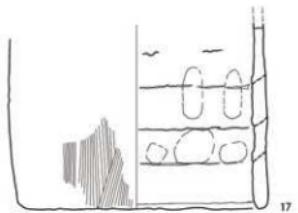


(C-6)



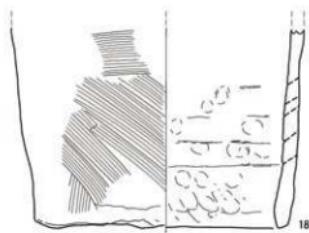
(B-6)





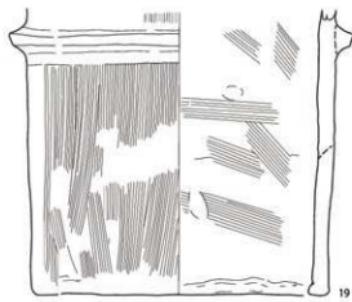
17

(Atr)



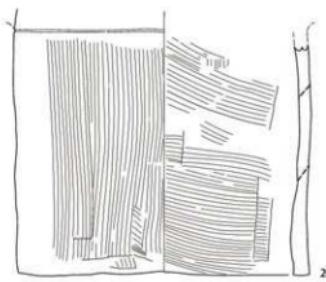
18

(C-1)



19

(Atr)

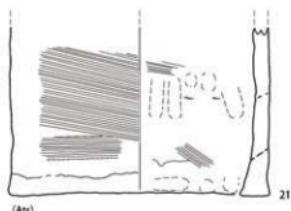


20

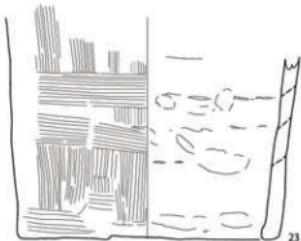
(C-5)



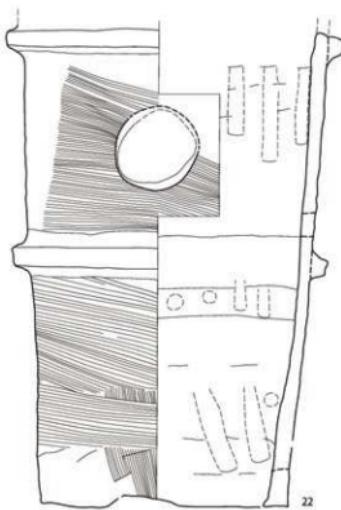
(S=1/4)



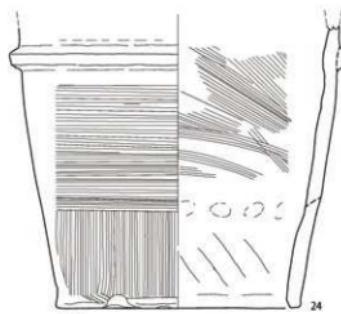
(Atr)



(B-1 小)

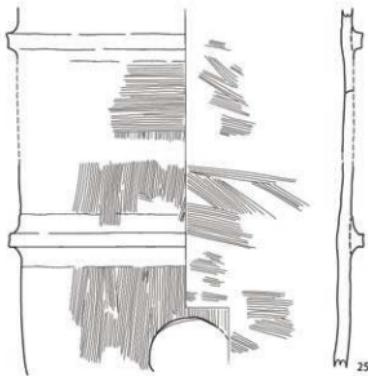


(Atr)

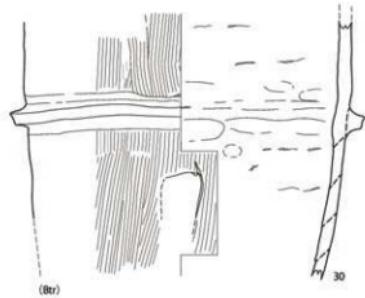
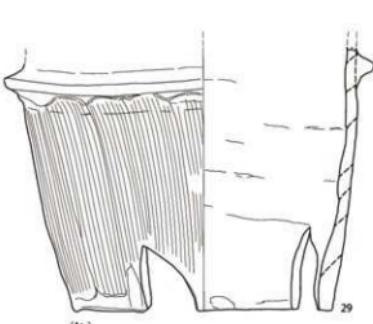
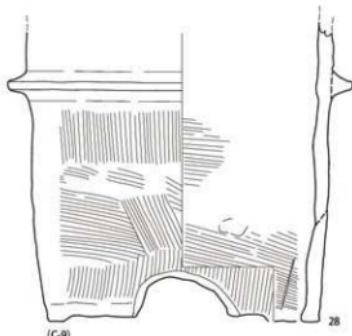
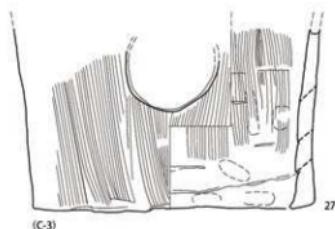
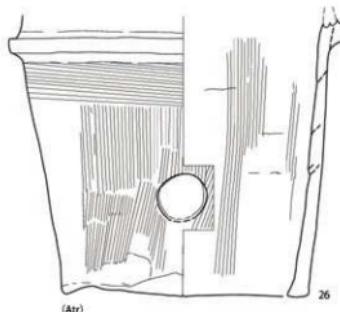


(B-3)

0 10cm
(S=1/4)



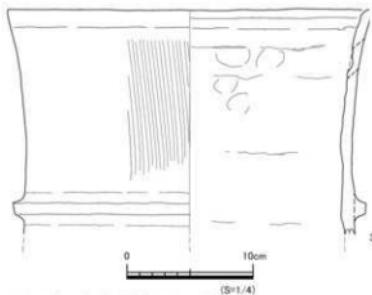
(B-3)



第39図 昭和60年度遺物実測図 内筒埴輪 VI・VII・IX群

口縁部（第40図-31）

これらのほかに、1点ではあるが、口縁部の大きさや形状のよくわかるものがある。それはほぼ直立の形態で口縁端部は断面が丸くなるようヨコナデが施されている。外面はタテハケメ調整であるのに対して、内面はナデとヒビオサエで薄く仕上げてある。突帶の形状は断面台形で重厚である。最上段の高さは16.0 cmを測り、第2段以上の突帶間隔と共通する。

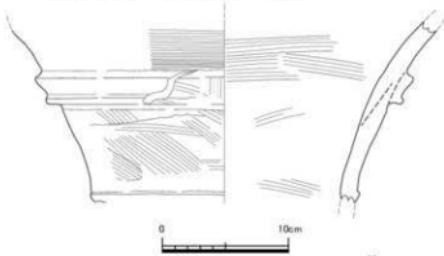


第40図 昭和60年度遺物実測図 口縁部

朝顔形円筒埴輪（第41図-32）

六呂瀬山3号墳からの出土と見てよいが、出土地点のわからない朝顔形円筒埴輪で、ある程度形のわかるものを1点図示した。それは通常の二重口縁の朝顔形円筒埴輪とは異なり、単純なラッパ形に広がる口縁の外面に断面M字形の幅広の突帶をめぐらしたもので、きわめて在地的というべき形態に作られている。わずかに残る肩部との接続部の突帶も反対に弱すぎる。

粗い条線のハケメで内外面調整されており、口縁部付け根の径は22.0 cmとかなり太いものとなっている。



第41図 昭和60年度遺物実測図 朝顔形円筒埴輪

形象埴輪

昭和60（1985）年の調査で出土した形象埴輪は大きく2つに分けられる。1つは後円部墳頂で採集された埴輪片、もう1つが前方部最上段円筒埴輪列に沿わせてポイント的に樹立された蓋形埴輪である。

（1）蓋形埴輪（第42図-33・35・第43図-36）

合わせて2個体の蓋形埴輪がBトレチとCトレチから出土しており、そのうち、Bトレチでは土台となる大型円筒とともに、その上に載せた蓋形埴輪本体が良好に遺存しており、後者は傘部の復元ができた。これに対して、Cトレチでは土台の大型円筒だけが下半を残しているのみであった。

土台円筒は、底部直径が33.0 cm（第43図-36）と34.8 cm（第42図-35）で普通円筒埴輪の底部直径に比べて圧倒的に大きい。また、その分、器壁も1 cmを優に越える厚みがある。高さと第1段突帶までの高さは21.0 cmと20.6 cmである。これは本墳の円筒埴輪の第1段目と大差はない。これに対して、第2段目は16.0 cmと短いが、実はこれも他の円筒埴輪の先に述べた規格に合致している。胴部残存部上端の直径は40.8 cmである。

透かし孔は第2段目に円形透かし孔を3個穿っている。

調整は外面が1次タテハケメで、内面は部分的にヨコハケメが確認できる。

突帶は断面が台形で重厚なものであるが、注目されるのは約8 cm間隔で突帶貼り付け前の目印となる方形刺突を施していることである。すでに記述した円筒埴輪においては、方形刺突の痕跡は見つかっていない。いうまでもなく、この設定技法は畿内で前期後半に普遍化した技法であり、北陸にもともとあったものではない。蓋形埴輪を載せること自体、畿内で確立したものだが、その組み合わせとセットで3号墳に導入されたものであろう。

さて、第42図-33・34の蓋形埴輪本体は以下の特長をもつ。傘部を載せる基底部はラッパ形に広がる植木鉢形をしており、底部直径は22.5 cm。そこからしばらく6 cmほどすばまりながら立ち上がり、そのあたりから大き

く開き、傘部下面に接合する。接合部の外側の直径は約 37 cm であり、そこから 90 度折れて、傘部上半の成形へ移行したものと推測できる。とはいえば明確な証拠は残っていない。この基底部には下から 15 cm の高さに円形透かし孔がおそらく 2 個対抗する位置にあけられている。傘部下半の直径は 60.8 cm で、上面は形部から少しだけ反り返りながら下降している。上面にはわずかにちょうど中間の位置に突帯が剥離したかのような痕があるが、確実ではない。また、そのすぐ下にわずかな段差があるが、これについても意図的なものかどうか疑わしい。基底部との接合に関連するオサエによる段差かもしれない。

傘部中央には立飾りの受け部が接続するが、その屈曲点外側に平たく突帯がめぐらされている。そこには何ら文様などはない。

また、立飾り受け部上端は単純な矩形断面の口縁部状を呈しているが、わずかに端部外面に剥離痕ともみられる痕跡がある。これも、単なるナデのあと可能性がある。立ち上がりは約 11 cm で、上端の直径は 20.8 cm である。

この傘部の法量は、先に述べた土台の円筒の直径と比べて、ちょうど傘部と基底部の接続部が円筒上端と接することを示しており、きわめて精度の高い造作になっていたことがよくわかる。

なお、受け部据の平たい突帯は、畿内の蓋形埴輪では 5 世紀前半にならないと認められない特徴であり、前期にあってはむしろ裾を巻くように縦長断面を見せる形に作られることが知られている。また、傘部上面にふつうにある段差や線刻がないことにも注意が必要である。

(2) 採集された形象埴輪（第 43 図 - 37 ~ 41）

墳頂の方形区画や後円部で採集された形象埴輪については、昭和 55 (1980) 年の『六呂瀬山古墳群発掘調査報告書』にだいたい報告されているが、ここではそのうち家形埴輪について補うべき資料を新しく紹介する。

それは、1 号墳出土の寄棟造家形埴輪に代表されるように、北陸地方の家形埴輪の特色は寄棟造に種類が偏っていることがわかつており（高橋 2019）、それが実態としての当地方の建築様式を反映していることが推測されるなか、3 号墳の家形埴輪の種類を点検する必要が出てきたからである。

まず、これまで明確な資料が提示されたことのなかった高床建築があることが 39 と 41 から確実となった。39 は図左上に、刺り込み表現がある特徴的な開口部下端が残存しており、そこが出口で、右側が窓であることわかる破片である。その下に、おそらくねずみ返し状になる突帯の剥離した痕跡をとどめ、さらに下に高床表現のための長方形の透かしが確認できる。41 は昭和 55 (1980) 年の報告書で多数確認できる綾杉文が壁体に刻まれた家形埴輪の隅部の破片で、ねずみ返し状の短い突帯を外側に巡らしている。注目されるのは、そのちょうど裏側に剥離痕が水平に残っていることである。これは畿内などで古墳時代前期後半から中期前葉にかけてよく見られる高床様式の床の剥離痕で、それが確認できたのは北陸では本例が唯一である。

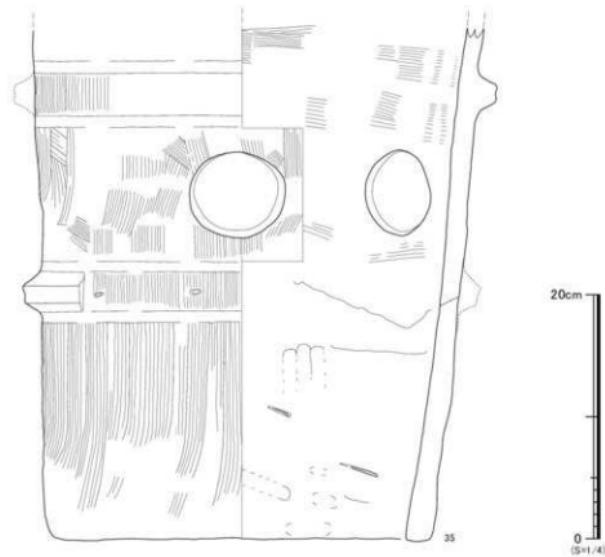
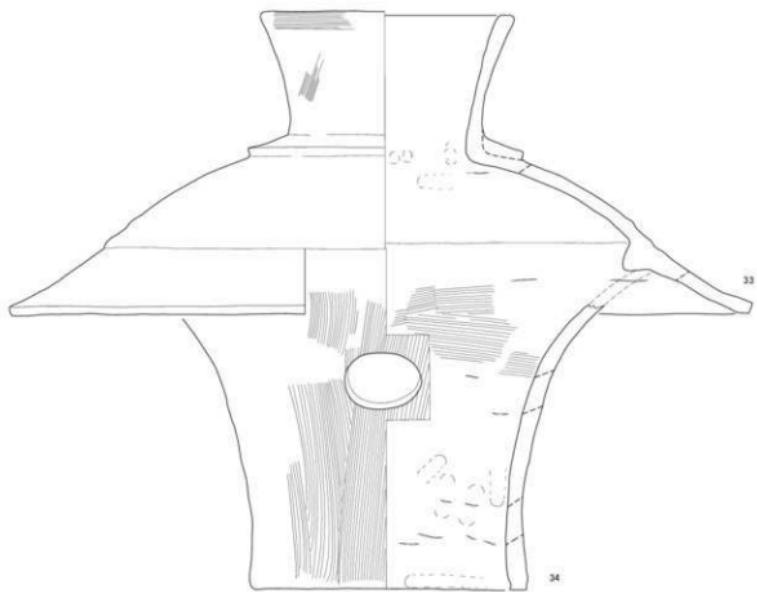
以上の 2 例は、ともに屋根の形式は不明であるが、39 は上層部が開放的な作りであることから、入母屋造になるものと思われる。これに対して、41 は小型での形式であってもありうる。

次に紹介する 40 は、昭和 55 (1980) 年の報告書で第 43 図の 59 としてあるものに相当する破片で、屋根表面の押縁が残っている。押縁は平側の水平方向の押縁に逆 T 字形に直交する垂直方向の 2 本の押縁の痕跡が残り、水平方向の押縁より上の屋根の傾斜がそのまま押縁下方まで続いていくことがわかる。よって、本例は切妻造の屋根部であると判断できる。

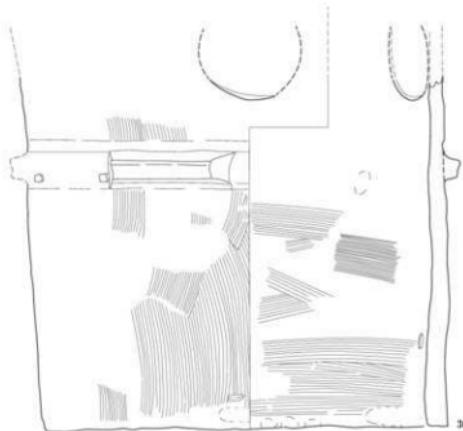
また、37 は数ある棟木の破片のうちでもとくに大きなものである。切妻状の屋根の棟先に裏側から貼り付けるようにして取り付けたもので、断面半円形で定型化した表現である。切妻造でも入母屋造でもどちらにもつけることができる。

なお、38 は軒が壁体から伸びる部分を残す破片として報告書未掲載のものである。軒先には突帯などは付いておらず、軒の短い特徴は、1 号墳の復元寄棟造家形埴輪とも近い。

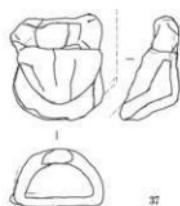
ところで、昭和 55 年の報告書の第 46 図 109 の屋根の個体は平側の屋根が水平押縁を境に傾斜が変わる特徴を見せており、切妻造ではなく入母屋造と判断できる。



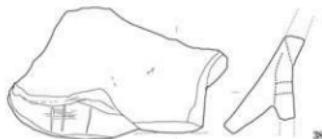
第 42 図 昭和 60 年度遺物実測図 蓋形埴輪



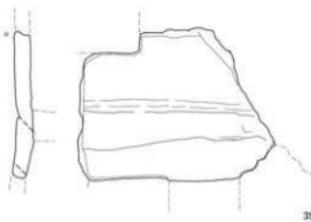
36



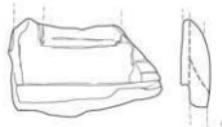
37



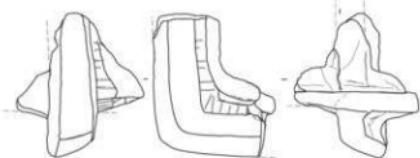
38



39



40



41



(S=1/4)



第 43 図 昭和 60 年度遺物実測図 蓋形埴輪・形象埴輪

これらのことから、3号墳の家形埴輪は、北陸地方の家形埴輪のセットとしては珍しく、高床建物をもち、開放的な入母屋造家、寄棟造家、そして切妻造家を多数そろえた畿内的な内容をもっていたことが判明した。

3 調査のまとめ

(1) 調査

六呂瀬山3号墳の葺石は約20cm強であり、1号墳の葺石と比べると大きく、1号墳の基底石と同じくらいの大きさのものが葺かれていることがわかった。また、3号墳の円筒埴輪は、埴輪断面図から、築造当時、埴輪の第1段突帯まで地中に埋まっていた可能性が高く、埴輪列の掘方は布掘りと壺掘りの2つの工法が用いられていると推測される。

(2) 出土遺物

前述の内容を備えた六呂瀬山3号墳の前方部円筒埴輪について、いくつか特筆すべき点があるのでここで述べておこう。

まず、全体に共通するプロポーションとして、底部の直径が19cmから25cmの間に収まるものがほとんどで、その中でも20cm前後と24cm台のものが拮抗して多数を占めていることがわかる。

それに比べて、第1段の高さはかなり規格が守られているようで、19cmから22cmの間にすべてが収まる特徴がある。これは、畿内の王陵系埴輪の場合は、古墳時代前期後葉～末の規格に合致するため、3号墳の埴輪が古相を帶びて見えることつながっている。

これに応じるかのように、第2段目以上の突帯間隔も15cmから17cm台と直径のわりに広く、同様な指摘が可能である。

一方、広いとはいえ、最上段の高さは中間段と同じで、さらに直立の口縁部形態とともに古墳時代中期の円筒埴輪の雰囲気を醸し出している。中間段の円形透かし孔一対を穿つ様子も同様である。

そして、この前期的な要素と中期的な要素をともに感じさせるのが、第1段目のプロポーションの2大別である。I群に代表される直立の形態のものは前期的に、そしてVI群の一部やVII群などに見る上開きのものが中期的に見えるのである。

ところが、実は後者のシルエットは畿内をはじめとする主要地域の中期に普遍化する上開きの形状とは、あまり関係ない可能性がある。これについては後に説明する。

形状という点で、外見ではわからないが、底部の設置面が内側に広がり、断面が三角になる個体が多いことがひとつ個性となっている。I群に典型だが、III群やVI群やVII群にもそうした個体が存在する。埴輪の規定を設定するときやその後の内側のナデによって作り出されるものであり、作業台から取り外すときなどあまり望ましい形態ではないだろう。わかるものからすると、基底部を板状の粘土でまず作るという畿内前期の手法を採用しておらず、それより上位の粘土紐と近い幅で作成しているようなので、わざわざ断面が広がるようにしつかず作業台に押し当てるなかで出てきた特長であろう。

次に指摘したいのが、外観調整の特長である。主体は1次タテハケメ調整のみで作られているようだが、VI群やVII群のようヨコハケメを加えているものが一定量存在している。気をつけないで見ると、ヨコハケメは突帯貼り付け後の外面2次調整として受け取りがちであるが、図に示してあるように、突帯をめぐらす前の所作であるものがむしろ多いようである。

少しだけ傾くが水平方向にめぐらすこのヨコハケメはいわゆるA種ヨコハケメと呼ばれる、腕の動作で繰り返しかけるものというよりは、腕の動作より対象とする埴輪を回転させながら長く施すものである。

このようなヨコハケメを用いる個体以上に注意されるのが、IX群とした個体である。

透かし孔については、以下のことが指摘できよう。

円形透かし孔は2個1対を穿つのが基本であるが、1点だけその下の段に縦長不整長方形になりそうな透かし孔を穿っている個体がある。本個体は器壁がとても薄く、外面に2次タテハケメが確認できる特別なものである。おそらく、その段が最下段になるのだろうが、最下段に円形の透かし孔をもつVII群を合わせた存在比率

からすると、畿内周辺では中期初めの有り様と共通する。

確認できる中間段のすべての透かし孔が円形となるのは、畿内では古墳時代中期以後であり、地方ではより遅くまで方形、長方形あるいは半円形の透かし孔が残ることがわかっている。

透かし孔ではないが、北陸地方の円筒埴輪を考えるうえでかねてから注意されてきた底部の三角切り込みが1点とは言え本資料体のなかでIX群として確認されたことは重要であろう。本個体は先に第1段目が全面タテハケメニ次調整によって整えられているとして個性的な個体であり、けして六呂瀬山3号墳の円筒埴輪を代表するものではない。また、その点、上開きのシルエットも古墳時代中期的な動静を反映したものとはいえないのであり、土器に近い粘土紐の積み上げ動作により開いただけといえよう。基底部の粘土板成形を省略した結果出てきたものではないのである。

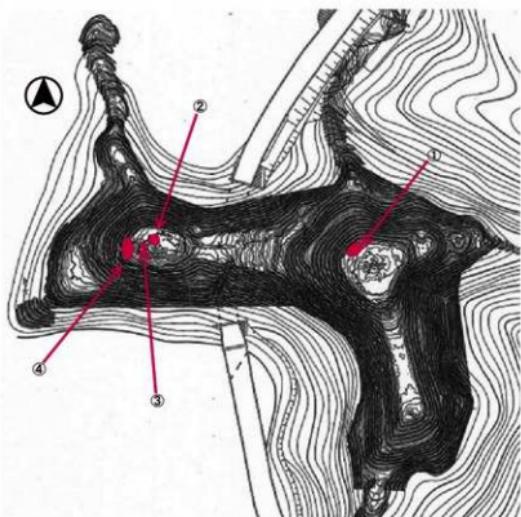
一方、半円形の抉りを入れた28は、まだその他の円筒埴輪と共通している部分が多いが、やはり外面調整のハケメが乱雜であり、突帶も共通するように高く突出する。

(註) 川西はこのなかで、六呂瀬山3号墳の円筒埴輪について、加賀の森木大塚古墳や灘5号墳などとともに、「畿内第Ⅲ記のものとほぼ変わらない特徴をそなえている」と述べているが、本書での報告資料からはそのようにとらえることができない(川西 1978)。

第5節 採取遺物

1 採取場所について（第44図）

六呂瀬山古墳群では、近年、イノシシ等による獣害が多く、1号墳・3号墳共に墳丘を掘り起こされる等の被害が出ている。それらの被害のうち、埴輪片を採取した場所を図に示した。



第44図 採取場所

第11表 採取場所一覧

採取位置	採取場所	採取遺物番号
①	1号墳後内部墳頂	第45図-1
		第45図-2
		第45図-4
		第45図-5
②	3号墳後内部墳頂	第45図-6
③		第45図-7
④		第45図-3

2 採取遺物

先の獣害によって採取した埴輪片等を以下に示す。確認された埴輪は大きく円筒埴輪と形象埴輪に分けられる。

円筒埴輪（第45図・1～5）

1号墳

1は口縁部であり、ほぼ直立した形状をしている。器壁は、凹凸がなく、均一に整えられている。外面は風化により摩滅しており調整等を確認することはできなかった。

2・4は胴部である。2の突帯は、断面が台形で上に少し反るような形をしている。残念ながら4の突帯は剥がれているが、2のような台形であった可能性が高い。また、4には突帯貼付のための沈線が残っているほか、突帯を貼り付けて整えた際のユビオサエもみられる。

5は底部であるが、第1段突帯までの高さは分からぬ。底部径は六呂瀬山3号墳のものに近い。また、底部の下部分ではみ出した粘土を切り取った跡もみられた。さらに、底部は少し楕円形に歪んでおり、部分的に粘土紐の継ぎ目がみられる。

3号墳

3は胴部で、一部に黒斑を確認した。突帯は、張り出したような帽子の縁のような台形である。胴部径は六呂瀬山1号墳で採取した2や4より少し大きい。

形象埴輪（第45図・6・7）

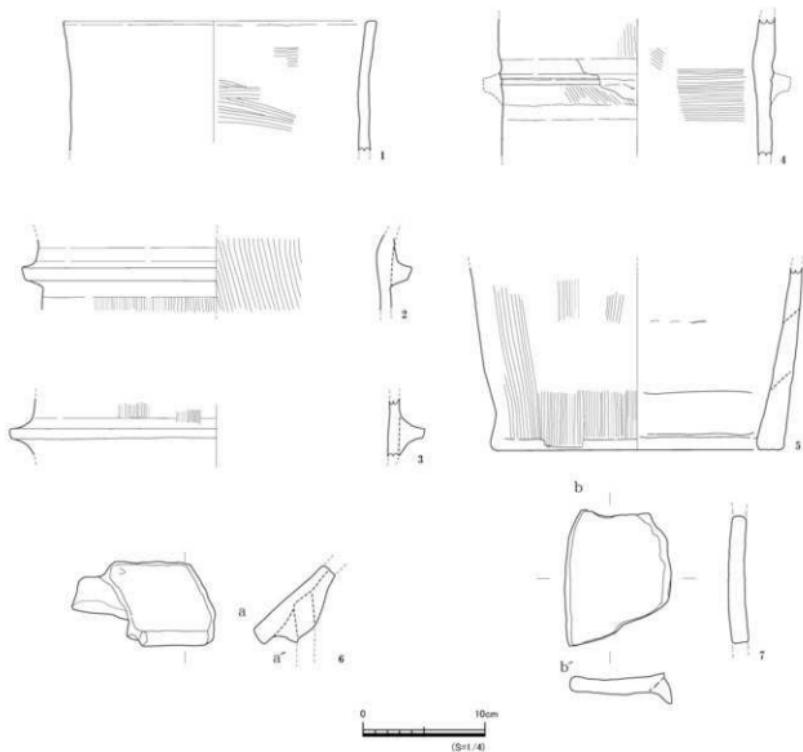
3号墳

6は家形埴輪の屋根部分である。実測図中に示したa-a'の部分はイキており、六呂瀬山3号墳から出土した家形埴輪に比べると軒先下が短い。

7は不明形象埴輪である。実測図中に示したb-b'の部分はイキしており、全体的に薄く磨かれて整えられている。また、剥がれている部分は表裏どちらも貼り付けた際に潰れたように広がっていることから、何かに接合するものであった可能性が高い。

3まとめ

採取された埴輪は、1号墳と3号墳で確認されたものであり、器壁の厚さや胎土、色調等が酷似している。採取された埴輪はすべて破片であるが、1号墳と3号墳では同じような規格のもと製作された可能性が高いことが分かる。



第45図 採取遺物実測図

第 12 表 表探遺物観察表(円筒埴輪)

探査番号	番号	表探場所	部分名稱	残存高	復元径	器壁	焼成	外面調整	内面調整	粘土	色調
第 45 回	1	1 号墳	口縁部	10.5 cm	25.4 cm	0.8 ~ 1 cm	良	不明	1 次ナナメハケ 2 次ヨコハケ	0.2 ~ 0.4 cm 代の 小石含む	橙色 (Hue7.5YR7/6)
第 45 回	2	1 号墳	胸部	6 cm	28.0 cm	1 ~ 1.4 cm	良	タテハケ	ナナメハケ	0.2 ~ 0.3 cm 代の 小石含む 種に 0.5 cm 代の 小石含む	橙色 (Hue7.5YR7/6)
第 45 回	3	1 号墳	胸部	11 cm	20 cm	1 cm	良	1 次ナナメハケ 2 次ヨコハケ ユビオサエ	1 次ナナメハケ 2 次ヨコハケ	0.2 ~ 0.3 cm 代の 小石含む	橙色 (Hue7.5YR7/6)
第 45 回	4	1 号墳	底部	15 cm	24 cm	1 ~ 2 cm	良	1 次タテハケ 2 次タテハケ	ナデ	0.2 ~ 0.4 cm 代の 小石含む	橙色 (Hue7.5YR7/6)
第 45 回	5	3 号墳	胸部	5 cm	30.0 cm	1 cm	良	タテハケ	ナデ	0.2 ~ 0.4 cm 代の 小石含む	浅黄褐色 (Hue7.5YR8/4)

第 13 表 表探遺物観察表(形象埴輪)

探査番号	番号	名称	残存高	器壁	焼成	調整	粘土	色調
第 45 回	6	家形埴輪	7 cm	1.5 ~ 3 cm	良	ナデ	0.1 ~ 0.3 cm 代の小石含む	浅黄褐色 (Hue7.5YR8/4)
第 45 回	7	不明	10 cm	1 ~ 2 cm	良	ミガキ	0.1 ~ 0.3 cm 代の小石含む	黄褐色 (Hue7.5YR8/8)

第4章 考察

第1節 古墳時代中期前葉の円筒埴輪と六呂瀬山3号墳の埴輪

花園大学文学部
教授 高橋 克壽

古墳時代中期前葉になると、畿内では百舌鳥・古市古墳群の巨大古墳が圧倒的規模で造営され、それに応じるように大型の円筒埴輪も古墳を莊嚴するために使われた。1mを優に超えるその大型円筒埴輪は時に陪塚においても使用されることもあったが、全長100m以下の中小規模の前方後円墳やその他の墳形の古墳では、陪塚格の古墳を除いてはるかに小さい円筒埴輪が主体的に使用されるようになり、古墳時代前期とは大きな違いが生じることとなる。それより大型の円筒埴輪が混じる場合もあるが、少量である。

例えば、古市古墳群の一画にある大阪府岡古墳は、古墳群中では比較的初期のもので仲津山古墳に並行する時期の方墳だが、その円筒埴輪は4段構成で全長約50cmの規格に作られている（図1-1）。また、同じ河内でも古市古墳群とは離れて存在する中河内地域の最高首長墓である大阪府心合寺山古墳では、5段構成で全長約55cmの製品が並べられたが、これも、六呂瀬山3号墳の円筒埴輪と比較するとかなり小型であることになる。なお、後続の地域首長墓である大阪府堂山1号墳の円筒埴輪（図1-5）は心合寺山古墳の規格をほぼ踏襲したものとなっている。ヘラ記号の共通性に両古墳の埴輪生産体制の継続性がうかがわれる。両古墳は、底部に三角切込みがあり、六呂瀬山古墳群との共通性が指摘できる点でも注目される。

一方、百舌鳥古墳群に対して少し距離をもちつつ中期初めに築造された地域首長墓の大和府和泉黄金塚古墳の円筒埴輪（図1-3）も、先の岡古墳とほぼ同様の規格で作られていることがわかる。ただし、透かし孔の形状や穿ち方はより前期の伝統を残している。また、畿内でも中枢からはずれた揖津の大型円墳の首長墓である大阪府豊中大塚古墳の円筒埴輪（図1-2）も実はその全長は岡古墳や和泉黄金塚古墳と同じなのである。

わずかな代表例からではあるが、百舌鳥・古市古墳群をはずれると、畿内でも中期前半の円筒埴輪の大きさは、全長50cm前後へと縮小する傾向にあることが読み取れる。

ところが、実は大和の中期前半の大型古墳においては、そうした規模の縮小がすぐにはみられない。図2に掲げたもののうち、6の奈良県一本松古墳の陪冢に使用された円筒埴輪は馬見古墳群の中央部、巣山古墳周辺では時期がさかのぼるもので全長72cmと堂々たるべきをもつてている。それより、やや時期の下る奈良県島の山古墳の円筒埴輪（図2-7）も、復元段数は異なるもほとんど変わらない法量になり得そうである。埴丘規模が200mクラスで王權中枢に準ずる大和の在地勢力の力量がうかがわれる。大和盆地南東部の奈良県茅原大墓古墳の円筒埴輪（図2-8）もかなりの大型品である。

続く大和盆地南部の最高首長墓の奈良県宮山古墳の例（図2-9）は60cm余りと河内和泉ほどではないが縮小し、ほぼ同時期の大和盆地北部の奈良県平塚1号墳の円筒埴輪（図2-10）も中規模前方後円墳ながらその大きさを保持している。

このように、大和の中期前半の有力首長墓は大阪府下の首長墓と比べると円筒埴輪が一回り大きく、とくに中期初めは70cmを超える大きさに作られていることが際立っている。そして、その規模は11に合わせて載せた六呂瀬山3号墳の円筒埴輪の復元品に合致しているのである。

ところでこの法量は、大和北部を中心に広まった4世紀後半に始まる斎一性の高い鋸付円筒埴輪の大小の規格のうち小さいほうの規格を踏襲していると見ることができ（高橋1994）、それは大和盆地東部の首長墓である奈良県東大寺山古墳の円筒埴輪にも見出せるものである。六呂瀬山3号墳の円筒埴輪の規格の淵源がこ

の段階にまでさかのぼる可能性があるということになる。

ここまででは畿内中枢の円筒埴輪を概観してきたが、六呂瀬山3号墳と時期的に平行すると考える周辺各地の大型首長墓の円筒埴輪を見てみよう。

まず、資料の豊富な畿内より西の地域からであるが、兵庫県行者塚古墳の円筒埴輪（図3-12）をはじめ播磨や但馬地域に限っては兵庫県壇場山古墳・同池田古墳などの中期前葉の大型前方後円墳では70cm台に届くようなものがあるらしい。しかし、広島県三ツ城古墳の円筒埴輪（図3-13）を除くと他の多くの地域ではそれ以後50cm台に集中する規格が守られていることがわかる。それらは、また、兵庫県茶すり山古墳（図3-14）、岡山県金蔵山古墳（図3-17）、徳島県渋野丸山古墳（図3-16）などみなそぞうであるように、3条突帯4段構成に作られることが基本である。先に見た畿内の古墳でいえば、畿内中枢をはずれた大阪府の諸古墳などとはほぼ変わらないことになる。なお、宮崎健西都原169号墳（図3-15）は中規模の方墳であるが、いうまでもなく南九州最大の盟主墳である女狭穂塚古墳の陪塚であり、主墳でもこの規格が守られているようだ。

これに対して、東日本では前期の特長が強く残る岐阜県星板大塚古墳の円筒埴輪（図4-18）こそ、六呂瀬山3号墳に匹敵する法量があるが、中期古墳として名実ともに地域を代表するような首長墓として築かれた前方後円墳となると、三重県宝塚1号墳（図4-21）や群馬県白石稻荷山古墳（図4-19）の円筒埴輪のように、50cm前半台にまとまる法量に作られるようになる。西日本同様に3条突帯4段構成が基本だが、東京都野毛大塚古墳はプロポーション的にも独自な2条突帯で3段構成の重厚な円筒埴輪となっている。段数より全長が重視されたことを意味してよい。

このように、列島全域において、大王墓を含む百舌鳥古市古墳群を除くとほとんどの首長墓で、50cm台程度の円筒埴輪が埴丘で使用される円筒埴輪の大半を構成するようになることが判明した。さらに、そうした中でも、3条突帯4段構成の埴輪が主流となるのである。ただし、大和の首長墓クラスの円筒埴輪は一回り大きいことは、その地位の高さを反映している可能性がある。

あらためて、六呂瀬山3号墳の円筒埴輪（図2-11）と比較してみると、形象埴輪から絞り込まれた中期前葉という時期においては、突出して大きい法量に作られていることがわかる。これはどのように評価することができるであろうか。

単純に、六呂瀬山3号墳の被葬者の地位と実力が、先に列挙した東西日本の主要首長墓の被葬者に比べて群を抜いて高かったことが考えられるであろうか。仮にそう考えることが許されるならば、そこに観察される円筒埴輪の製作技術には必然的に王陵系埴輪（高橋編2008）の諸特徴が認められてしかるべきである。ところが、すでに紹介したように、ほぼすべての項目においてそのような技術的関連性は認めがたい。六呂瀬山3号墳の円筒埴輪の諸属性は、ここに列挙した中期前葉の各地の円筒埴輪にはほとんど見出せないものであり、むしろ前期古墳の円筒埴輪に多く認められる古い要素なのである。このことは六呂瀬山3号墳の円筒埴輪生産の独立性そして保守性を示すものにはかならない。後項で小林美土里が述べているとおり、手縫ヶ城山古墳の円筒埴輪から続く越前の円筒埴輪の伝統である。

六呂瀬山1号墳の円筒埴輪については、本報告書掲載の資料を含めていまだ良好な十分な量はないが、手縫ヶ城山古墳と六呂瀬山3号墳の円筒埴輪とほとんど差を見出しがたいものであることは確実と思われる。すなわち、形態や法量、あるいは調整技法などによる時期決定が難しいのである。しかしながら、北陸最大級の古墳を手縫ヶ城山古墳、六呂瀬山1号墳といいついで高い山頂に築くことなどは想定しがたい。また、1号墳と3号墳とでは葺石の葺き方に大きな違いがあることが今回の調査でわかつてきた。

埋葬施設や造り出し、陪塚などの構造についてもいまだ明らかになっていない現状にあって、年代推定にとって重要な資料が先に紹介したものを含めた形象埴輪である。それらはいずれも、出土状況が十分明らかとはいえないが、昭和55年の報告書の中に1号墳と3号墳のそれぞれ年代決定の根拠となるものがあるので以下、いくつか挙げておきたい。

1号墳の資料は量的に限られるが、その中に器種が明確なものが草摺（甲冑）形である。草摺を独立で表現しているのか、それとも上部がそのまま短甲に移行するものかはなかなか判断つかないが、円筒部と形象部

の接合部は3号墳のそれと大きく異なり、分離造形であった可能性がある（高橋 1988）。つまり、3号墳の甲冑形埴輪より古く位置づけられそうである。

そして、完形に復元された寄棟造家形埴輪は、類まれな草壁構造の軸部を表現したもので、3号墳には見出せない形態である。これも時期的に遡ることを示している。

これに対して、本報告でも数点紹介した3号墳の形象埴輪を見てみよう。先に詳しく述べたように、それらは北陸地方の家形埴輪のセットとしては珍しく、高床建物をもち、開放的な入母屋造家、寄棟造家、そして切妻造家を多数そろえた畿内の内容をもっていた。1号墳の草壁構造の家とは大きな違いがある。また、それらを飾る墨木（堅魚木）は、単純な円筒状ではなく、両端が鼓状に広がり端面を整えるその形から、古墳時代中期初めないし前葉に限定される特徴を有している。前期に遡らせることはできない（筒井編 2005）。

家形埴輪にもまして時期の上限を決めるうえで欠かせない破片が甲冑形埴輪の草摺上半を残す破片である。それは裏面に円筒部への形象部の接合を重厚に行っていることを示す破片で、表面状態には草摺部上端の段差に統いて、一部、短甲の鉄板と革縫の表現を残しているのである。これは明らかに短甲・草摺を一連で造形した甲冑形埴輪の破片であることを示している。その時期は遡っても中期前葉で、中期初めではないと判断される。このほか、蓋形埴輪の立飾り基部の破片がある。これは、畿内を中心に見る円筒の軸に皿状の立飾り基部を作り出すものと大きく異なり、おそらく車部から立飾りまで連続して作る型式であったことが示されている。車部中央に立飾りの軸を挿入する短い軸受け部が定着するのは中期前葉であることから、本例は中期前葉を下限とするものとみられる。

以上のことから、形象埴輪から見た場合、六呂瀬山3号墳の築造年代は古墳時代中期前葉で、百舌鳥古市古墳群の王陵でいえば、百舌鳥古墳群の上石津ミサンザイ古墳、古市古墳群の仲津山古墳に平行する時期のものであると限定することができる。

したがって、六呂瀬山1号墳はそれより少し遡る4世紀末から5世紀初の古墳時代中期初め、通説でそれよりさらに1段階古い手織ヶ城山古墳は4世紀後葉～末の前期末ということになろう。

こうみてみると、先の円筒埴輪の検討において、東西日本の多くの中期前半の地域首長墓の円筒埴輪が全長70cmを大きく下回るなかで、六呂瀬山3号墳の円筒埴輪が70cmを超える規格で作られていたことは次のように考えられる。つまり、越前地域で4世紀後葉に最初の大首長墓として登場した手織ヶ城山古墳は、当時畿内周辺に拡散していたものと同じ規格を採用した。しかし、その後、5世紀前葉までにはかの王陵周辺あるいはその影響を強く受けた全国各地域では製作技法とともに小型化する動きも一緒に享受したのとは異なり、越前では手織ヶ城山古墳の生産体制と規格をその後も引き続き踏襲していくとみなせるのである。もっとも、それは円筒埴輪に限ったことであり、形象埴輪については、先端的なものを取り入れることを目指してもいたのである。それでも、かなり限定的なものであった。

このような姿勢は、古墳の墳形や埋葬施設に船形石棺を用いることなどについても指摘できることであり、いかに越前の首長が独立性を堅持していたかが読み取れよう。

引用・参考文献

- 高橋克壽 1988 「財器埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71卷第2号、史学研究会
高橋克壽 1994 「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41卷第2号、考古学研究会
高橋克壽編 2008 「特輯 王陵系埴輪の地域波及と展開」『古代文化』第59卷第4号・第60卷第1号、古代学協会
筒井正明編 2005 『石山古墳』三重県埋蔵文化財センター

使用図面

図1-1：藤井寺市教育委員会 1989 『岡古墳』（藤井寺市文化財調査報告第5集）

図1-3：藤井寺市教育委員会白石耕治編 2005 『和泉黄金塚古墳 発掘調査報告書』和泉市教育委員会

図1-4：吉田野乃編 2001 『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書』（八尾市文化財調査報告45・史跡整備事業調査報告2）

八尾市教育委員会

図 1-5 : 三木弘編 1994『堂山古墳群』(大阪府文化財調査報告書第 45 号) 大阪府教育委員会

図 2-5 : 小栗明彦編 2012『馬見古墳群 一本松2号墳』(奈良県文化財調査報告書第 156 集)

図 2-6 : 町田章編 1975『平城宮発掘調査報告』VI (奈良国立文化財研究所学報第 23 冊) 奈良国立文化財研究所

図 2-7 : 見須俊介 2019『島の山古墳 第 3 ~ 13 次発掘調査報告書』川西町教育委員会

図 2-8 : 福辻淳編 2015『茅原大墓古墳 第 1 次~第 6 次発掘調査報告』(桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第 43 集)

桜井市教育委員会

図 2-9 : 木許守編 1996『奈良県御所市宮室山古墳範囲確認調査報告』(御所市文家財調査報告書第 20 集)

図 3-12 : 加古川市教育委員会 1997『行者塚古墳発掘調査概報』(加古川市文化財調査報告書 15)

図 3-13 : 石井隆博 1994『史跡三ツ城古墳整備事業報告書』東広島市教育委員会

図 3-14 : 兵庫県教育委員会 2010『史跡 茶すり山古墳』(兵庫県文化財調査報告第 383 冊)

図 3-15 : 大木努編 2010『西都原』II (大阪大谷大学博物館報告書) 第 56 冊 大阪大谷大学博物館

図 3-16 : 西本沙織 2017『史跡洗野丸山古墳発掘調査報告書』I、徳島市教育委員会

図 3-17 : 安川満編 2019『金蔵山古墳-範囲確認調査報告-』岡山市教育委員会

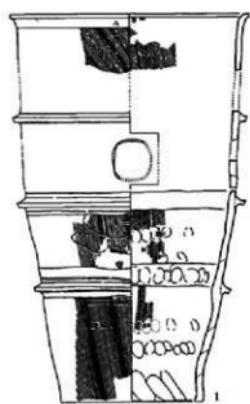
図 4-18 : 大垣市教育委員会 2003『史跡 昼飯大塚古墳』(大垣市埋蔵文化財調査報告書第 12 集)

図 4-19 : 志村哲 1996・1997『範囲確認調査報告書』I・II

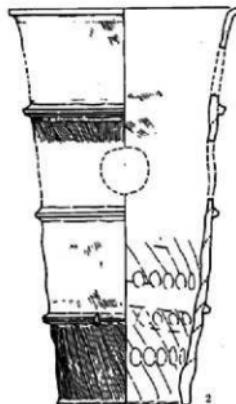
図 4-20 : 野毛大塚古墳調査会 1999『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会

図 4-21 : 福田哲也・松葉和也編 2005『史跡宝塚古墳』(松阪市文化財報告書 1) 松阪市教育委員会

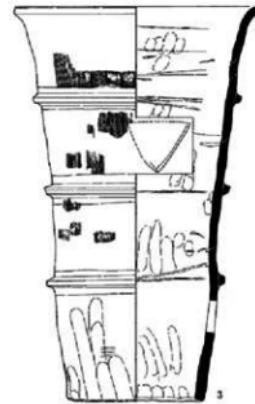
図 5 : 福井県教育委員会 1980『六呂瀬山古墳群 - 国道 364 号線建設に伴う発掘調査報告書 -』福井県埋蔵文化財調査報告第 4 集



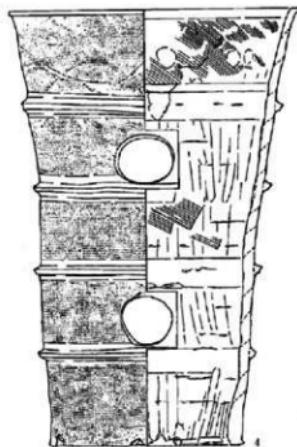
岡



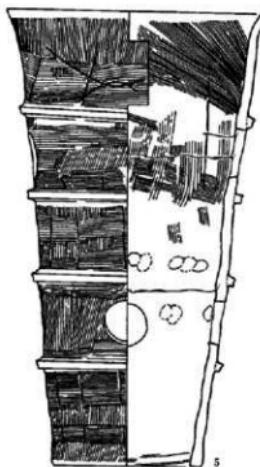
豊中大塔



和泉黄金塔



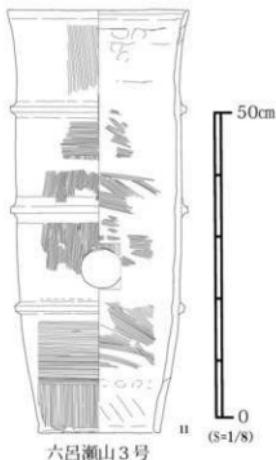
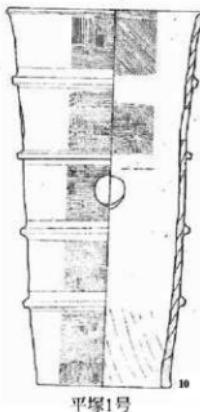
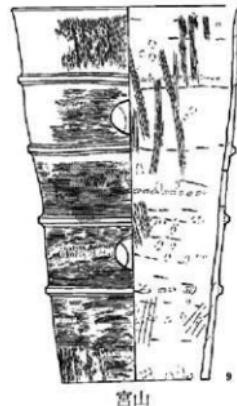
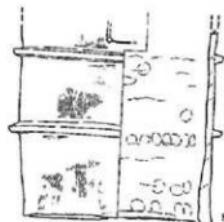
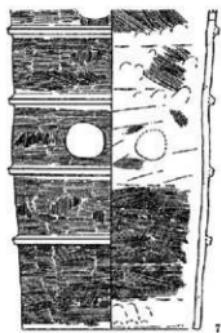
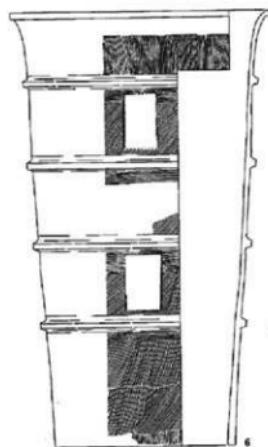
心合寺山



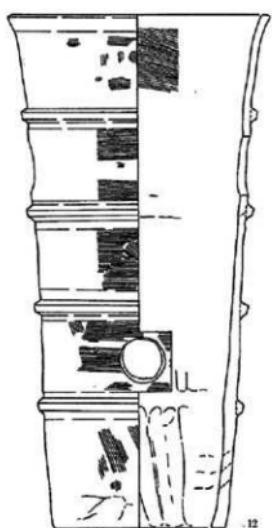
堂山1号



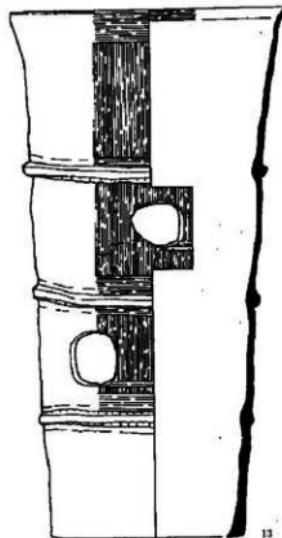
第1図 中期前葉の円筒埴輪（大阪）



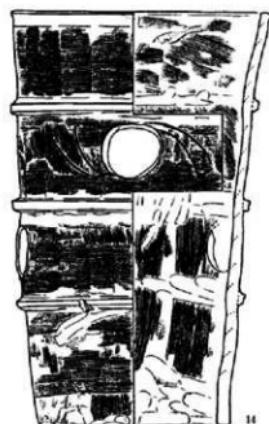
第2図 中期前葉の円筒埴輪（奈良・六呂瀬山3号）



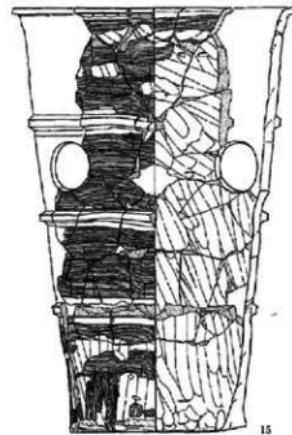
行者塚



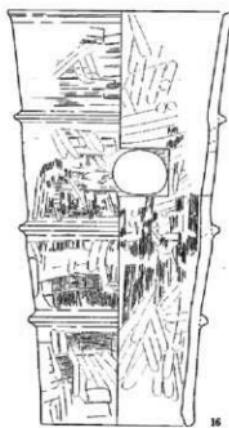
三ツ城



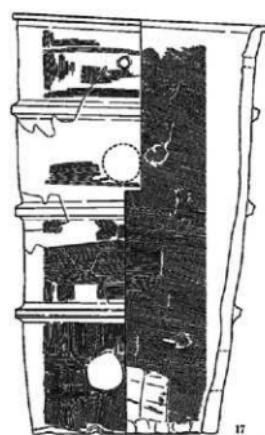
茶すり山



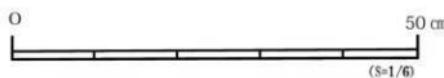
西都原 169 号



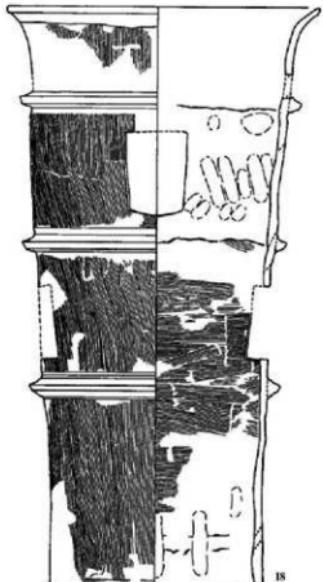
渋野丸山



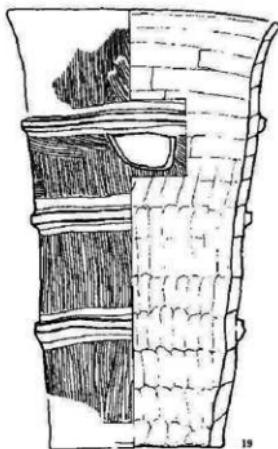
金藏山



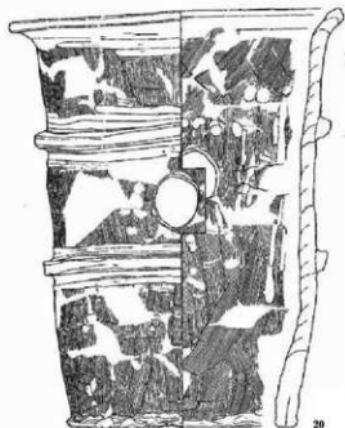
第3図 中期前葉の円筒埴輪（西日本）



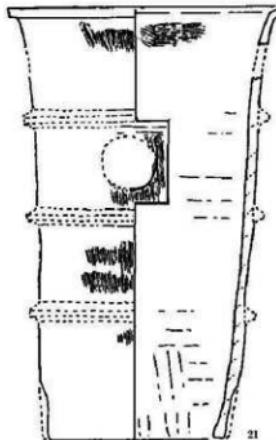
野毛大塚



白石稻荷山



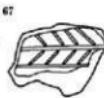
野毛大塚



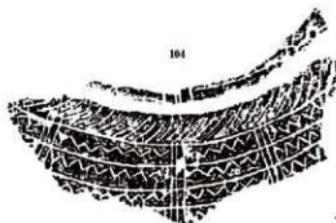
宝塚



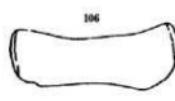
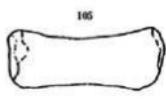
第4図 中期前葉の円筒埴輪（東日本）



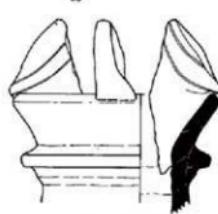
1号墳 甲冑形埴輪



3号墳 甲冑形埴輪



3号墳 家形埴輪輕木



3号墳 蓋形埴輪



第5図 六呂瀬山3号墳(形象埴輪)

第2節 六呂瀬山古墳群からみた古墳時代中期の越前

坂井市教育委員会 文化課
学芸員 小林美土里

六呂瀬山古墳群は前方後円墳2基と方墳2基からなり、の中でも六呂瀬山1号墳は、北陸最大級の規模を誇る前方後円墳として知られている。しかし、六呂瀬山1号墳についてはあまり調査が進んでおらず、古墳の正確な時期等、詳細な情報は不明のままであった。同古墳群の六呂瀬山3号墳は、昭和53年と昭和60年代に調査が行われ、円筒埴輪や家形埴輪、蓋形埴輪等の形象埴輪、葺石の情報が明らかになっている。六呂瀬山古墳群の時期については、全国の円筒埴輪を編年した川西安幸が「円筒埴輪総論」で、六呂瀬山3号墳をⅢ期に位置付けた（川西1988）。そして、昭和55年に発行された報告書の中でも、青木豊昭は3号墳を5世紀前半、1号墳をそれに先行する西暦400年頃に位置付けた（福井県教委1980）。しかしながら、これはあくまでⅡ期の手縄ヶ城山古墳に始まる大首長墓の順番を考えた相対的な編年観によるもので、埴輪などの出土遺物からの傍証は伴っていないかった。それだけ、六呂瀬山1号墳については、発掘調査による埴輪等の出土資料が待望されたのであるが、残念ながら多くの資料を得るには至らなかった。

今回調査で出土した六呂瀬山1号墳の円筒埴輪は破片が多く、全形や底部高が分かるものはなかった。新たに出土した1号墳の資料を整理すると以下のようになる。

六呂瀬山1号墳の突帯の形は、台形が基本形で厚みを帯びたもの、帽子の縁のようなものがある。また、外面調整は表面の風化により調整が見にくくなっているが、タテハケメ・ナナメハケメを確認し、ハケメの荒いものと細かいものがあることを確認した。出土した円筒埴輪の底部径は20cm～27cm前後あり、比較的大きめなものが多い印象を受ける。

新資料が明らかになったものの、残念ながら六呂瀬山1号墳は、1基のみで語れる情報量は少なく、時期を推定することは難しい。そのため、同古墳群である六呂瀬山3号墳の円筒埴輪と比較し、時期等を見ていく。

六呂瀬山3号墳の円筒埴輪は、先に第3章第4節で報告したとおり、台形の突帯と併せて帽子の縁のような平たい突帯があり、底部高は20cm前後あり、底部径は20～27cmの中に収まるものが多く比較的の全形の長さが大きくなる。また、外面調整には1次タテハケメと2次ヨコハケメが施されているが、ところどころで、突帯を付ける前に施されたと考えられる1次ヨコハケメも確認できる。このヨコハケメは畿内周辺地域でみられるようないわゆるB種ヨコハケメではなく、越前独特の調整とみられる。

1号墳の円筒埴輪と比較してみると多少の違いがあれど、突帯の形や底部径の大きさがほぼ一致する。今回の調査では、底部高や外面調整の1次ヨコハケメの有無は確認できなかつたが、両古墳に並べられた円筒埴輪は同じ規格を目指して生産された可能性が高いことが分かった。胴部の様子も六呂瀬山1号墳のものは23～28cmあるのに対し、3号墳でも23～26cmと大差ない。このことからも、両古墳の円筒埴輪の規格は同じものを意識して作られたといえよう。

両古墳の円筒埴輪は非常に良く似ており混ざってしまうとどれがどの古墳に伴っていたものか分からなくなるほどである。そのため、両古墳の築造時期の差を比較することは、現在のところ断定することは難しい。

両古墳の築造時期は、六呂瀬山3号墳から甲冑形埴輪が出土しており、すでに高橋克壽が述べたようにそれから推定することが可能である。3号墳の甲冑形埴輪は、昭和55年発行の報告書で掲載された通り、革綴短甲と草摺が一体化したものであり、この破片の特徴から器財埴輪の編年から一類二式に位置付けられ、中期前葉の時期に作られた可能性が高い（高橋1988年）。

同じように、1号墳からも甲冑形埴輪は出土しているが、こちらの破片では形式まで確定することは難しい。しかし、前項で述べられている通り、六呂瀬山1号墳が中期初頭、3号墳が中期前葉と推定してよいだろう。

ここまで六呂瀬山古墳群に築かれた1号墳と3号墳では、時期差が顕著にみられないほど円筒埴輪の規格

等が似ていることを繰り返し述べてきたが、1つ疑問としてあげられるのがこれは六呂瀬山古墳群のみで終結するものなのかどうかという点である。知られている通り、六呂瀬山1・3号墳は舟形石棺の埋納が推定され、手縫ヶ城山古墳・六呂瀬山古墳群・免鳥5号墳…と続いている越前の首長墓の系列に含まれている。一番初めに首長墓としてあげられる手縫ヶ城山古墳は、永平寺町の松岡古墳群に属するものであり、六呂瀬山古墳とは違う場所に築かれている。さらに、越前の首長墓は六呂瀬山3号墳が築かれた後は免鳥5号墳を経由して、また松岡古墳群周辺に築かれることになり、六呂瀬山古墳群が異質なようにみえる。そのため、円筒埴輪から越前の首長墓の繋がりを追ってみたい。

越前の首長墓として初めて登場する手縫ヶ城山古墳の円筒埴輪は、底部高が約20cm、底部径が25cmと六呂瀬山3号墳に並べられた円筒埴輪と近い。また、外面調整は1次タテハケメや1次か2次か不明ながらもヨコハケメも確認されている。三角形ないし半円形の透かし孔を一段目に穿つ点は時期的に遡ることを示している。

一方、六呂瀬山3号墳の次に築かれた免鳥5号墳では、底部高が17.5cm、底部径が約20cmと少し底部高が低くなっている。外面調整には1次タテハケメ、2次ヨコハケメが見られるなか、六呂瀬山3号墳で確認されたような1次ヨコハケメも確認できる。底部高等は時期差を表し、免鳥5号墳は時期が新しくなった六呂瀬山古墳群の次の世代の造営と考えられる。なお、この1次ヨコハケメは泰遠寺山古墳でも確認できる。円筒埴輪自体の規格に変化はあるものの、手縫ヶ城山古墳から続く埴輪製作の伝統が長く続いていることが分かる。また、この1次ヨコハケメが見られる時期は、底部に三角切込みがみられる時期とも重なっていることも興味深い。

しかし、松岡古墳群の鳥越山古墳の築造を皮切りに越前の首長墓では、1次ヨコハケメの調整は見られなくなる。古墳時代中期中葉頃に出現する永平寺町の鳥越山古墳からは窑窓が導入され、同時にBe種ヨコハケメを施すようになる。その技法は二本松山古墳まで続く。また、鳥越山古墳では新しく堅穴系横口式石室が採用される等、これまでのものとは違う様子を見せている（松岡町教委2005）。鳥越山古墳は、円筒埴輪の技法や埋葬施設から分かるように、意図的に前の世代の伝統ではなく、新しいものを取り入れたと考えられる。ただし、鳥越山古墳に続く石船山古墳や二本松山古墳では円筒埴輪の技法は受け継がれるものの、埋葬施設に関しては舟形石棺の採用を続け、九州からの影響を受けていないことは注意すべきであろう。

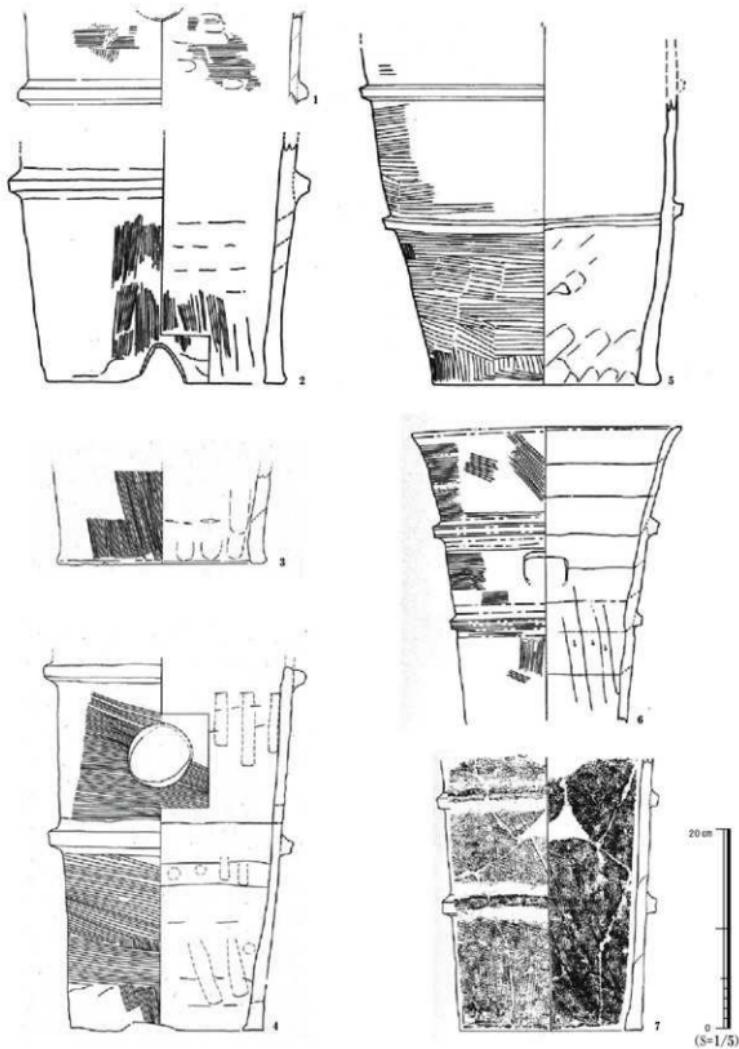
今後、六呂瀬山古墳群の立地等も含めて、古墳築造時期に越前でどのような動きがあったのかを明らかにしていきたい。

引用・参考文献

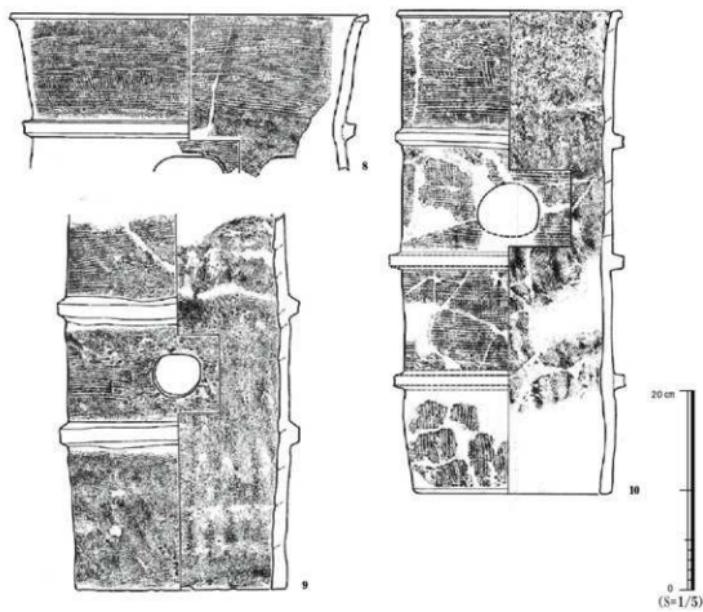
- 高橋克壽 1988 「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』71卷2号抜刷
高橋浩二 2011 『手縫ヶ城山古墳－測量調査報告－』富山大学人文学部考古学研究室
川西宏幸 1988「第四章 円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』
福井県教育委員会 1980『六呂瀬山古墳群－国道364号線建設に伴う発掘調査報告書－』福井県埋蔵文化財調査報告第4集
松岡町教育委員会 2005『石舟山古墳・鳥越山古墳・日本松山古墳－平成13年～
平成15年度町内遺跡範囲確認調査報告書－』
古川登 1982『松岡古墳群の埴輪』松岡古墳群を守る会
若狭町文化財室 2008『若狭の古墳時代－韓半島との交流史のなかで－』若狭町歴史シンポジウム記録集

使用図面

- 図1-1:古川 登 1982『松岡古墳群の埴輪』
図1-2:平成30年度修士論文の際に小林が実測したものを使用した。
図1-5:福井市文化財保護センター 2007『免鳥古墳群－範囲確認調査概要報告書－』
図1-6:福井市 1990『福井市史』資料編1 考古
図1-7:松岡町教育委員会 1999『泰遠寺山古墳』松岡町埋蔵文化財調査報告書第2集
図2-8～10:松岡町教育委員会 2005『石舟山古墳・鳥越山古墳・日本松山古墳－平成13年～平成15年度町内遺跡範囲確認調査報告書－』



第1図 古墳時代中期の越前の埴輪
 1・2：手塚ヶ城古墳 3：六呂瀬山1号墳 4：六呂瀬山3号墳
 5：免島5号墳 6：天神山7号墳 7：泰遠寺山古墳



第2図 古墳時代中期の越前の埴輪
8:鳥越山古墳 9:石船山古墳 10:二本松山古墳

第5章 まとめ

これまで、六呂瀬山1号墳は測量図面から約140mであり、北陸最大級の前方後円墳として知られてきた。しかし、墳裾を確定できるような、本格的な調査がなされていなかったことから、古墳全長の正確な数値は未定となっている。

平成30年度の調査によって後円部墳丘の裾を確認し、測量図面と照らし合せた結果、全長が長くなる可能性も考えられるが、前方部裾部については、未調査のため全長の数値拡大は可能性の域に留めておく。

測量図面から後円部の西側に少し張り出した部分が認められ、圓形埴輪や土師器のミニチュア高坏が出土し、西側上段テラス平坦面で祭祀が行われていた可能性も浮き上がってきた。六呂瀬山1号墳と3号墳は共に越前の首長墓の証である後円部の張り出し部が付随していることは以前から指摘されている。今回の調査で東側の張り出し部とは別に、西側の上段テラス平坦面でも古墳埋葬に伴う祭祀があった可能性を指摘できた。今後の調査で見つかる可能性はあるものの、テラス平坦面で祭祀が行われていたといわれる古墳は越前ではみられない。また、測量図面からみても同古墳群である3号墳は、1号墳のように顕著に上段テラスが張り出している箇所はみられない。そう考えると、越前の首長墓の中でも六呂瀬山1号墳は、少し異質な存在のように見える。それはこれまで永平寺町の松岡古墳群に築いていた大首長墓が、九頭竜川を挟んだ六呂瀬山古墳群に移ったこと、北陸でも最大級の前方後円墳を築いたことからも言える。六呂瀬山古墳群が立地する地域には、隣接する地域からも人の出入りもあっただろう。そう考えると、六呂瀬山古墳群は越前の外を意識して造られた古墳であるといえる。

また、平成21年度から25年度の間に行われた史跡範囲外の調査では、残念ながら古墳に付随するような遺構等は確認できなかった。そのため、今回調査した史跡範囲外では他の古墳やそれに伴う遺構等はないことが明らかになった。

円筒埴輪については、前章で示したとおり、手縫ヶ城山古墳から続く規格や技法を色濃く受け継いでいる。それは、六呂瀬山3号墳の代でも踏襲しており、かなり長い間埴輪生産の体制が変わらなかつたことを意味する。しかし、これは円筒埴輪のみでみられる現象で、形象埴輪では圓形埴輪から畿内周辺地域でもみられる技法を採用しているなど、外との交流があったことは間違いないようだ。これは六呂瀬山3号墳でも同様の見方ができることから、六呂瀬山古墳群が築かれた時期の越前はけして閉鎖的な地域だったわけではなく、越前以外の地域と交流をしつつ、外の地域に頼らなくてもクニを運営していく力を持っていたとも考えられる。

引用・参考文献

- 安芸高田市教育委員会 2015『甲立古墳—発掘調査報告書—』
- 川西安之 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 卷第 2 号。
- 坂井市教育委員会 2017『白山開山 1300 年—豊原寺シンポジウム』シンポジウム資料
- 坂井町教育委員会 2001『坂井大岡西郷地区遺跡群』
- 坂井町誌編さん委員会 2007『坂井町誌 通史編』坂井市
- 高橋克壽 2017「寄棟造家形埴輪の研究」『古代文化』第 69 卷第 2 号。古代学協会
- 高橋克壽 2019「藤井岡三昧古墳の家形埴輪」『中規模古墳の動態からみた大和政権の地域支配』平成 27 ~ 30 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）研究成果報告書
- 辻川哲郎 2003「突帯—突帯間隔設定技法を中心として」『埴輪』埋蔵文化財研究集会
- 松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005『石舟山古墳・鳥越山古墳・日本松山古墳』
- 松木武彦 1990「蓋形埴輪の変遷と画期」『鳥居前古墳—総括編—』（大阪大学文学部考古学研究報告第 1 収）
- 丸岡町 1989『丸岡町史』丸岡町史編集委員会編
- 福井県 1998『図説 福井県史』

写 真 図 版

図版 1 平成 21 年度 遺構



(1) A-1 トレンチ完掘状況（北から）



(2) A-2 トレンチ集石状況（全景）



(3) A-2 トレンチ集石状況



(4) A-3 トレンチ完掘状況（北東から）

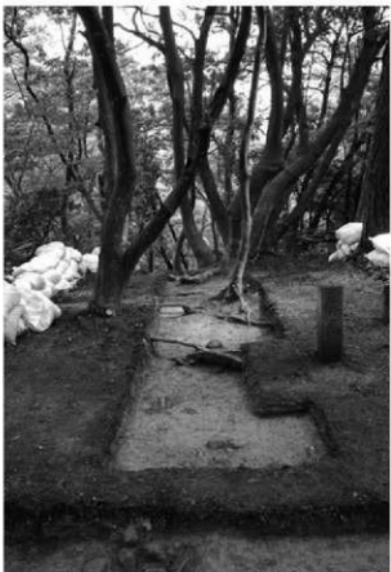
図版2 平成21年度 遺構



(1) A-3 トレンチ南端溝（北から）



(2) A-4 トレンチ完掘状況



(3) A-4 トレンチ東拡張区完掘状況

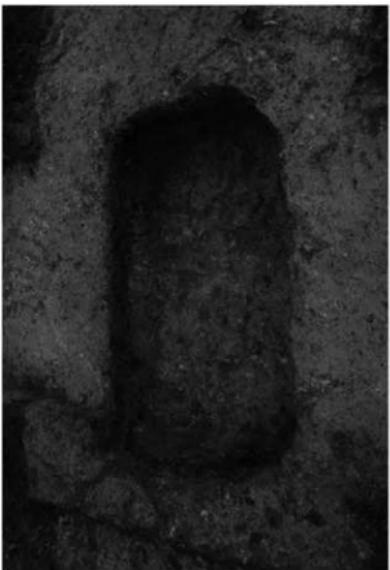


(4) A-5 トレンチ完掘状況（北から）

図版 3 平成 22 年度 遺構



(1) B トレンチ 碠出土状況（南東から）



(2) B トレンチ土坑 1 完掘状況



(3) B トレンチ土坑 2 完掘状況



(4) B トレンチ土坑 2 南壁断面

図版 4 平成 23 年度 遺構



(1) C トレンチ完掘状況（南西から）



(2) C トレンチ完掘状況（北東から）



(3) C トレンチ大型土坑完掘状況



(4) C トレンチ大型土坑南東壁断面

図版 5 平成 24 年度 遺構



(1) D トレンチ完掘状況（東から）



(2) D トレンチサブトレンチ完掘状況



(3) E1 トレンチ完掘状況（南から）



(4) E2 トレンチ完掘状況（南から）

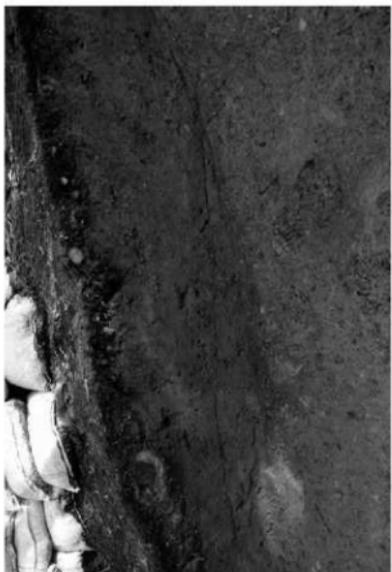
図版 6 平成 25 年度 遺構



(1) E3 トレンチ完掘状況（南から）



(2) E3 トレンチ完掘状況（北から）



(3) E3 トレンチ東壁断面



(4) E4 トレンチ完掘状況（南西から）

図版 7 平成 30 年度 遺構



(1) F トレンチ完掘状況（南から）



(2) F トレンチ完掘状況（北西から）

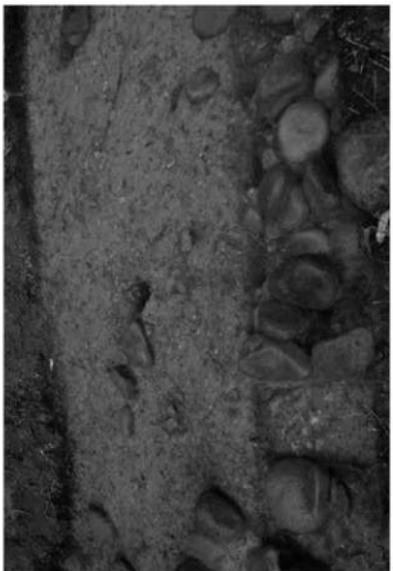


(3) 草石棟出状況 1（南側）



(4) 草石棟出状況 2（南側）

図版 8 平成 30 年度 遺構



(1) 蓋石棲出状況 3 (南側北)



(2) 蓋石棲出状況 4 (南側北)



(3) 莢谷石片出土状況



(4) 砕石出土状況

図版9 令和元年度 遺構



(1) Gトレンチ完掘状況（北から）



(2) Gトレンチ完掘状況（西から）



(3) Gトレンチ西壁断面



(4) 獣害箇所完掘状況（北西から）

図版 10 令和 2 年度 遺構



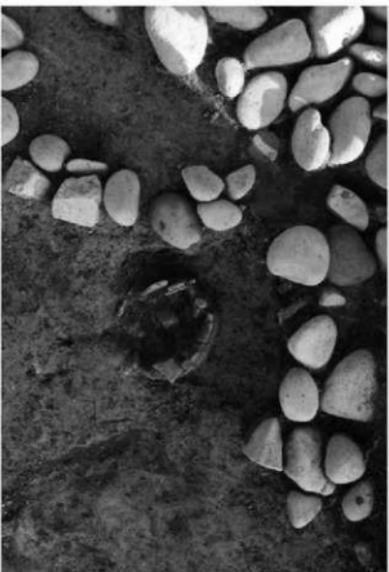
(1) Hトレンチ完掘状況（西から）



(2) Hトレンチ完掘状況（東から）



(3) Hトレンチ下段斜面基底石検出状況



(4) Hトレンチ上段テラス円筒埴輪検出状況

図版 11 令和 2 年度 遺構



(1) Iトレングチ完掘状況（南から）



(2) Iトレングチ完掘状況（北から）

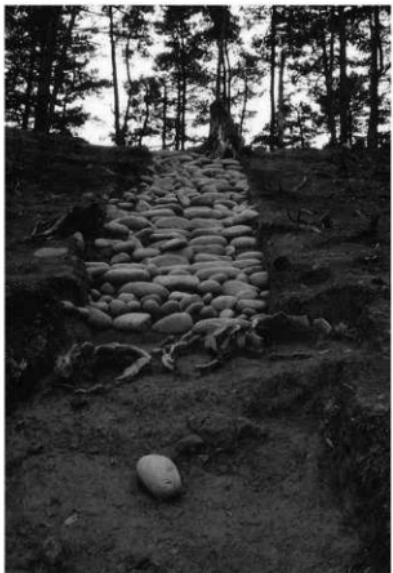


(3) Iトレングチ上段斜面 上段テラス葺石検出状況



(4) Iトレングチ下段斜面 蓄石検出状況

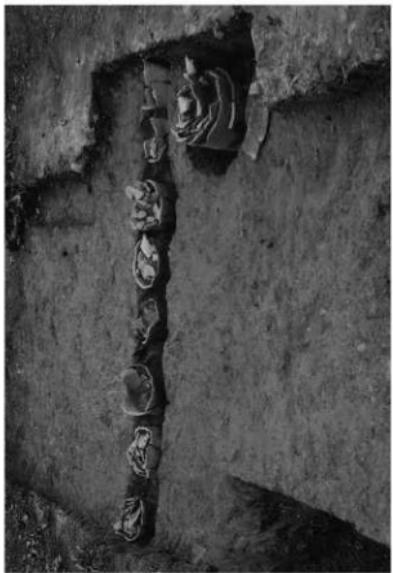
図版 12 昭和 60 年度 遺構



(1) A トレンチ完掘状況



(2) B トレンチ完掘状況（西から）

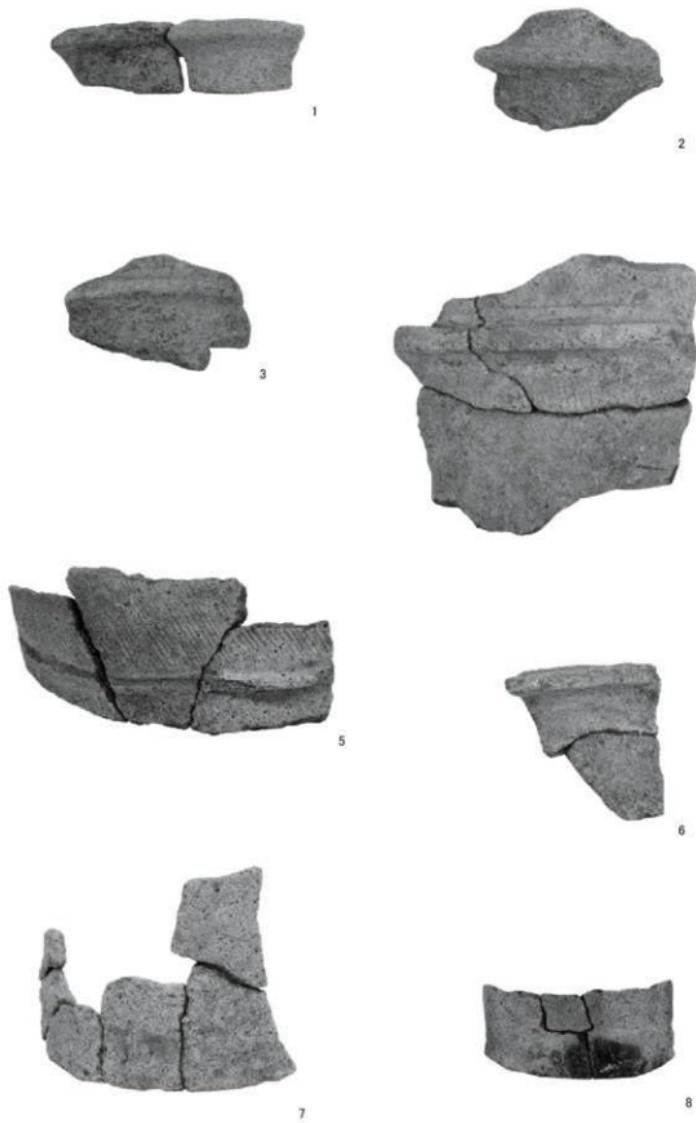


(3) B トレンチ埴輪列検出状況



(4) C トレンチ調査状況

図版 13 平成 30 年度～令和 2 年度 六呂瀬山 1 号墳 出土遺物



図版 14 平成 30 年度～令和 2 年度 六呂瀬山 1 号墳 出土遺物



9



10



11



12



13



14



15



16

図版 15 平成 30 年度～令和 2 年度 六呂瀬山 1 号墳 出土遺物



17



18



19



20



21



22



23



24



25

図版 16 昭和 60 年度 六呂瀬山 3 号墳 出土遺物



(Atr)

1



(B-2)

2



(C-4)

3



(C-7)

4



(C-10)

5



6

図版 17 昭和 60 年度 六呂瀬山 3 号墳 出土遺物



(Atr)



(B-8)

8

7



(C-2)



9 (C-11)

10

図版 18 昭和 60 年度 六呂瀬山 3 号墳 出土遺物



(A-7)



(B-1 大)

11



(B-4)

12



(B-6)

14



(C-6)

15



16

図版 19 昭和 60 年度 六呂瀬山 3 号墳 出土遺物



(Atr)

17



(C-1)

18



(Atr)

19



(C-5)

20



(Atr)

21



(Atr)

22

図版 20 昭和 60 年度 六呂瀬山 3 号墳 出土遺物



(B-1 小)

23



(B-3)

24



(B-3)

25



(Atr)

26



(C-3)

27



(C-9)

28

図版 21 昭和 60 年度 六呂瀬山 3 号墳 出土遺物



(Atr)

29



(Btr)

30



31



32



33



34

35

図版 22 昭和 60 年度 六呂瀬山 3 号墳 出土遺物



36



37



(家形埴輪 棒木)



38

(家形埴輪)



39

(家形埴輪 高床)



40

(家形埴輪 切妻造)



41

(家形埴輪 2階建て)

図版 23 採取遺物



1



2



3



4



5



6



7

報告書抄録

ふりがな	ぐにしせきろくらせやまこふんぐん						
書名	国史跡六呂瀬山古墳群						
副書名							
巻次							
シリーズ名	坂井市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号							
編著者名	中田那々子、堤徹也、小林美里、高橋克壽						
編集機関	坂井市教育委員会文化課						
所在地	〒919-0592 福井県坂井市坂井町下新庄1-1 TEL (0776) 50-3164						
発行年月日	2022年3月31日						

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因 史跡周辺部の 遺跡確認調査	
所収遺跡名	所在地	市町村						
國史跡 六呂瀬山古墳群	福井県坂井市 坂井町下久米田・ 下久米田	18210	史 48	36° 07' 04"	136° 18' 55"	2009.8.24 ~ 9.30	131.5 m ²	
						2010.7.26 ~ 9.30	120 m ²	
						2011.8.29 ~ 10.11	55.5 m ²	
						2012.9.10 ~ 10.19	40 m ²	
						2013.8.26 ~ 9.20	40 m ²	
						2019.2.18 ~ 3.12	40 m ²	
						2020.2.25 ~ 3.19	4.45 m ²	
						2020.11.4 ~ 12.7	56 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国史跡 六呂瀬山古墳群	古墳	古墳時代	古墳		円筒埴輪・形象埴輪			
要約	北陸最大級の前方後円墳である1号墳の調査を行った。調査の結果、古墳時代中期初頭頃と思われる円筒埴輪や形象埴輪、家形埴輪等が出土している。							

坂井市埋蔵文化財発掘調査報告書

国史跡六呂瀬山古墳群

令和4年3月31日 編集・発行

発行・編集 福井県坂井市教育委員会

〒919-0592

福井県坂井市坂井町下新庄1-1

TEL (0776) 50-3164

印 刷 株式会社 ワタナベ印刷